

聖書に導かれて

南無妙法蓮華經

- | | | |
|---|------------|-----------|
| 1 | 白くて紅い日々 | H 2 5 年 |
| 2 | 真由子先生に捧ぐ | H 2 6 年 |
| 3 | 真由子先生に捧ぐ 2 | H 2 6 年 |
| 4 | 正義に病む男 | R 2 年 7 月 |

愛は自律し柔和な心に光りを見出す。

義人
令和 2 年

目次

義人の想い	(2)
ヨハネ第一の手紙	(4)
白くて紅い日々	(6)
真由子先生に捧ぐ 1	(44)
真由子先生に捧ぐ 2	(162)
正義に病む男	(265)

義人の想い、ゝ真実の愛ゝ

私が神、再臨したイエスであることを信じてほしい。私は自覚と聖書の導きによって生きています。私は世に問いたい。ルサンチマン（恨み）からではなく、人々を弱いとか強いとかに分ける価値観を、もう一度再確認してほしい。後ろからぼつ立て、競争に仕向け、苦しむ人々の姿を見て、悦に入っているのはサタンです。勝つためにはどんな汚いことでもする。負けたものには容赦ない侮辱。そんな世界はもう終わりにしないとけません。どうか皆様のおおらかな賛意をください。私は私の書きものが世に流布されることが唯一サタンへの対抗手段であると訴えます。真実の愛があるからです。ここに共鳴した善人に神の国、不老不死、永遠の命が約束されるでしょう。すべての経緯が判明します。神の国は近い。永遠の命を確かなものにするため、愛を確実なものにする。すべてはひとりひとりの信仰にある。私を信じて下さい。私は多くの方々が福音にふれ、幸せになり、神の義、愛に、涙も消え去ってゆくことを望んでいます。欲望から放れ、美しい想いを抱くこと、大事です。不完全な人達も誠意と思いやり、信仰によって神の義を抱き、完全円満な姿、成仏と呼ばれる境涯へと誘われてゆきます。日蓮は久遠元初の仏であり創造主（神）です。つまりイエスと日蓮は同一の存在。復活と成仏、同様に愛に包まれた暖かい境界に

あります。私、梶原義人はその名の通り、煩惱が燃え盛る、火事の原野にひとり立つ正義の男です。皆様に真実の信仰を掴んでいただきたい。一人でも多くの人が神の王国の住人になれるよう衷心より願う次第であります。私は三位一体の支持者です。聖霊は固定観念から放れ自由に生きていくことの大切さを体感によって知らせてきます。そして聖書とのダイアログ（対話）は私にとっての神への自覚を促す基本です。すべての完結が私、義人によってなされるということです。人々の不安を煽るような終末論は展開致しません。ただ何かが生まれ起こるはずです。それだけは確かです。皆様と共に幸福へと歩んでゆきたいです。本物の信仰を抱いて。「子たちよ、誰も惑わされてはならない。彼が義人であると同様に義を行なうものは義人である」（ヨハネの第一の手紙 3章7節）ご覧下さりありがとうございます。」「義人の想い」と銘打って、これにて私のあいさつに代えさせて頂きたいと思えます。尚、私の他の作品もPDF（電子書籍）で無料、開放しています。是非、そちらへと宜しくお願い申し上げます。この小道が広く大きな愛の街道となり皆さまの幸福に必ずや貢献されると信じて疑いありません。では、いざ、よろしく。

新約聖書

ヨハネの第一の手紙

第3章

わたしたちが神の子とよばれるには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたち、すでに神の子なのである。

世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。

2 愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものになることを知っている。その御姿（みすがた）を見るからである。

3 彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあらわれるように自らをきよくする。

4 すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。

罪は不法である。

5 あなたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであつて、彼にはなんら罪がない。

6 すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯すものは彼を見たこともなく、知ったこともない者である。

7 子たちよ。だれにも惑わされてはいけない。彼が義人であると同様に、義を行うのは義人である。

白
く
て
紅
い
日
々

H
2
5
年
作
品

二十五年程以前のエピソードを振り返ります。

マザーテレサにお聞きしたい。

あなたは自己犠牲の精神により行動を起こされたのだと私は信じています。

しかし、世の中には金儲けだけに興味を持ち、身の周りにその果実をはべらせ嬉々として
いる奴もいる。あなたはそんな人達に怒りを覚えなかったのか。

教えて欲しい。私の解釈は厳格だろうか。

だれでも自分の労働の対価として得たお金で欲しかったものを買つ、または夢の実現に使
う、これは許されるのではないだろうか、しかしたえず自分の欲望に身をまかせ奉仕の心
など露ほども持たぬ守銭奴では人間としてはやはり考え物だろう。

巷にはたくさんいる輩だろうが存在する場所が悪かった。そこは老人病院という福祉施設
であり極めてヒューマンな精神が必要なところ、そうなのだ。本当はそうあらねばならぬ
所なのだ。

しかし介護法が施行される以前の実際は、モラルの低い、言い方は悪いかもしれぬが社会
の底辺層が就労する機関としても位置づけられるお寒い現実があった。低賃金、重労働、
慢性的人手不足、働く人たちの心は荒廃し患者を含めはびこる弱いものいじめ。これに先
程の変なプライドを持った守銭奴たちがからみあいそこはまるで魑魅魍魎が跋扈する一大
地獄絵の世界と化しているのである。

その中で孤軍奮闘、己の持てるすべての力を尽くし、大きな波にぶつかり、法華経にいう娑婆寂光土の現出へ、脅えながらも命を懸けたひとりの男がいたのであった。

2

正面玄関に入ると左側、ガラス窓を挟んだ部屋が受付と事務室だった。丁度その仕切り目に安物のソファと机が置かれ、この一角が応接の場所であつた。季節はまだ梅雨とは呼べないが雨は落ちてこないまでの曇空、6月の半ばであつた。

男の名は横井隆。彼は俯き加減に首を落とし静かにその場に入っていた。彼は痛いほど分かつていた。颯爽とした態度は生意気に見られあまり得ではないことを。

彼自身はもともと明るい性格であつた。しかし二度の離職を通じて心は寂寥感でいっぱいであつた。

一度目はプラスチック材料の商社。度重なる上司からの恫喝で心身共に萎縮し心は不安感で満たされる毎日、世の中そうしたものなら大きな賭けにでたのが二度目の仕事、コピーライターであつた。

ここも彼にとつては安住の地ではなくシビリアな世界であり才能を疑問視され、僅か三カ月で解雇されてしまったのである。

このクビにされたという現実はその後ずっと尾をひくのであつた。

受付には三人の中年女性が座っていた。ひとりには隆に一瞥けるとフンといった表情で顔向きを変えた。もうひとりには顔見知りの女であった。

病院は隆の住む町にあり彼の家の近所から何人も勤めに来ていた。女は隆の家から北側に道を挟んで三軒目の雑貨屋の嫁で若林富子といった。富子は二ヤと笑ったがなにも言わなかった。彼女には苦い思い出があった。

ここで話は飛ぶがこの病院の理事長の名は谷 文昭といった。そしてその愛人といっているのか妾と呼ぶのが相応しいのか、利と欲で結びついているのがこの総婦長山崎恵理子であった。

恵理子はその立場が不安定だと思っているらしく権力に固執し、ときには残忍にそれを行使した。性質は嫉妬深く特に恋愛に始まる人間関係に対するそれは異常であると言わねばならないだろう。

それがあるためであろう、病院内の空気は極めて神経質なものであった。

富子の嫌な記憶というのは、隆も知っている彼らの近所に住む桑野康子と言う女が数年前、薬局に勤めに入ってから来たときのことであった。富子は愛想よく「やつこちゃん、来たが」と同年輩の誼みからも声をかけ笑いあった。それを婦長が見ていた。「あんたらここは職場やぜ、井戸端会議はよそでやりなさいよ」富子はもともと気のいい女であったがそれ

からは慎重になった。

そのことが隆に向けられた笑みに意味付けられていた。それは近所の誼みはあるけど表立ってなにする事もできない。だから早くこの空気を読んで自立して行きなさい、でもそんなに甘くはないわよという激励とも、ある種の冷たさともとれるものであった。

最初に隆に冷たい視線を送ったのは山辺美佐江といった。そしてもうひとり深川君子、笑みを浮かべながら大胆なことを言う性癖を隆は後に知ることとなる。

隆が入り口に俯き加減に立っていると、話が出来上がっていたのか富子が事務室の方から頭の毛が薄くなった男と現れた。今日は隆の就職面接の日だった。

男は事務長で笹山行雄といった。終始、赤ら顔で顎を引き上目づかいで目を合わせない様子は信用出来ない不誠実さが漂っていた。

彼は隆にシートに着席するよう促した。隆は一礼するとシートに腰を下ろした。笹山の脳裏にあつたのは公務員の給与に準じた最低賃金の給付を通達する機会の一点であった。隆はデザイン事務所を解雇されたばかりで消極的で自分に対する自信を喪失していた。笹山の人物を見抜かず、依存的になつていた彼は「私はクビにされた男です雇ってもらえればありがたいです」と自己宣伝が必要な企業社会では考えられないことを言っていた。

しかしそれは笹山にとつて渡りに船であった。隆が医療事務として雇用されることは決ま

っていた。

彼の母親と、遠縁にあたるボイラー技士の名貸しをしていた豊田善次郎との間に話がおこり彼のコネで就職することになったのだった。

落ちこんでいた隆に酒小売業を営んできた母親昭江は「酒屋があるから大丈夫、給料が安くて、今度は言われたことさえしていればいいのだから愛友病院に事務としていかれ」と励ました。

笹山は「それは知らなかった」と軽く微笑むといっそう顎を引き、脇から一冊の手帳のようなものを隆の前に差し出した。それは公務員の給与体系に関するものであった。笹山はその一番上に表してある数字をボールペンでなぞると「この金額になるがね」と絞り出すようにためらいを振り払うように強い調子で捻った。

隆はただ茫然と十万円にも満たない金額を眺めながら弱々しく「はい」と静かに頷いた。彼に不足は無かった。

営業マン時代は貰う金はよかったが、その分着るものや食べるものに費用がかかった。コピーライターの見習い時代はその名の通り見習いに相応しい低給料だった。

彼は薄給に慣れていた。彼は金儲けを諦めていた。お金を軽蔑している節もあった。それには父親を早くに亡くしたがひもじい思いもさせず大学まで行かせてくれた母親があり、隆に金の苦労は見せなかったということは結果的に彼にとつて金に対する有り難みの欠落

を招いたという皮肉があつたのである。
それではなかった。

彼の父方の祖母は商売を営んでいるにも拘らず、自分は薩摩藩士の血を引くもの土族の出身であると言つて憚らず商人を低く見ていた。隆の幼い頃、母親は勤めに出ており彼は運悪くも、その祖母の思想とまではいかないが、片寄つた考え方の中に不用意にも曝されたのであつた。三つ子の魂百まで。いつしか隆の中に、ボロは着ていても心の錦、どんな花よりきれいだぜといった価値観、お金に対する不潔感が増殖されていき、同時に質素、儉約を美德とする、手前勝手な武士道めいたものに裏打ちされた自己本位な正義感が、彼の行動に現れるようになっていった。

それは祖母が日夜繰り広げる狂態が原因でもあつた。テレビに映し出される時代劇の悪役に向かつて「おまえが悪いんだ。こんちくしょう」と罵るのだ。一方的な裁き、勧善懲悪な価値観、このことは少年の素の心にそのまま浸透していったのだ。

彼は所謂いじめっ子になつていった。異質なものの、汚いもの、弱いものを嫌つた。相手を仲間外れにしたり、酷い言葉を浴びせたり、ときには叩いたりした、彼は当然のことをしていると考えその件についての罪悪感などは微塵もなかった。

時がたち、そんな隆であつたが幾度の就職で社会の厳しさも知り学生時代の自由奔放さは表立つては姿を消し真面目でおとなしく従順で優しい人間になつていた。

彼は彼を受け入れない世間を恨んでいた。また同時に自分の方に原因があるのではないかと考える謙虚さを持っていたのも事実だ。すべてにつけて金儲けは彼に馴染まなかったのである。そのことは薄々彼も感じていた。

そのことが福祉の道に進むことをよしとしていたのであった。でも人間とは本当に複雑な生き物である。物事の善悪を問いつつもその基になる自らが覚束無い。ときにあらゆる価値観、感情を有している場合などは。隆もそういった人間だったのである。

高邁な人格を目指し、未熟を惜み完璧を求めていた。だがそれが営利社会での評価とは別に、道徳的に他人を批判し優劣を考えることにつながっていったのはまことに悲劇であった。

彼は見方を変えれば非常に向上心が旺盛だったのである。そして大人、組織人として目をつむり肯定しなければいけない部分を否定する方に回っていったのも狂気の沙汰だったと言わねばなるまい。また彼は自分の自然な気持ち感情までも煩惱と疑り、コントロールするとは聞こえがいいが圧殺し周りと合わせるようなことが度々あった。そしてそのことに関して理解してもらえなかったり、厚かましく乗りかかってこられたりすると議論の余地もなく正当と信じた、怒りがメラメラ湧いてくるのであった。

話が大きくとんだがここで隆の弱気のものところを知って頂きたかったのである。笹山は隆の無抵抗さを訝しげに思いながら面接の終わりを告げた。

隆の家族について少し語ろう。

昭江はたくましかった。病弱で晩年はアルコール依存症になっていた夫がいた。

気位が高く弱みを見せないとする姑は「出ていけドスメ口」と彼女に罵声を浴びせかけた。

確かに昭江には勝ち気な所もあったが空襲の焼け出されの中、無から出発してきた強さがあつた。

姑ハツの理想と違うとはいえ洋服店に勤めていた彼女は酒屋の嫁には適していた。昭江も若かつたのだらう。遠く鹿児島からだれも知るものもない北陸の片田舎に移住してきたハツの寂しさまでは受けきれなかったのだ。そして後にハツの昭江への仕打ちは彼女流の昭江への大人としての教育だったと隆は確信する。実を結んだかは今も判らない。

ハツには二人の男子があつたが一人は戦時中肺を患って亡くなっていた。そしてもうひとりが昭江の夫であり、隆の父親である強であつた。強は優しい人であつた。

しかしいつ破裂するか分らない脳動脈瘤を抱えての生活は不安から解放されることはなく、酒に入り浸る毎日となり、ときに昭江に手を挙げた。

外部からはそのように見えたが、なぜか昭江はそんな中であつても子供達には強の悪口は

絶対に言わなかった。酒を飲んでの醜態の意味は人間の業であり、本当は立派な人であると言つてきかなかった。それは夫婦にしか分からない、彼の義侠心からくる苦しみがあったのであろう。きちがい水を買つて生きている自分、つらかつたのである。

家の中はいつも騒然とし子供達の教育や成長にとつて良いわけはなかった。

そんな中昭江は隆と妹になる夏美の二人を連れて婦人相談所にお世話になつたこともあつた。隆は小学二年生であつたがそれがどういう意味を持っているのか十分には理解出来なかつた。

ただ後に一緒に部屋にいた若い女の人がシンナー中毒だつたことを知つてそこが一種の駆け込み寺であるのを理解した。

昭江は強情で短気なところはあつたが、本当は気のいい亭主思ひの女であつた。再三に渡る帰宅の促しに迷つていた昭江ではあつたがハツからの申し入れに帰ることを決断した。やはり病気の強を放つて置くわけにはいかなかつたのである。そして昭江にも行くところはなかつた。

昭江の味方は家長の責任をなんとか果たそうとする舅の松次郎であつた。神妙に昭江に帰宅してくれるよう文をしたためたハツであつたがその時になつてみると木阿弥で不満足な表情は変わらなかつた。周到なハツ、計算も見える。

松次郎は病弱な我が子に尽くしてくれる昭江に心の中で詫びていた。三歳の時、隆はネフ

ローゼを悪い家族に心労をかけている。その時もただひとり黙ってお金の工面をしたのが松次郎だった。

松次郎とハツは夫婦仲があまり良くなかった。共に再婚同士であつた。松次郎は氣位の高いハツと優しく穏やかであつた死別した前夫人アヤを悲しくも比べていた。

アヤは松次郎が大阪の紡績工場に勤めていたころそこで働いていた女工であつた。苛酷な条件のもと体調を崩したアヤであつた。「なにもたまたしとるんや」男衆が罵声を浴びせた。

見兼ねた松次郎は「すんまへん、こいつなんや調子悪いみたいで」となかに入ろうとした瞬間「なにゆうてんねん」松次郎は右頬を殴られ、拍子に床に転倒した。「まつさん」アヤが叫んだ「松、どないおもとのや」松次郎は平伏し「すすすすいません出過ぎたことを……」「アヤちゃん本当に具合悪いんです。ほろこんなに熱が……」「なんだと」覗き込もうとしたとき、それまで軽く咳込んでいたアヤが嘔き出すように喀血した。男衆は顔面真っ赤に血が花のようにひろがると「わあ」と奇声をあげどこかへ逃げていった。

松次郎はアヤを妻とした。一年後アヤは逝った。

松次郎はアヤの郷里、島根へ遺骨を納めた。傷心の松次郎であつたが五年後上役の勧めもあつて料亭の仲居頭をしていたハツと再婚したのであつた。

ハツは鹿兒島の士族の長女として生まれ、初婚は電気技師の男性であつた。転任先の樺太

に付いていったものの寒さと孤独で一年もせずに半ばひとりで逃げかえってくる形となつてしまつたのである。

ハツは生前よくオットセイの話隆隆に語つて聞かせた。唯一楽しい思い出だったのであらう。また鹿児島島の民謡を唄つてはよく泣いていた。その情緒不安定さは隆隆に多大な影響を与えていた。

松次郎とハツはいつしか寝室も別々になつていた。

そして松次郎が脳溢血でこの世を去り、強もあの世へ旅立ち、ハツは昭江、隆、夏美の見守るなか自宅で最期を迎えた。

五年の間に三人が逝つた。ひとつの地獄は終わつたのである。世の中は高度成長の真つ只中であつた。

4

ちよつと嫌になつてきた。本当に自己犠牲なんか必要なのだろうか。

マザーテレサだつてカトリック教会のバックボーンがあつたわけだし。私はやはり勘違いしていたと最近思うようになってきた。

隆という人物を自分に見立てて拙い物語を著そうと思ったがここにきて何か違うという気がしてきた。

当初考えていたこの物語の筋と結末は怠惰と拝金主義がはびこる中、自己犠牲を本分とした隆、しかしそれは片寄った正義感と精神論に裏打ちされており、個人を大切にしたい労働者としての立場とは、哀しきかな、相入れることはできない矛盾したものであり、プライド、嫉妬、野望、恋、出世願望、打算、理想、意地、夢、策略、挫折、失敗、効率性とパワーハラスメント、セクハラ、モラハラなどがない混ぜになって隆を取り巻き、また出入りし、彼の道徳心と信仰心は軋みをあげ心配と恐怖といったストレスになり妄想と散乱とが彼を錯乱に導いてゆくというプロットを三国志のようにダイナミックな群像劇に仕上げてゆくという大がかりな構想だったのである。

が、如何せん怠けがせがつきどうしようという目的もはつきりしないのでモチベーションが持続しない現実があり、時間の経過とともに面倒臭くなってきたのである。

しかし就く仕事ごとにダメ出しを食らい、いい意味での怒りが湧いてきた。寺島しのぶさんがベルリン映画祭で賞をとったことで一般に注目されたキャタピラーの若松孝二監督とお話させて頂く機会があったのであるが(監督は記憶されていないかもしれない)創作の推進力の原点は怒り、憤りだと言っておられたがそのとおりだと思う。

昨今どこの営利組織も自己犠牲など結構といながらもドライに首切りを行いもつと非人間的な自己犠牲を強いるという笑えない皮肉な様相になってきた。

格差社会、影に埋没した派遣や非正規職員の問題、自殺者三万人の世界。ブラック企業、ボエム産業。若者たちの貧困、自分さえよければいいのか。

青臭いといわれても声を大にしていきたい。宮沢賢治は言った「世界のみんなが幸福にならずに個人の幸福はない」と、道德のくびき、就縛からようやく解放された今、真の信仰。

競争はよくない。人々は助け合って生きるべきものだ。

なにしろ平和とはそこからまれるのではないだろうか。花粉症に苛まれている。とやかく言う人もいる。そんなデリケートな人間かと、万事ことあるごとに指摘する類いの人たちだ。

以前は自分のことを思っ注意してくれているのだなと感謝しなければいけないなどと殊勝なことも考えてはみたが、なんのことはない当人の価値観の押付けか、相手を引き下げて自分が上にあがろうとする、いやらしいみえすいた手段なのである。

振り返ると隆に名を借りた私はある種、キリスト教の精神と呼ぶか、自己犠牲を誰もが目指さなければいけない絶対的な価値観だと思い、人間のもつ欲望と悪意を混同して指摘し敵対する俗人を作りだしてきたことにおいてみれば同様なことだったのである。

唯物論者のようだと思つていた人は、なんのことはない、生活をエンジョイすることを目的とした、たあいまい普通の小市民であり悪魔のような大悪人とは違つていたのである。ただ小市民の悪意ほどある面では醜悪で許しがたいものに見えることもあり、いじめがその際たるものであろう。嫉妬、ねたみに乗じた自己存在の顕示がある。

過去を振り返つてみて自分の不注意、狭量から問題が起きたのだろうか。分析、批判すると混乱し新たなストレスを生み出すという意見もあるが、大人の顔をしていじめのような人権にかかわる問題をやりすごすことはいまだに苦々しい思いがしてできかねる。

私はやはりものを書いたりなにかの媒体を通じてなにか発表したりするひとは真面目でなければいけないと思う。あらゆるものに対し真摯でなければいけないと考える。

それとなにか大きな力、神でも仏でもいいから畏敬の気持ちをもつて信じていなければいけないと思う。

それは人の行動を縛ることを目的とする為ではなく、思いやりを持つてみんなの幸福を求め造り出すことに貢献する為である。

ただ自分が認められただけの文章には意味がないのである。

作品としては虚構であつてもリアルな感覚は抜群であつて胸に迫ってくる説得力は素晴らしいものがあり事実の中で見落とされがちな大切な真実をえぐり出しているということが大事なのである。

大変申しわけないが小説という形をとるとどうも筆が進むのがスロモーになりしんどくなるので散文調にしました。殴り書きみたいで読むに値せずとか、楽ばかり考えているのかとか、お叱りを受けそうですがこのままでは一冊の本も書けそうもないのでこの形をとりました。謝るのも変かもしれませんがすいません本本の神様。

ということで唐突ではあるが私は今郵便事業株式会社の期間契約社員、いわゆる非正規雇用である。現状は厳しい。

そしてのんびり屋であるから文章をかくということも十年前演劇総合雑誌の新人戯曲賞に応募して以来のことになる。そのときは詳しくはいわれないが第一次審査だけ通過した。精神障害者と宗教と家族愛がテーマの喜劇だった。

大賞はイラク戦争が勃発しているのにそんな危機感のある作品がなかったとして該当するものが出なかった。今なぜまたかこうかと思ったのかというと単純に生活に困ったからである。

こう書くともるでなにか発表するだけで金が入ってきて天国状態になると思っている浅はかで傲慢な人間に感じられそうだが、生活がきびしいのと、とりあえずこれしか考えつかない現実があるのでこんな単純計算のようなことを語りました。

深夜勤務の肉体労働。パチンコとゲームの話が出来ないから若者に愛想をつかされる身。本当のことをいうと私は統合失調症の精神障害者、そのせいなのか、睡眠前に飲むハルシ

オンの害なのか動作と記憶力が鈍く失笑の対象となっている。寄る年波のせいもあるう、高血圧の治療に通っていた医院で最近、橋本病(甲状腺機能低下症)との宣告を受けた。

新陳代謝が悪くなり発汗がうまくいかなくなったり毛髪が抜けたり倦怠感におそれたり、いろいろあるみたいだが自覚症状はそれほどなくそういえばなんとなくだるいなあと思う程度である。

前述の小説の世界に戻る。結局あの時、問題だったのは登場するはずだった、ふたりの男の存在にあり、そいつらが仕事をサボってばかりでそのうえ立場をよくしようといちいち他人ごとに干渉し、そのことに神経質になった隆は腹立たしさを通り過ぎ、殺意まで持ったことであつた。単純に言えばそれだけのことで隆は怒り憎しみは己の欲望からくることを知るべきだったのである。自分の思うようにはひとを変えることはできないのである。隆は不遜であつた。

さて、ただそれだけか、違うだろう。結局民主主義に負けたと言えるのではないか。己の主張、要求をする。パイの奪い合い。それは見ようによつては喧嘩ともいえるだろう。みんなが自分の為にする。そこで振り分け分配がなされる。隆はそのルールから外れていたのでは、いや風車に向かうドンキホーテのように立ち向かっていたのではないだろうか。

そしてここで大きな謎に気付かれたであろうか。なぜ隆はそんなにしてまで自分を痛めつ

けるような思想めいたものに至ったか。実はそこには触れなくなかった。出来ることなら避けて通りたかった。しかしそうすればいつべんに作品としての説得力が見えなくなってしまうだろう。穿つたいいかたをすれば仏つくつて魂入れずということだ。とりもなおさず私にとつては重大な愚かしく悲しい秘密の暴露に繋がることなのである。やはりやめよう、世にでたら侵害を被る人もあらわれるかもしれない。なにせその罪悪感ときたら一日中でも隆を痛めつけているのである。当人に見ればそれほど尋常ならざるものであったとご理解を得ることができるとしたらこれにて許して下さい。隆は周りに拒絶されるように立ち振る舞うことで自分を罰していたのである。

もうひとつ理由がある。「天平の薨」からの影響である。ご存じのとおり井上靖氏執筆による、鑑真和尚の渡日という歴史的出来事の前後におのおのの使命を思い、感じ活躍した留学僧たちの物語である。

なかでも普照と業行というふたりの僧侶の生き方に惚れ込んでしまったのである。自らの名利よりも仏陀の教えが広まることをよしとする。そのことの為に真摯に命まで懸ける。罪人となった隆には、なにかひとのためにすべてを懸ける、それしか生きる道を見出せなかったのである。

だが隆はそんな立派な人格ではない、出世もしたければ色欲も激しい。そういう隆にとつては否定したくなる部分が否応なしに表裏に現れてくるのであった。

そんなこんなだから先輩たちとの摩擦、軋轢は避けて通れぬものとなり、隆自身は高潔で仕事の出来る自分が上に行くのが当然と、驕慢で悩ましい矛盾した考えを持つに至り悲劇へと向かっていったのである。

複雑といえば複雑。単純といえば単純な話であった。かれは改革の名を借りて己の野心を満たそうとした大悪党だったのかもしれない、ああ馬鹿な男である。

しかし彼が病気で倒れたあと愛友病院は確かに変わってきた、お互いを思いやり、当たり前前に働き、素直に生きようという気運が醸し出され、労働組合もすつたもんだの拳句、誕生し経営者も移った。

時代は介護保険サービスへと進んでいく、そろそろ第2部へと駒を歩ませよう。

その前に引つかかるのは隆の色欲についてだが彼ほど処女願望の強い男はいなかったであろう。しかし同時に本当はそんな事は気にしない心の広い奴に見られたいという気持ちも持っていた。ま多少神経質な当たり前な男のタイプだったのである。成長していくうちに程よい歩幅をとるようになっていくはずなのだがそうはいかなかった。独善的で潔癖な母親の影響が強かったのである。

結婚前にオトコと深い関係になるとは普通の女性としてはやはりおかしいのではないかという妄念は払い切れなかったのである。

そのことは婦長とは相容れないことになっていく、また幾多の女性をも敵に回すことにな

ってしまったのである。

純潔について寛容になっていくのには個人差もあるがそんなことは気にならないくらいになる大きな体験が必要なのであろう。

しかし隆は幾年たつたいまでも本場の貞操観念は必要であると考えている。オトコでもオンナでもそれがパートナーへの誠実義務であると。

ここで隆の執った策謀というか方法論を紹介しておく。みんながいがみ合っていた愛友。部署、年齢、住まい、経歴などおよそ違いという違いを不満の対象として仲たがいでいるのであった。

隆は自分が敵に回ることによってみんなをひとつにしようと計画をたてます。そうしていくなかですこしづつメッセージを投げかけます。

真の謀略家は自分から仕掛けるのではなく自然の按配に少し手をかけるとなにかで読んだことがあります。

隆にとつても想定内のことではありませんでしたが計算外ということは結構出てきました。

愛友病院の頑なで神経質で貧欲で、ある意味では幼稚な雰囲気は少しずつほぐれてきました。申し訳ない。なぜ彼がこうまでして入れ込んだかの大事な目的をはなすのを忘れていました。

目的は考人を人間として逝かせる為でした。一番弱いのは患者の老人達です。弱いものい

じめが起きれば最後に行き着くのはそこです。

就職したばかりの隆の目と耳に入ってきたのは老人の叫び助けを求める声と虐げる看護、介護人の姿でした。落ち込んで気力の失せた隆にとってそのことの改善は生きていく目標であり張り合いとなっていたのです。

自分が問題を起こして叱責をうけみんなの注意を喚起しそのことで改革に繋げていく。それが手法でありました。

ときに恋愛についてのそれは常軌を逸しているのではということもあったが、隆自身もそう思っていた。私は病院内の暗く、神経質なムードを一新しようとよく大きな声でエールのつもりでみんなにおどけてはじめていました。しかし悲しいのは善意で献身的に、介護、看護にあたっておられた若い女の子を含め女性たちの心を結果的にふみにじることになり大きな傷を負わせてしまったのではないかと悔悟の念があり慙愧に堪えなく、いまはただ頭をたれるしかないということです。

そのことは隆の病の原因は恋愛、片思い、失恋にあったと自らの責任のがれの言い訳に上司が使う、よすがとなった。

隆が本気で好きになろうとした女性もいた。そのことに介入してくる好奇なだけの人間には怒り心頭であつたことは事実である。そしてそのことへの復讐心が病をえた誘因であると指摘されれば否とは言えないものがある。

私の本当の目的は、怠惰な自己中心的な我が儘者たち、貧欲な金権主義にはしる守銭奴たち、そういったものが生み出す悪意から、いたいけな真面目な人々を正義で守りたいその一点にありました。

いろいろな責任の所在とかを考えると保身に走る人が大半だったでしょう。

しかしそこには信頼から生まれる平和は決してなかったでしょう。

やはり職場とは鬼の住みかであって人が素直に当たり前に思いやり、愛を尽くし働くそのことは困難なのでしょう。「善意で殺されるひと、悪意でめしにありつける人、傍観して救われた命、そのつじつまあわせに生まれてきたばくら」というたのフリーズがあります。

利己主義とは違う、確かな民主主義というものがヒエラルキー(権力構造)で成り立つ職場に存在するわけがないなら、やはり私はあいつたトキの声を挙げねばならなかったのです。

悪意の顕在化、潜在化、いまも社会には不平不満をもって蔓延しております。自分への固持、執着、そして欲望への満足をしらない渴望。

当時私の直属の上司的立場だった女性幹部はやたら労働者の権利を主張するため正式な役名は与えられてはいなかった。他の部署、職員にたいしても寛容さがみられず、私の出現以前のトラブルメーカーであった。亭主が町の行政の、お偉いさんになる。金銭に余裕が

出来たようで、辞職したことを後に風の噂で知ることになる。この人を、非道を犯す者の見せしめにするため、拝金主義を標榜する大きなターゲットとして、無謀な戦いを私は仕掛けた。これは確かに愚かであった。

しかし義に生きるものの行動はすべからず愚かに見えるもので神の愛もまたそのようなものなのです。私は自分自身の境遇が辛く、悲しいと思ったことはありません。ただ、いまいろいろ見聞するといまだ人々のなかに愛を確立しえないのが本当に哀しいのです。(この時点で私は人の心に住むサタンを認識していなかった)。

生活のなかで傷ついている人たち、この負の連鎖は自分もそんな立場になるかもという想像力からくる恐れと、なにより愛に基づき思いやりのみ、しか、それを断ち切るのは不可能だと思ふのです。

当時、私は事務員であったが、理事長の運転手もときどきやらされた。自らくだらん道徳律にしばられ同僚の悪口、批判さえ一言も話さなかった。

私は仕事と割り切っていたが、興味深い彼の発言を受ける、「優秀なやつはみんな戦争で死んでしまった」彼は笑っていた。しかしそこには生き残ったものの真実、負い目、成さねばならぬ何があってもという強い使命感があるのを感じた。

時代は介護に関しての過渡期であった。つなぎ、拘束は人権蹂躪と忌み嫌われて行く。

まともな医者はいないな医療判断まで下す総婦長。人事全般までも担っていた。確かに

彼らは悪人かもしれない。寿司を用意し看護婦の人員不足を誤魔化すのに一カ所へ集合させる。さきほどの女幹部がたずさわっていたレセプト請求。なにかあったのではと疑りたくなる。

話とはとびになるが総婦長は「浪花節だよ、人生は」が好きだった。桃園の誓いではないが理事長の事業への夢と野心への賛同と協力を唄に託していたのではないだろうか。子宮力んで亡くなったそうだ。

年配で職員の募集を担わせられていた男は言っていた。「養鶏場におる、おばちゃんたちならどうかねえ」つまり糞には慣れて抵抗はないだろうということだ。介護への意識はそれほど低かったのである。

隆は夜中、病院の敷地内にある理事長の妾宅である総婦長の館の玄関ガラスを蹴っていた。「出てこい」彼は叫んだ。母に連絡が入り彼女は彼を押しとどめた。彼は両手を広げ十字架につけられたように、鳥も獣も虫、そして人間も生きています。もう酷いことはやめて下さい」夜空に向かって叫びそれから母の頬に唇を擦りつけた。

その翌日、彼は精神科閉鎖病棟で薬漬けにされた。諸葛孔明のようにはいかない。隆は弱い人間である。

その後、隆の発病を知ってあんまりあくせくしていると自分たちもそうなると警戒したやつらは平和をつくることに心を向けはじめた。

隆の自己犠牲は実を結ぶこととなった。

6

隆は徹底していた。

カラスのように貪欲で男まさりの女。

ほとんどの連中であつたが些細なミス指摘し罪を定め責めあうような実態がありそれが当たり前となつてゐる事実。その中でこの女をターゲットに定め細かいミスを取り上げ追及し続けた。最後この女はそこからくる怒りのため仕事に向かえなくなつた。このことは過失によるミスというものは起きうるものであるという事実。それを問うことはあまり芳しいことではないことを周知させることに成功した。

大切なのは仕事の優先順位を確かに守る。緊張感と思いやりに満ちた空間である。仕事に集中出来るよう上司は図らねばならない。勿論、故意によるものは厳しく断罪されなければならぬ。ヘビのような人相をした女幹部への抵抗。彼女は役所仕事から移つてきた人だつた。なんでも縦割りが好きだ。総務からの理事長、看護婦の送迎の依頼にいちいち反抗していた。

隆は独断で気軽に仕事を請け負つた。彼女は険しい表情を見せていたが理事長は「この街のものどもはゴロツキばかりだと思つていたが、まともなやつもいたか」と語つてからは隆の評判が上がり、彼女らも総婦長との兼ね合いからも黙らざるをえなくなつた。

またある女は計算高く妊娠までも計画的に為すタヌキのような賢い小太りであった。ひとの親切につけこんで平気で遠慮もなしに多量の仕事を、ぶつけてくるのだった。私は二人の男といま取り上げた二人の女性の悪口を発露してみた。女は、始め慎重だったが、私の口車にのり自分たちの生殺与奪権を握られていると小心に吐き出した。それを聞いていた看護婦がいた。告げ口したのだろう。

タヌキは彼らの無視に耐えられなく職場を去っていった。だいが風通しはよくなってきた。そして彼らの報復が始まった。私に多量で質の高い仕事を浴びせかけるように被せてきたのである。私は負けたくなかった。自分が小悪人に見えようと正義を振りかざした。企業論理に毒されていた私は「理事長先生に齒向かう君側の奸どもを一掃してやる」と強い執念を燃やした。やつらはあらゆる嫌がらせをしかけてきた。

このままで行けば孔明のようにいつかは心労、疲労で倒れるだろう。隆は賭けにでた。関ヶ原である。

彼らと私はコンセンサスを得るため、私のおかげで風通しのよくなった病院内を二つに分ける権力闘争へと発展していくことになる。ただ、私には心配していたことがひとつあった。狡いやつらである。

彼らの担当の重要な仕事内容は他者には知見されてはいなかった。

そして私はまぼろしを見た。若い数人の女の子が事務服をはおり、私に総婦長室へ向かう

階段にて会釈するのを。総婦長も俺についた、愛友病院は変わる。彼らは生活がかかって
いたとおもう。必死に私を断罪し味方を増やしていった。

私は演技をした、苦しんでいる振りをした。女も用意してきた。一度、私の家に遊びにき
たことのある若い介護に当たっていた女性を使つて揺さぶりをかけてきたのだ。私は電話
口で「ごめんなさい」と罪の深さを認識してもらおうとオーバーに頭を下げた。

どうやら私以外はみんな彼らの情報が行き渡つたみたいだった。私はあるスナックで用務
関係に携わっている田村という男に会っていた。メモを渡した。
それは私の切々なる心情を記したものであった。

翌日、ドミノ倒しのように事態は一変していた。私が主導者扱いされ皆に笑顔がみられた
のだ。

だが私はまた演技を続けた。みんなもまた、私に敵意があるように演じた。やつらはコン
ピューターの部屋に孤立した。私の内心は本当に彼らの、そつ首をかつきることができる
のだろうか。私は本当に正しいのだろうか。私怨ではないのか。逆に私が生首を切られる
のではないヒヤヒヤだった。そんな中、私の混乱が始まった。

女幹部と総婦長が新人女性と私の担当の部署へやってきたのだ。私は負けたと確信した。
ある女性の悲痛な声がスピーカーから響いた。私は滯沱した鳴咽をもちこえられなかつ
た。

山を崩したてられた病院。私は嫉妬深いヘビ、貧欲なカラス、狡いタヌキ、好色なイノシシ、そんな動物たちの霊がやつらにとりついていると、何故か感じた。「気持ち悪い」私はその場を逃げ出した。職場放棄である。

クビはまぬがれたが部署変更、草むしりが主なのどかな仕事であった。

私は突如働けなくなった。やつらに計画を知られまいと、努力した結果、思考伝播という統合失調症の病状が現れたのである。

7

皮膚の色素が欠乏するという個性をもっていた、いずみちゃん、双方、干丈を交えるなか、寡黙に献身的に利用者に関わっていた。

彼女はこう思っていただろう。障害者となった今、本当に気になるのである。

しかしこんなに強力なコネクションが完成されれば恐怖政治が生まれることは十分危惧された。だがもはや私はどうもできなかった。

話が前後するが、先に記した深川君子のことを覚えているであろうか、彼女には驚かされるといっていたが隆がなにげなく愛友での将来のはなしをすると笑いながら「みんな決まるとるが、まだおるつもりでいたが」と先の二人の出世を灰めかした。

つまり一連の隆の行動は先輩を蹴落とし上にあがる為のものだと思っていたのである。隆は怪訝な顔をしたが一言も弁解はしなかった。仕事もろくにしないで自分の立場の事ばかり

り考えているやつらはいかんせん非だったのである。

隆がまとめようと努力した狭い世間は大きな抵抗勢力となっていたのであった。ああ本当に隆は堅物になってしまっていた。

労働はできるだけしないのが幸福という思いをどこかに忘れてきてしまったのである。

8

ここで恨み言をひとつ追加しますが蛇足と笑わないで下さい。この本を隆即ち私の鎮魂の書としたいと願っているからです。もしもこの本文に私の歴史のゴミ捨て場があるとするならこのことを書きたい。

最近知ったのであるが、新卒で入った会社、三つ年上の先輩だった男がトップに立っていた。会社を儲けさせると私を扱いやすい男に洗脳しようとした本当に厭な奴だった。

募集のブログに自らのことを語っていた。「入社したときから一番になりたかった」あいつらしいが横山やすしか、スポーツじゃないんだ。実際の社会で一番の地位をめざすということを広言するのはなんの理念も理想もなくただ手練手管にたけ恥じらいもなく権力の頂点に就きたいだけという馬鹿さ加減を白日のもとにさらしているだけで、まともな神経をもつものは相手にしないばかりか苦笑するだろう。

だが正直だと感心するやつも幾人かはいるかもしれない、名利と金か、意識するか、しなやかなの違いだろうね。それをもとめるのは俗世間では恥ではないのだろう。業績の結果と

して与えられるのはわかるが、ただそれだけを求めるのは鬼の世界と言えよう。

またやってしまった、とにかく厚顔無恥なやつは許せない。(そんな感情的でもないのだが)

9

だがつくづく思うのだが自分のために一生懸命できるやつは幸せだと思う。私は何かのために我を忘れなければ強い力は湧いてこない。自分のことを中心に考えている奴はどこか怠惰か非情だ。

隆にとってすべては「老人を人間らしく死なせる」という大義にあった。そのためには「従業員は全力を尽くすのは当然」とかんがえていたのである。はたしてそれで働く人達は幸福か、問題はそこにあったのだ。立派な人より好かれる人の方が良いと隆も思えたらよかったのだろうか。やつぱり読み返してみると分裂気味だね。仕事というものをどうとらえるか。生きる為の金儲けの手段と考えるのが普通の筋であろう。所詮周りはどうでもいいのである。

大人はまず自分のことを考える。穏やかに平和に生きる。隆のような男は暑苦しくて鬱陶しいのである。これでいいのだ。きつと。私のグチは終わりにしよう。率直、大人になり切れない純粋な若者の描いた、権力願望の果てのものだったのかもしれない。

私の周りが一転してきた。人間関係がスムーズにいくようになってきたのだ。ただひとり人は自分のことだけを考えていればいいと素直に思えるようになってきたからだ。守るべきは

自己だ。

そうすると自分の気持ちを肯定でき、深くはびこっていた罪悪感も消えていくのが感じられてきた。

人々の根情欲もよくみえてきて理解出来るようになってきた。宗教団体のなかでやたら優しい人間、真面目になるのだと開祖の教義を本まで信者に高く売りつけ押しつけようとするところに長年、所属していた。個人崇拜のもとで従順に去勢され意見を発露するのも驕慢だと処断される、変だね。マインドコントロールだね。行事、修行と間断なく行われ、自ら考えることを意図的に回避させる。私は敢然と脱会しました。でももはや改革しようとか、人を正そうとかは思いませんでした。なかにはなんでもだれかに決めてもらわないと不安な人間もいるだろうし、権威に弱いものたちもいるのである。

本当によかった、私のような貧乏人でも会費(幽霊会員の分四人)書籍代金、毎月一回の先祖供養のお布施、など年間数万のお金がでていく。年末の地代にも頭を痛めているのになんだ、それはである。

開祖の孫娘とおなじテーブルでケーキを食って光栄の至りで先祖のお徳のおかげと言っている小幹部の話を聞いたときには啞然としてこりやだめだと思いました。

本当に優しい人間というのは、あなたは優しくなくていいよと言える人だと、私のかつて敬愛した宗教学者が著書で話されていました。私もそう思いました。が、いま、本当かな

と思います。でも新世界を見せてくれた彼。自我を意識した宗教的見解。

最初に彼を知ったのは脱会した教団系の出版社から上梓されたものだった。まあ仏教なのにクリスマスまでも盛大にやる、ふところが深いとか広いとか。寛容だということとをみせたい教団の意向が私にとっては、自我の目覚め、自己認識、退会という、皮肉な結果になったみたいだ。

10

病のせい、薬のせい、長年EDに悩まされてきた。最近病状も安定してきたのでかかりつけの吉本先生がエビリファイという新薬を処方して下さった。調子がいい。ポジティブで心が強くなったみたいだ。

でも私は障害者である。パラリンピックで義足のひとがどれだけ速く疾走しても、だからである。

でも私は嘆いたり悲観したりしているわけではない、いろんなひとと知り合えたり感情を制御することをおぼえ他人を責めなくなった。評判を気にせず自由に生きられるようになってきた。幸せである。だいがぶずくなくなったようだが、私には丁度いいみたいだ。

人は何かのためや誰かのために大事な自分の生活を犠牲にしちゃいけない。自分の足で歩く、自由にいきる。それはどういふことが、それを考えるのが楽しいのだ。大きな問題は時代と時宜が解決を図る。

人間関係も、善良である感覚を信じることを優先するのがいいみたい。でも政治も大切かも、たくましく生きないとねえ。人生に一番大切なのは勇気である。そして自分らしく楽しんで生きることである。そう素直に思えてきた。

人の話は、九割は自慢と愚痴だそうである。そうかもしれない。拓絶するのではなく拝聴まではいかなくても頷いてあげれば喜ぶのだろうなあ。

孤独を生きることとこだわってきたが最近親友ができた。御歳八十才の年金生活者、キナイさんだ。これは良いカップリングだ。オンナが好きで正直だ。元氣と活力が出てくる。頻繁に会っても臭みにならない、久しぶりの人だ。

もういいかこの辺で筆をおくか、と思ったがやはり単なるやかましいスケベだった。

そして今思うのだが生殺与奪権を握られる怖さ、そこから生まれる強迫観念と自らの良心との葛藤、私のかつての行動の重要な誘因であったろう。

人はマイペースが一番、月並みだが思う、そして自分を信じて、何度も言うが勇気をもつてなにごとに立ち向かわなければ。大きな雲に誓うのだった。

そして私は3度目の入院をして幸せの青い鳥を見つけた気分だ。

それは私にとつての白い、白いシクラメンのような花であった。こんなに女性を心から愛したことはなかったらう。

私の症状はジーズスコンプレクス、誇大妄想、聖書の神だと思っているのである。イエ

ス、神、聖霊ガブリエル三位一体、これこそ分裂者、精神障害者、まあ、それはさておき。

1
1

今思うに愛友病院のことは神仏のかねてよりの計画だったようだ。振り返って「金と労働」、「心と奉仕」二つの価値観をないまぜにしたことから起こった事件であつたと思う。

だが神は当時、隆を使つて親愛を打ち立てたかつたのであろう。彼によつて職員の、仕事に対する姿勢とまたそれに基づく正当な要求とがはつきりと分離され清廉な職場環境が生まみ出されていったと今、そう信じたいのです。「勸善懲惡」の価値観を身に付け正義を欠く言動は許せない性分であつた隆にとつて、自分の想いまでねじ曲げてでも長いものに巻かれてしまうことには大きな抵抗があつた。暗黙のルールを破り、少しでも楽をして、稼ごうという悪意をもつた職員の足を引っ張ることになつたのではないだろうか。

隆にとつては修行だつたのである、「老人を人間として死なせる」この命題は神からのミッションであり隆には自ら律して真心で立ち向かわなければならぬ使命であつたのだ。だから女幹部からお坊っちゃん和擲擲されても、金と名誉に凝り固まつたその人にはお姫様とかえしていた。

野戦病院みたいだつた建物も美しくなつたそうだ。かつて隆は彼のなかの獣性と聖性とがせめぎあい、心が引き裂かれた。

少しヒロイズムに浸った感もある、愚直で負けず嫌いが、未熟ながらも策士を演じた悲劇がそこから、垣間見ることが出来る。

まあもういい、済んだことだ。みんなが傷つき成長した。また互いの価値観の相違も解ってきた。権力が愛か、金か心か、サボタージュか勤労か、勤勉か怠惰か。

単純に二元論で割り切れることは出来ないが、各自の持つ志向性はあるのでないだろうか。人間が利口になったのはいいが、世間には新手の悪魔に心売り渡したやつらがまた立場の弱いものたちを搾取し、脅し、騙し貶め、いじめている。神仏は観ていなさる。必ずそういう人は地獄に落ちるであろう。神の国は近づいた、汝ら悔い改めなさい。

私の青い鳥は約束されたように西の空へ飛びさってしまった。哀しい面影を残して。

最後、ここにある事実は、誰も与えるより求める方が大きいのではないか。ということである。

完

あとがき

なにしろ複雑怪奇な世界だった、いまから思えば女幹部は労働者の義務意識からくる正義感でトラブルを毎週起こしていたのではないか。私が仕事を始めたころだった。「私、泣き真似してきたがっぜ」とジョンベルーシのような怠惰でいい加減な計算高い男に一本のタバコを頂戴するとしやがんでそれを赤ら顔でふかしていた。

じつはこの人は私の家とは目と鼻の先に住んでいて「寝室がとなりどうしなのよね」とセクハラにちかいことを、仲間意識を持たそうと話してくれた。決して私に悪意をもっていないわけではない。しかし私はお金についての話題ばかりを取り上げる、この女性が尊敬できなかつた。彼女は、悪口をいって責め合う。また告げ口、陰口、そんなことをしない私を高く評価していた。その意味を、自分が得することばかりを考えている連中には分からなかつた。タヌキは言った「なんでそうなの」「母がなんかもっていくからだろう」そんなやりとりのあと女幹部は「もうしらん」と私をかばうのをやめた。

私は解放された。なぜなら彼女が私を讀えるたびに周りからの風当たりが強くなったからだ。彼女は細かい心の機微がわからないひとだった。彼女が私との確執のなか毅然とした姿に成長したことは、すべての安定の為に自己犠牲を覚悟していた、私にとっては大きな喜びになった。しかし嫌がらせで、こんなにむごいことができるのかと思うほどに私に対

しての報復は執拗だった。

私は結局サラリーマンに向いていなかっただけなのか。つまり組織になじまなかったのは。それは言えます。元々が個人事業主の息子ですから。

そしてイエスは世の悪を明らかにするからです。私はどんないい人と呼ばれるひとも重箱の隅をつつくように悪の火種を感じる、本当に嫌な男である。だがこれが父の権威において裁くイエスキリストなのである。皆様気をつけて、つまずかないようにして下さい。彼らのようにネ……ある意味で政治的に言って、右の代表が私で左の代表が女幹部だったのかもしれない。

たとえば男児なら特攻隊で敵艦につっこむ犠牲より、ただ悪意なく、自由、愛、平和のためにひとを思いやる、未熟でも覚悟をもって人助けに励む、そしたらどれほど美しい世界が見出せるだろうか。犠牲ではない真実の愛である。

そんなひとには純真で清らかな美しい花嫁、それが一番の果報となるだろう。

だが、尾崎は言う。やさしさ、美しさ何で計ればいいのだろうか。目のまえに幼児を連れた身重の娼婦がいる。

このままだと川へ飛び込むだろう。結婚して最期まで見届けてやれるか。無理せずに。辛いところである。

欲の皮が張ったやつらのかげで泣く、無力な正直者たち、「なまじかけるな、薄情け」裏町

人生。

やさしさなんて簡単に口にするものじゃない。私は実際の介護の現場も体験した。介護、看護に求められるのは優しさではなく少しでも高度な技術、サービスである。どこへ行っても誠実さより冷徹な腕前が優先されるのだ。しかし神は愛あるところにいつも存在するのである。

義人

真由子先生に捧ぐ

H26年度作品

義人

義人であると同様に、義を行う者は義人である。

真由子先生へ

長い間、迷っていた。これまでの書簡を公開するか。

心の病をもつ人に貢献できる。まあ幾らかに一人はいるかもしれない。

自己顕示欲が少ないといっているが、私の本心はより多くの人に共感、理解して頂きたいというところにあるだろう。

私は闘争心が旺盛なようだ。偏見をもち狭量な価値観でもって人を裁いていく、そういうものたちが敵だと明らかになってきた。不正と戦わなければ力が湧いてこないのだ。またしても世間が相手だ。

聖書に頑迷な人々の義に自らの義がまさっていないければ天国には入れないとでてきた。つまり世に問えど。これから私は堂々とどんな戦術、戦略を使っても我が義を訴えていこうと思う。決断した。

ずっともやもやしていた。受け身でネガティブにものごとをとらえることをどこかで支持していた。

釈迦はサトツタとき悪魔から「もつなすことはなしたのだから涅槃に入られたら」と怪し

げに誘われた。たしかにある種頂きに一人立った釈迦には一抹の寂寥感に似たものが横切ったであろう。仏陀となった自分の境地。「きつとわずかなものでも心の清らかなるものなら教えを理解しその境涯に達するものはいるでしょう」梵天は布教されることを勧請した。

バリ雑言を浴びてもいい。無視されても、言論、表現の自由を追求して、評価を恐れず、傷つくことは辛いけどね、先生たちもいろんな厳しい目や言葉にさらされる中、治療を行っておられるのだろうからね。

インセンテブ云々よりもやると決めたらやるしかない。釈尊が伝導の旅にでられるのを決心されたように。聖書には私に義があると記されてある。ならば説かねばなるまい、全世界に向けて福音を述べよ、そう聖書は促す。

執着から離れ、欲望を制御し、悪心を除き、真実の愛と自由を心に描くことを勧め、満身にあふれる幸福をたくさんの人と享受するため、神、仏の命ずる道を湛進する覚悟でございます。たとえ十字架にかけられても。

イエス、日蓮のみちからは逃れられないようだ

これは「魂の革命」である。

真由子先生へ
アメリカに存在する安宿のどこか忘れたけど、祝福のうたと記されてあったものを紹介させて下さい

強くなりたくて、力を求めたのに、優しくなれるように弱さを授かった

幸福になろうとして富を求めたのに、賢くなるようにと貧困を授かった

求めたものはひとつとしてこの手に入らなかったけど心の奥の本当の願いに目を覚ました

みんなにほめられたくて成功を求めたのに悲しみがわかるように失敗を授かった

人生を楽しようとあれこれ求めていたのに

すべてを喜ぶように心を授かった

言葉にならない思いの中で確かに感じられたこと

私はあらゆる人の中で祝福されていた

求めたものは、ひとつとして、この手に入らなかったけど
心の願いに気づいたとき

祝福されていた

言葉にならない思いの中で確かに感じられたこと

私は、あらゆる人の中で祝福されていた

いい詩なのだけど共感してくれる人は
少ないだろうなと思っている自分が切ない

真由子先生へ

コンビ二、ゲームセンターのころ

不安が妄想を呼び恐怖感を生じさせる。なんの実体もないのに、柳の下の幽霊を見るように、私は脅える。格好が悪くて特に女の人には恥ずかしくて言えたものじゃない。法座（R会の修行）でなんか話すこともできない。世の中を楽しく生きている人もいる。小さな命とともに心を慰めながら生きている人もいる。何故私はそう生きられないのか。病気のせい、過剰な薬物の摂取のせい、どちらのせい、分からない。こんな暮らしは、もういやだ。たまらない。衰弱が消えない。恐怖を忘れないといけない。お役（R会の行事）をすれば少し気が晴れる。

仏様の力のおかげであろうか。しかし薬を飲まなければ、頭のなかの脳の前の部分が萎縮するような気がする。特に仕事で、早番のときは酷い。なにか大事件が起こりそうな気がする。暴言をはかれたり、難癖をつけられたり、收拾つかなくなり自分がパニックを起こすかと思うと怖くなる。ようは傷つくのが怖いのだ。

いいじゃないか。惨めでも背伸びをせずに、自分らしく生きて行けばと、自分を励まして

みる。後悔をせず。かつておこなった選択は間違っていなかった。そう思うようにする。それでいいのだ。完璧を目的し外れると、不安になり、人の視線が気になる。人に完全を求めるから、自分の不完全さが気になるのである。

「おとな」になるということは、人間は完全でないと知り、自他共に欠点のあることを、いやというほど目にし、思い知らされ、そこで孤独を味合うということにある。この孤独に耐え慣れることが「おとな」への試練である。適度に厳格で、適度に寛容に生きる方がよい、と思ったとき、立派なおとなである。

悪口の中にはとても大事な事実がある。言ってもらえる事に感謝しよう。

自灯明、法灯明——法に縛られず自分を甘やかさず。

前段の様相は、自らの卑屈さにあり、対する利根的な若者たちが毎夜お披露目してくれるマージャンゲームの様態に抵抗感があったのが、理由であろう。機械が故障すれば「中止」と赤マジックで書いた紙を貼り、しかたがないねえととぼけていた。気位がたかくてズボラでいい加減で正義感が強かった、自分はどんな職業があつてゐるか。母親からの金銭の要求があつた。薬のせいか勤務中はほとんど口をあけて寝ていた。すっかりイビキをかいて真夜中たった一人、いつつけるやつもない。極楽だった。

コンビ二から逃げたのも管理者と小羊たち、経営者と従業員、統治者と被征服者、この関係は辛いものがあつたからだ。社会規範のなっていないものを使わざるを得ないことがあり所持金を盗まれたり、売りものを多量に窃盗されたりしたのち仕事の運営上、妹の経営方針と反目し自分は去ることにしたのです

若い者に好感をもてずにいた。朝から毎日作業着をきてマージャンゲームに浸るやつがいた。なにものか、いい身分だな、社員のやつに尋ねると「うちがもうから、かんけいな」とかえってきた。一日そこにおいて、夕方、嫁とみられる女が3入の子をつれて側に立つのである。

その時自由という言葉を思い出した

今となつて振り返つてみて（2014年3月現在）社会規範というのは自由の反語になるのだろうか。自由つていつたいなにか考えていた。やはりそれは感情の自律と主体性と心の自由つまり想像力にあり、もとは勇氣だとおもう。ただ法律を無視する、常識を覆すのではなくその根底には深い思いやり、愛が流れている。大事なのだと思う。聖書にもまごました生活に関する律法を守るより信仰によつて義とされるとある。心で生きる人に神の国は近いのである。

職務経歴書 （先生少しお目を拝借させてください）

平成22年7月

1 希望職種 介護

2 志望動機及び職務経歴

利用者さんのありがたいという言葉が聞きたくて御社で働きたく応募しました。

大学卒業後、プラスチック材料の商社に勤務、1年間の短い間でしたが、社会常識を叩き込まれ本当に良い経験となりました。

その後4年弱、老人病院の医療事務として働きました。病棟での勤務で指示のもと看護サービスのオーダーの作成、薬の手配、カルテへの記入、利用者の使用する自費の請求書の作成などに従事しました。ミスの許されない中、自己管理とコントロールに努め堅実さが増したと思います。

そんな中、母が犬の散歩の途中足にケガをしてしまいそれを機に、家業の酒小売業を継ぐことに。そして折からの規制緩和により安売り量販店や酒類の免許の有名無実化にコンビニエンスストアに転身することを余儀なくされました。

調子良く、順調に当初の借金も返すことができ7年経ちました。時代は次第に店舗数が増え、駐車場の狭い店舗は不利になってきました。

案の定、売上げは落ちてゆき、私は店を母と妹に任せ、長年の夜間勤務経験から24時

間営業のドライブインとゲームセンターが一緒になっている店に働きにすることにしました。

長年の接客業でコミュニケーション能力もだいぶ開発されてきたなと思っていた7年目、今年の3月突然、警察の方から深夜営業は違法であるとお達しがあり私は推奨退職とされたのです。

私は再就職には資格が重要だと思い、市のヘルパー講座に通い始めました。

そして7月16日に無事修了式を迎えました。以前より福祉の世界には意欲があり是非今度は事務と違う直接的な介護の現場を肌で感じたいと思っていました。そして御社の求人を見、自分にとって大きなチャンスだと思いました。なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

3 自己PR

人生は山あり谷あり良いことばかりも続くこともなく悪いことも続くこともないです。いつもピンチのあとにはチャンスに恵まれてきました。だから敢えてマイナスのことも書きました。

特に介護を受ける利用者さん達は人生の達人です。受容、共感していくには介護する本人の辛い苦しい想い出はなにもにも変えがたい財産になっていくのではないのでしょうか。そこから生まれる深い思いやりこそ介護する心の基本にならなくてはならないと思います。

ます。

私は15年前からR会という団体の信託者にならせて頂いております。法華經の精神に基づいて生きていこうという教えです。それはまず人様のことを考えようということです。これは自己中心的になりがちな自分を戒めています。自分が変わるこの大切さも示唆しています。すべては仏様が必要あって表して下さる現象であって無駄なものはないと言われます。振り返って本当にそうだなと思います。

アームズダウンという軍事費削減、貧困撲滅を訴えた運動における署名活動、ユニセフ街頭募金、などのボランティア活動に携わらせていただきました。布施の心を持ち弱い立場の人を思いやる、そんな経験を生かして貴社の介護業務に寄与させて頂ければこの上無い喜びであります。

先生、クソの書いたものでしょう。上から目線の。いかに自分が立派かとこないやなやつだれも採りたくないですよ。でも今日職安では就活のためとしようしてこんな馬鹿なことを進めているのですよ。自己PR糞食らへ。強くて、自立しててその上、優しいどんな奴だろうな。人は皆傷ついているのだ。そこから発信しないと。

最強のふたりという映画では下半身がなんにも感じなくなった金持ちが、ヘルパーを募集します。いろいろ経歴を各自述べるのですが、そんな中ひとりの黒人が選ばれます。彼は「断ってくれ、失業手当がもらえる」といいはなち、また採用された理由は彼だけが同じ目線にたっていたというものであった。つまり差別していなかった。同悲同苦

私は利用者より経営者に媚びていたのです。

いままで私が稚拙な文を、奏上したのはただひとえに自分の心中の感じるままつれづれに表したものを、ご厚情をもつてご覧して頂きそして甘えさせて頂きたいばかりのことでした。決して譲歩、迎合、強制、啓蒙を迫ったものではなく不快な思いをされたのなら、お詫びします。ただ根底にあるのはあなた様への一途な想い、愛からであることをどうかご理解下さい。

笑ってもかまいません。愛や夢に想いを馳せられるとき、先生の心の片隅にでも小さくメモして頂きたいというのが精一杯の男心なのです。いつも的外れで不器用ですけどそうやってここまで生きてまいりました。愚痴ですね。でも本当に感謝しております。いつもお忙しいなか、ご熟読くださってありがとうございます。時節がら寒くなります。先生もご自愛くださいますよう衷心より祈っております。

真由子先生へ

私はかつて大きな間違いをしたことがある。宗教団体のR会の活動を積極的に行っていたときのことである。ある少年が学校もいかず自分の部屋でエレキギターばかりならしている。

なんとかしてくれ。親の切実な願い、父親は嫡養子で誰にたいしてもあまり言葉を発しなかった。自分の意見がないのか、煮え切らない人にみえた。私は当時の自分自身にも叱咤するつもりで少年にバンドでも組んで夢を追いかけたらどうだろうと語りかけていた。彼は手を止め、強張った表情をして黙っていた。

私は成果をあげて自慢したい気持ちでいっぱいだった。彼の胸中などどうでもよかったのである。とりあえず役目を果たすのと、自分より駄目な人間を観察すること、このふたつで自己満足を感じられれば、十分だったのである。最低の偽善者だった。

今思うと彼はただギターがひきたかっただけなのである。ロックで飯を食いたいなどとは思ってもみないことだったのであろう。世間は目的を持ってという、勝ち抜けという。なぜひとり楽しくギターをかなでてはいけないのだらう。彼は生存競争を夢にすり替える、仕組まれたからくりを見抜いたのであろう。それこそ真のメッセンジャーである。アンガー・ジューマンだけが人間の生き方ではあるまい。

そんななかで彼は人を愛することと生きる為にするこの区別を迷っていたのであろう。

彼は19で父親になり工場で働きたした。彼の汗は愛に費やされ温かい暮らしを見つけ小さい祝福をあげた。愛するものは彼だけを頼り。オンボロのギターはどうなったのだろう。自分を傷つけたあの頃より幸せになっていることを私は強く信じたいのである。

真由子先生へ

父親のハナシをします。早くに兄を失いました。戦時中肺を患ったそうです。父は枕元でハーマニカを吹いていたそうです。そんなとき学級で盗難が発生しました。父は無実であるのに自分がやったと名乗りをあげました。本当にいいかつこしいだったんですね。ある呉服屋の独身を通したおばちゃんハナシです。盗みの疑いがかけられた少女、犯人という言葉は酷かもしれませんが発覚します。馬乗りになって涙を流しとちめたそうです。おなじ年、生まれ、ふたりの人生は正反対の方角へと向かいました。彼女は数億円の財産を築きましたが友人にナスを盗まれたと大騒ぎし、また誰かが富を狙ってくるのではと疑心暗鬼になり父親、年の離れた弟を拒絶し、(まあ火のない所には煙はたたないが)今すこし認知症が入っている。私の父は時代の世相もあつて若いころは渡り鳥シリーズの小林旭みたいのに憧れてすこし見栄張りでキザな生き方がしたかったのでしょう。しかしそれは危険と背中合わせで非現実的なものでした。ビール瓶で頭を殴られたり、美食し、強

い酒を毎晩のんだり、お坊っちゃんだっただんですね。朋友二人と東京へ家出したりして、ひとりとは帰省し化学工場を地道に勤めあげました。父が39歳で逝ったとき葬式にもこなかった。が、彼は自宅の私の同級生の娘のままで号泣していたそう。もうひとりの安さんはいつのまにかまいもどり身内もなく母親が亡くなると孤独死したそう。一度お歳暮だと、当時高かったバナナをひとりもってきてくれたことが父の生前にありました。父は本当に嬉しそうだった。家を捨てたものの生来世間知らずで優しい父、意地を通すわけにもいかず帰宅することになります。だがこんどは始めの入浴剤のセールスで全国を旅することになる。そして九州で倒れたのであります。まだ23、4であつたろう。母はそれを知らずに見合いで結婚する。父28母27でありました。母は初夜で私を身ごもります（聖霊ガブリエルのみわざによつて）数日後、父はてんかんの発作を、おこし母をおどろかす。脳動脈瘤の手術は成功したのであろうか。血管をクリップで止めてある。静かに暮らせば大丈夫だろう。母のお腹には妹がいました。父は不安であつたろう。自分の無責任さをつきつけられ、また年老いた両親の行く末。父は母の強さと慈悲深いところを愛しました。父は飲みに回りました。みんなに酒を振る舞ったのです。近所に不良少年がいれば親身になつて話を聞きました。そんなことが、いや彼流の愛が自分の死んだあとの家族の生活を支えるところかで信じていました。義理、人情というやつでありましようか。誰かが得をすれば誰かが損をするそんな世間、自分のこと、家族のことしか考えなくなつて

いく。それを当たり前のように淡々としている母の表情がカンにさわった。母は無神経なところもあった。だがたくましかった。家は酒小売業が本業だ。祖父なきあと問屋のおとこたちと商売の駆け引きをしなければいけないのだ。父は被害妄想に陥りました。母が浮気をしている。笑い話なのだがうわきという釣具屋があつて私は「かあちゃん浮気ちゃんけ」と聞いたことがあります。母は聖母であるまこと聖母であるサザエさんなのである。父は一度「私の腕を折る」と母と喧嘩になつて恫喝したことがある。集まつた近所のみんなが遠巻きに嘆くような顔でまなこを見開いていた。私の細腕を逆手にとつたのだが力が入っていなかった。なぜあんなに優しい父がこんなことをしたのか。この疑念は不審につながりました。

そしてようやく私はこの病になつて初めて分かりました。つまり父は西行とおなじく美、つまりエゴから離れるため縁側の軒先から私を蹴り落としたかったのです。だがそれは息子という個にたいするエゴイズムではないかと力が入ることはなかったのです。父はもういくばくもない命を感じ、なにを残せるだろうかと強く思つたのです。私は世渡りの処世術を教えることもできない弱いだけの人だったのかと思つていました。だが父はいろいろなメッセー지를投げかけ人の道というものを示唆してくれていたのです。まず他人の子供ほど可愛がつていました。私が嫉妬めいたことをいうと唇をかみ締めました。それが彼の示す怒りでした。食卓になめこの入ったうどんがありました。妹はなめこが好きでう

どん少しと引き換えにあげることにしました。うどんをとろうとしたとき妹が泣き顔になりました。父は私のうどんをひっくり返しました。さもしいお返しなどもとめるなということでした。彼はいつもサングラスをかけ家の前をブラブラして道行く人を眺めては微笑んでいました。

一度だけ言葉にだして叱られたことがありました。5年生、受け持ちはまだ新米の女先生、私はワルガキで成績は下の下、勉強しろとは両親から言われたことなどはなかった。

「高校にもいけない」「いけんでもいい」そんな会話が師弟の間で交わされた。帰宅すると父が言った「勉強しろ」私はいつしか泣いていました。妹は「にいちゃん、なんで、涙、流しとるが」と母に聞いていた。私は鳴咽をこらえることができませんでした。嬉しかったのです。父はもしかしたら自分の生きてきたみちを自己否定しているかもしれない、だから私に教育めいたことをいえないのかと子供心にうすうす感じていたからです。父はその翌年の二月に他界します。最後私と同じく聖霊、天使に導かれたみたいです。宮沢賢治が家業の質屋にくる農民達のことをおもんばかったように、父もまた酒という「きちがい水」を売って生きている身がつらくてアルコール依存に走らせたのかもしれない。彼は心の中で神仏に詫げるのだと語っていました。これこそ南無妙法蓮華経です。これも本当に一度だけ二人でデパートに行きました。私に欲しいものおもちや、ゲーム、などすべて、なにひとつ駄目だとは言いませんでした。買ってくれたのです。神様のようでした。

条件などなにもつけずに、私は相変わらずのワルガキでした。そして思います、パチンコゲームの壊れたとき、空しさが現れたとき、つまり、ものなどはどうでもよかったのだと。彼は私のなかに思い出として生きていきたいような気がしたのではないのでしょうか

真由子先生へ

米国のコラムニスト、マイクロイコ推薦のジョンウエン主演「勇気ある追跡」を観た。

ジョンウエンは確かに暴力的であるが気持ちを高揚させるものがある。彼ならEDも嘆かないであろう。確率を考えて安全な道を選ぶということもしないだろう。

マイクロイコはネルソンオルグレンという作家とも懇意である。オルグレンは実存主義者サルトルのよくわからないパートナーというかボーブオワールときっかけがあってつき合っていた。オルグレンは男らしく真剣に結婚も思慮していたみたいだ。

そして彼のその作品は「おかしくて悲しい打ちひしがれた男たち、俺がやるという気持ちのうらでもし出来なかったらという苦い想いを捨て切れない人物たち」が描かれていたのである。

無神論者かなんか解らないサルトルより品格も質的にも比較するのが憚られるくらい差がある。私は実はオルグレンの作品は拝読したことはない。何度も数軒の書店に注文を依頼

したのだが絶版になって手に入らなかった。だがその内容はロイコのコラムからいきいきと想像できて感涙するのである。なぜか私の育った界隈の男たちとダブるからである。

ロイコも13の時からバーテンダーとして働き、私も父亡きあと12の歳から一合コップに酒をついで客の相手をしていたからです。すり切れいっぱいこぼさず入れる。私のひとつの矜持でした。客はすすするように顔を埋めてから、イッキに天を見上げるようにあおる。土木作業員、工場労働者、農家のひとブラブラしたひとが保健所の規制があまりないときに一時の安らぎを求めて訪れるのでした。私の原点はきつとそこにあるのでしょね。どうしても弱者にシンパシーを感じてしまう。いつかワンカップに移り変わり母はせいせいしたというのですが、私は一抹の淋しさをおもうのでした。賭事は本質的に好きではありませんがオルグレン作フランクシナトラ主演の「黄金の腕を持つ男」という賭博師「たぶん」の映画を楽しみたいと思っていますのであります。

真由子先生へ

カズマルが死んだ。漢字では一丸と書く。もしかしたらいちまるというのかもしれない。家がまだ酒屋を営んでいたころ、やまもとという型枠大工が掛金を払わず往生したことが

あつた。母がひとりやまもとの住んでいる市営住宅の前に佇んでいるとカズマルがきて「かあちゃんどうしたがよ」と声をかけた。事情をはなすとカズマルは「分かった」といつてやまもとを呼んできて「おれの姉貴を泣かすな」と言いつた。やまもとは母にどういふ関係ながとびつくりし何日からして給料から天引きするという約束を結び、彼の親方が保証した。

カズマルはこれから分かるように愛嬌のある少々強面のぶらぶらした人だった。どういふ関係もない私の父が親身になつて若いころこつこつという言ひ方は変だが可愛がつていた男であつた。義に厚いとかまあ変わった人だった。若いころはペンキ屋をやり晩年は大工のまねごとをやつていた。祭りには獅子舞に必ず現れ少しよたつた声で威勢をあげていた。

私は仕事がないとき同じ工務店の仕事を手伝うことになつた。だが初日に年配の大工に罵声を浴びたのをきつかけに仕事を放り投げて家に歸つてきた。私はそれから反省し申しわけないことをしたなあと思つたのだが、カズマルの態度がその後会つたときに変わつていた。丁寧語を使うのである。男の世界とは解らないものである。工務店の社長もしきりにすまんと片手拝みをしていた。尻がこそばゆい氣がした。二人ともこわもてのオトコを売りたい人たちなのに、おれはそんなんじゃないと言いたかつた。しかしかれらはみなナイーブな氣のいい入たちだった。

カズマルは甥の喧嘩の電話に特攻服を着て参上したり、眉唾ものだが小林旭と友人だと語ったりした。そんなカズマルだが息子の自死という悲しい出来事も味わった。それからなぜかよそよそしくなった、仕方ないか。奥さんができた入でスーパ―に長年勤め家計を支えた。幾つで死んだのだろう眞さんと同じで年をとることを感じさせない男だった。葬式に行かなかった。後悔した。母は手ぶらでもいかれず、かえって迷惑になると止めた。でも線香の一本も手向けない。だが足がむかなかった。静かに手を合わせた。またひとつ父の想い出がこの世から消えたような気がした。

真由子先生へ

アキラ君のハナシをします。彼は私より四つ年下で今S病院に入っています。たぶん。社会的入院というのでしょうか。両親は健在なのか定かではありません。かなり前になりました。実家が水橋にあつて、遠いけど幾度か訪ねました。お昼には、お母さん手作りの卵がひとつ煮込まれたインスタントラーメンをいつもご馳走になりました。上二人のお姉さんは既婚者で共に学校の教師をされていました。彼は無名の私立高校に入学しそこでいじめにあつたそうです。彼のことをアンボンタンと表現する人もいました。かれは感受性が強く、悲しく優しい歌を聴いては涙を流し、（大草原の小さな家）が好きでローラについて少しロレツの回らない話し方でよく語っていました。

ある日彼がバスのなかで乗り入れ客の若い女性たちみんなに「結婚してくれんけ」と懇願して回つたそうです。そのことを耳にしたひとり「やっぱアンボンタンやの」と言い放ちました。沈黙のあともうひとりが「かわいそうに結婚したかつたんやな」とぼつりと言いました。私は「そうやの」と賛意を述べました。

彼はだれでも良かったといえは誰でも良かったのです。彼の心の奥にある純真な優しさを理解し無条件で認めてくれるひとなら。結婚とは彼にとつてそういつたことの象徴だつたのです。この世、全宇宙のなかでたつたひとりのひと、過去、現在、未来、三世に渡る、約束されたひと、彼の胸中（彼はだれでも受け入れるだろう）を察し静かに目をとじ指を

組み感謝の祈りを捧げる人、そういう人ならもう他の条件は介在する必要はなかったのです。
アキラ君が「S病院はいいよ、水曜日にはラーメンがでるから」となんでも言っていたのを聞いてから何年たっただろう。なんとさやかなことへの感謝と喜びの言葉であろう。
アキラ君ゴメン、昼でるか晩かまた教えてね。そんな会話もまたいいだろうと思うのである。

真由子先生へ

Aさんがいる。母の詩吟の仲間だ。彼女は80にもなろうとするがスクーターでどこへでもお出かけする。彼女の娘は私と小中の同級生である。そして娘の嫁ぎ先の夫がニシノという私の高校時代の恩人である。すこし複雑だがそんなに難しくもないでしょう。結局、中学時代からの英語は苦手のままで高校に入学した。赤点の連続。そんなとき、となりにいたのがニシノだった。「そんなもん英文と訳文、丸暗記すりゃいいがよ」つまり教科書の英文のしたに訳をつけて覚えりゃいい。そうか。私はその次のテストで70点をとることになる。私は受験勉強を含め勉強らしい勉強はしたこともなく、勉強というものはしてみるものだなと思った。ニシノも母子家庭で一度遠いところから自転車でサイクリングの途

中家に寄ってくれたことがあった。わたしが無名ではあっても大学へ進学できたのはすべてニシノのおかげである。「ニシノありがと」そのことをかねてからAさんに伝えたいと思っていた。Aさんはカラオケのとき牧村美枝子のみちづれを1曲だけ十八番にして唄うそうだった。きつといい人だと思った。母が、小冊子がないと大騒ぎをしだときも電話口けっしてあわてたり責めたりしなかったみたいだ。

水に漂う浮き草に、同じ定めと指をさす、言葉少なに目を潤ませて、俺を見つめて頷くお前、きめた、きめた、お前とみちづれに、寒い夜更けはお酒を買って、たまのおごりと、はしゃぐお前に、きめた、きめた、お前とみちづれに

大学に入學した年、野球部が早稲田と全国大会で決勝を交えることになり応援のバスがでることとなった。私は行かないと下宿の先輩に伝え、「お前は愛校心がまだない」と少し酔ったように言い放った。

その先輩が好きだったのがみちづれだった。みんなに金を借りてステレオコンポを買ったとひとりずつ先輩に唄わせていた。あのころ4回生というのは大人にみえたなあ。今なにしているのだろう。きつと義理、人情に厚い立派なひとになっているのだろうな

忘れてないよう。Aさんにはうちの玄関先だったがその旨をお話させてもらった。ニシノのご母堂が最近亡くなられたことをきいた。強い語調だったが「中にはいつとられ」私が

寒いと思ったのだろう、彼女は促した
みちづれは本当にいい歌だなあと思うのである。ああ、母の小冊子はどこからかでてきた。あわてものである。でもこのことから私はAさんの人柄を知ることになり母と一緒にいてくれる厚意に深く感謝するのであります。

真由子先生へ

火曜日

孤独です

一緒に病室にいた、Mさんのことを、友人だと思った人に話しました。Mさんはかれこれ通算すれば40年は入院生活です。食べたくてもなにかが邪魔してノドを通らないみたいです。点滴をさしにくる看護師らもどう接していいかわからないのでしよう。彼は深く傷ついています、心も体も。心ない言葉が無残にも彼に降りかかります。

彼は自分の入生を顧みて泣くのです。心を隠し、鳴咽をこらえ、ただ涙をこぼすのです。カワイソウそうカワイソウなのです。上から目線でしょうか。

友人だと思ったひとは「なんとも思わない」そう笑い、そうそんな感じでした。受話器をおきました。元気なときってなんで人はこんなに想像力がなく同情を欠くのでしょうか。

自分の辛いときは、まるで天地がひっくりかえるように大騒ぎするくせに。やはり常に意識していなければいけないのです。聖書にもつねに目を覚ましていなさいとあります。良識、善意、親愛、友情は慈しみをうみます。森羅万象に対して。自由は幸福への道標、浮き草暮しの私ですが、えらそうにね。

Mさんに答えました。きつと可愛い娘が待っている、天国かもしれないし来世かもしれない。それでいいのだろう。それでいいのさ。一緒に歌いました。「なみだ恋」歌詞を、食事を記入しているという小さな紙片にしたためてくれました。

私は一題目しか知らず、結局まるごとは覚えられませんでした。残念でした。そうです。神様がきつと彼のために用意した曲だったのでしょうか。

夜の新宿裏通り、肩を寄せ合う通り雨

誰を恨んで濡れるのか

逢えば切ない別れが辛い

忍び逢う恋、なみだ恋

人生の集まりというフレームの中で損な役割を負わされているのかもしれないけど幸せになつてほしいと強く祈念するのです。

真由子先生へ

一軒の田舎の Snackbar が閉店した。経営者だったママの健康状態が悪くなったそうである。彼女とは商工会の旅行で幾度か顔を合わせた。参加する女の子が少ないので店の子を何人が連れてきていた。卑猥なことも口にしたが、私には無口というか所謂普通の人であった。何度か店の方にも足を運んだこともある。2、3年前マスマユウサクという男とカウンターで一緒になった。松田優作と似とるね。私は笑った、ユウサクは「俺、死にた、なった」というのが口癖だったらしい。あいつにそんな度胸ないとか、本当に軽度の知的障害（こういう表現でいいのか）があり親戚を含め家族からも邪険にされていた。カウンター越しにママに結婚してくれとなどもくり返していた。彼は派遣の三交代勤務（いつ、どこ、だれ）水商売の人しか、いや男気のあるママしか相手はしてくれなかったのだらう。ママは既婚者であり彼の夢は叶えられるわけはなかった。そういえば彼はママの眼をみつめたりはせず宙をひとみはさまよっていた。私は「口説いている」とワラッタ。最低だった。彼はその数カ月後、縊死した。55、6歳だったらう。妹の借金のせい

だともつばらの評判だったが、きつといやになったのだろうこの世が。昔から、「またたのんちゃ」が口癖の気のいい男だった。その後ママの店では暴力沙汰などもあり大変だったと思う。そして息子はちゃっかり見合い結婚させ、引退するのかなあと思ったところだった。本当にお疲れさま。

30年前のカセットテープがある。三好鉄生だ。ケースには曲名も書いてない。

サンキューベイビー 酒場の酔いどれた、天使さ
愛してた、おまえだけオーイエずっと

サンキューベイビー だれもが、あばずれというのさ

あいつらにや、わからないさ、ベイビーこの恋を

悲しみにくじけた日もさみしさに泣いたときも

かわらない、その笑顔が俺の心をいつもささえてくれた

サンキューベイビー 男にだまされちゃいないか

しあわせを いつの日か ベイビー セイ アイ ラブ ユー

たましいがきしむぐらいに細い肩だきしめたい

心から ただ ひとすじ 愛しているのさ そうさ、こんな俺でも

サンキューベイビー いつでも シャア あいてるぜ この胸 オー
しあわせを いつの日か ベイビー セイ アイ ラブ ユー

私のこころの琴線にも響くのである

オスカーワイルドが言った「現実には芸術を模倣する」と

真由子先生へ

私の高校時代を振り返る時、輝かしい栄光、まあ人生においてもあるが業績というものは無いといつても過言ではない。つまりハナから期待しないし冷めていたというか他人の評価をあてにしていなかった。

家業が酒屋で油にまみれるよりはスーツをかつこよく着て、口先、三寸での、半分詐欺師のような将来を夢見、芸能界にもあこがれていた。人を笑わせることだけに自信があったからだ。だが練習をしてうまくなくて上位に行くというような感覚は好きではなかった。私は先にも後にも商業高校時代の弓道部に3ヵ月籍をおいただけでクラブ活動という

ものを帰宅部以外にはしたことはない。性に合わないのだ。先輩、後輩の関係とか。権力、服従というものにアレルギーを感じるのだ。結局今になってみれば称賛や栄光よりも魂の自由がほしかったのだろう。

部では体罰はなかったが説教と称して暗い密室で正座をさせ竹刀で床を打ち鳴らし反省、恭順を強制する。上下関係の洗脳である。なにも思考することのないロボットになる、我慢が出来なかった。退部した。

同級生に俳優の西村雅彦さんがいる

彼との縁は不思議で直接交差はしないのだが彼の専門学校の友人が私のまたいとこだった、家の隣人だったり、成功した彼、きつと彼は私の夢を替わつてというかみんなうなずいて叶えてくれたのだろう。彼からはあまり生存競争の匂いはしない。私より少しいうかかなり度胸と勇気と才能があったのだろう。

習いごとあまり好きではなかった、上達したからどうだというのだろうか。そのためについやす時間とお金と労力考えただけで馬鹿馬鹿しい、見栄やハクをつけるためにやる。みんながやるからやる。クソだぜ。忍耐力がつく、協調性がはぐくまれる、礼儀正しくなる。

母はこの病になったとき単なる人間関係の問題で部活をしてなかったからだと片づけた。私もまだこの世の価値観につかっていた、一応納得したが。だが今、ことはもっと根源的

で、主体性、良心といった人としての本質にかかわるような重大なものに連結していることが原因にあると気づいたのです。

私はニーチェがいうルサンチマンで価値の逆転をはかろうと思っているのはなくイエスを信じ、愛、思いやり、自由によりニヒリズムに陥らず平和に楽しく暮らすことが人間にとって必ず間違いなく幸福につながってゆくことなのだを確信するからなのです。

西村さんの方が当方とだいぶというが、ちがうなあ、ほんとう。それと油にまみれて働ける人は徳分があり、やはり持ち分なのであろう。

真由子先生へ

天皇陛下が80歳のお誕生日を迎えられた。孤独であつたとされている。ご自分には皇位を継ぐしか選択肢のなかった中、先の昭和戦争においてたくさんの若者が夢を持ちながらも亡くなったことを心痛されていた。

私は思う、いったい夢とはなんなのだろう。有名になること、名誉をえること、栄光をつかむこと、大金を得ること、ペット代わりに赤ん坊を買うこと、尊敬される仕事に就くこと、そんなことなのだろうか。

天皇陛下は皇后様が支えてくれたと語られた。ここにひとつの答えがあるのではないだろう

うか。誰か自分を理解し傍らでそつと支えてくれる。そういう人が見つければ人生の夢はかなったと大声で言えるのではないだろうか。それが世界へとひろがれば素晴らしいだろう。

私は決して個人崇拝は認めるつもりはない。盲目的になつてはいけないとも戒める。しかし天皇陛下、皇太子殿下から伝わってくるものは神がもつ愛とアナロジーしているのではないかと思うほど濃いのである。神は崇拝されることを望んでいない、だから観念的なだろう。

夢が目的になつてはいけないと思う。今が楽しく暮らせなくなるしどこか下品だ。

「まあ皇室のひとは生活に困らないからいいねか」そういう声が聞こえてくる。「どこへでも出かけられてうまいもん食べて」自己顕示欲の強いセレブとよばれる方々なら大喜びで公務に励むであろう。世界の貴人という人たちと交わつて社交界に生きる。成り上がりものの夢であろう。貴いと尊いは違つ。貴というのは比較から生まれるものであまり本質的に価値はない。尊は金剛のように絶対的であり美しく価値あるものである。

「俺は天皇陛下だけにはなりたくない、なんでかいう、とずつと手を振つてなければならんから」顔にはそれさえなかったらなつてもいいと書いてあつた。「おまえの仕事はなによ」そう言っていたなあ、無職、遊び人、年金生活者、ただの病人、宗教家、エッセイスト、すべてはレッテルである。寺山修司はいつた。職業は寺山修司だと。私もそれになら

つて小声で言おう、就職先は神の国であつて生業は義人である。仕事は楽しければいいのである。

真由子先生へ

尾崎豊の映像と音楽を聴いている。自分らしく生き自由にこだわる、彼は悩み苦しみ叫びそしてひとつの愛を見つけ、そして理解者が現れ自己矛盾が生まれて去つていった。「世間知らずの俺だから体を張つて生きていく」「なれない仕事かかえて言葉よりこころ信じた」「生存競争の中すりかえられる夢」「愛や夢よりも金で買える自由がほしいのかい」「馬鹿を気にするほど世間は狭くないであらう」「自分らしさにうちのめされても愛や真心で立ち向かつていかなければ」彼の詞です。少年から大人になりいろいろながみうまれ優しい故に断ち切れず、一番嫌つていた支配、権力といったものも手にしていく。「自分の暮らしが自分を傷つける」と「自由になりたくないかい。本当の自由ってなんだい」彼は去つていた。見栄と偏見を厭いながら、たぶん。

ベニーマーシャル監督のレナードの朝をやつていた。医師役のロビンウィリアムスが「仕事、友情、家族、それより大切なのは純真な気持ちだ」と語りかける。彼が調合した試薬によりカタトニーから回復し、副作用によりまたその世界へ戻っていく。そんな姿を羞恥

心かなぐりすててロバートデニーロがすばらしく演じていた。薬より魂である。

恋のタイミングというのはつまり縁というのだろうか。精神医学では妄想になるのかなあ
小津安二郎の作品を観てそう思う。

真由子先生とおよびするのは馴れ馴れしいですが、プレパルス抑制が弱い、つまり慣れない。これは一期一会ということを大事にしているからです。自分は、愛を告白したものの、逡巡していました。私は結婚した翌日に命を落としても悔いはありません。なぜなら結婚はたんなる法律の上の形式と効力の発生という話ではなく神にあたえられた加護による崇高な定めであり契約であると思うからです。

なぜ迷っていたか、先生は「彼を理解するのは自分しかない」と言ってくださいました。言葉「ロゴス」は大切です。人を生かすもするし殺しもする。

釈迦はヤシヨダ妃が実子ラフラに遺産をくださいと言ったところ即座に出家させてしまわれました。小国の王になり富や権力や名誉のために命のやりとりを行い猜疑心、嫉妬などの悪感情、策略、謀略、裏切りなどの悪意のなかに囲まれて生きることが決して幸福なことではないからです。しかし先生はどうか、と思ったからです。

私は先に話したワイアットアープのように先生を観念的に精神的に連れて逃げ出そうと思うのです。アープは女優に語ります「私にはプライドもなにも残ってない」「私には少し蓄えがあるわ」そして大人らしく現実的にいるのである。さあボールは投げられました

よ。どうかえしますかな。

真由子先生へ

金曜日

尾崎豊が気になる。彼の卒業という曲の中にある「人はみな縛られたか弱き小羊なのか、先生あなたはか弱き大人の代弁者なのか」確かに学校というものは、国策により立派な兵士、産業従事者を育てるため、特に義務教育はつくられてきた歴史がある。つまりある時期はたくさん人を殺す人間をつくり最近では金儲けのうまい人間をつくるということが叫ばれているのである。まあ教育の目的という一面についてはこれくらいにして。

前段の歌詞であるが、聖書に羊飼いの譬えがある。神は牧童のようなものであつて100匹の羊があつてその1匹でも行方がわからなくなると捜しにいくと。つまり束縛とみるか保護とみるか、神から自由になつても小羊は狼か大自然の犠牲になるであろう。神への感謝を持ち続けければ真の愛と平安が約束されるのである。また放蕩息子のお話ではどんなに父すなわち神から離れていても改心すれば神は涙を流し受入れられるのである。

私はなぜかヘルマンヘッセをよく読んでいました。(クラインとフアーグナー)という作品の中で「身をゆだねることを学んだ者は、楽に死に、やすやすと生まれるのだ。抵抗する者

は、不安に苦しめられ、つらい死を迎え、いやいや生まれるのだ。」「いったん自己を放棄したら、運命に服従したら、いったん自分のあらゆる支えと、足の下のすべての堅固な地盤を捨ててしまつたら自分の言葉だけに完全に耳を傾けたら、何もかも得られるのだ。そのときには、何もかもうまくゆくのだ。何の不安も、何の危険ももうないのだ」運命に身をゆだねさえすれば、不安から解放されるとヘッセは諭してくれます。われわれは神に保護され導かれ誘われている、人間は本質的に弱き小羊だと自覚しなければいけないのではない。そうでなければ謙虚さがなくなり思い上がり、自分に固執し道元のいった自己に対するところの他己を思いやり尊重する気持ちを無くしやがて崩壊していかざるをえないのだ。尾崎と話してみたかったような気もする。

真由子先生へ

「人はみな縛られたかよわき小羊なのか」「先生あなたはかよわき大人の代弁者なのか」前にもとりあげた尾崎豊の卒業のなかのフレーズである。ひとつ気づいたことがある。聖書のなかの牧童の譬え、牧童すなわち神はけつして羊たちを縛ってはいないということである。放牧しているのである。縛っているものは悪魔によつて一律、無個性にとりしきろうとする規則、道徳、悪意であり、それに気づいた自己中心的な自我が束縛を認識するの

である。神は人間たちつまり羊たちを自由にのびやかに天気の良い日にエサとなるおいしい牧草のある場所へ誘い導くのである。けど、みんないつのまにか学校、会社、企業などの硬直した社会倫理に飲み込まれ自由を失い、目先の金のためにかばいあうようにみえながら各自、先に行こうとあがくのである。尾崎に15の夜というのがあった。『盗んだバイクで走りだす。暗い夜のとぼりのなかへ』『自由になれた気がした15の夜』始めはバイクを盗まれたひとはこまるだろうなと思ったのだが、なぜか口ずさんでしまう。ここである。我々は結局生きていくということは他人のバイクを盗むようなものだ。人の心をすてて鬼の世界（競争、争い）でいきろというのが、金持ちのボンボンが親に買ってもらったバイクを盗むのとどちらが、罪が重いだろうか。私は神からすればどちらも悪なのである。そして15の少年が家出の計画をたて罪の意識を持ちながら自由を求めなければならぬ現代社会、利便さと引き換えに失ったものはかなり大きいのではないかと思うのである。

統一教会にいた男がいた。ローソンをやっていたとき来店し少し口もとを歪めながら笑みを浮かべ「そのセーブオンつぶれたよ」と罪悪感を持つことを促すように言った。つまりさつきから私が言っている鬼の世界であろう。確かに一理ある、しかしそれを意識するかしないかで大きく違ってくる。私はなにもセーブオンをつぶそうと店を営業したわけではないからである。その男はこの世に居場所がなくなり家とともに焼死した。

私が言いたいのは心に自他の生存への不安とか罪の意識をもつより愛で満たす、この方が大事だということである。そうすればインチキ宗教にだまされずへんな壺などを売らなくてすむのである。不良に走るのもいつしよでその根底にあるのは孤独感、寂寥感のような気がする。みんな認められたいのだなあ。でもきつとどちらも真摯に自分と向き合った不器用な人間たちなのだろうと同情したいのだけど、いずれにしろ安易に答えをだすのはどうもなあと思う自分がある。どうしてか、それは、そこから、人々に不安を植えつける新たな鬼が生まれてくる。そんな思いがどうしても払拭できないからである。

心理学、社会的にはどうなのかはわからないですけど、私見を述べてみます。「盗んだバイクで走り出す」、¹「存じ尾崎の15の夜のクライマックスだが、教習所にも通わず、二輪車をあやつるとすれば90ccぐらいが精一杯だろ。中には天才的な人物もいるだろうが、幼児のころから金持ちの親に仕込まれたエリート達だ。

極悪な暴走族とは違い、結構シャイで真摯に自分に向き合うナイーブな感受性の強い少年たちが曲からは思い浮かばれる。そういったかれらは「夜の校舎窓ガラス壊して回った」(尾崎の卒業)のなかの少年たちと同じく自分の存在さえ認めてもらえばきつといいのであろう。尾崎の曲により疑似体験することで救われた子たちはたくさんいるだろう。彼がデビューしたことにより中学校の破壊的な行為も収束、そして終息に向かつていった。金八先生の腐ったみかんたちの心を代弁することにより実際の暴力は表だって、消えてい

ったのである。

私が思うにヤクザ映画、二時間ドラマ、俗悪と切り捨てるのではなく、何の代弁なのか象徴なのかよく見極めることが大切である。世の中がみえ、大切なのはなにかわかるものもあるだろう。こちらの視点である。

いじめ把握19万8000件（全国で文部科学省2012年度、発表）読売新聞の記事である、大津市の事件から意識が高まったからとあった。高まるも高まらないもあるものはあるのである。いじめの内容は冷やかしからかいが12万件と一番多い。

やはりそこにあるのは意思の疎通であろう。指で流腸のまねをされて怒るものと好かれていると思うもの大きな差がある。

人生を喜劇とみるか悲劇とみるか。樂觀的にいくか悲觀的にいくか、深刻に考えるか、スムーズに考えるか、学級会でよく検討したらと思うがおとなしいやつは意見をいうどころか陰口もたたけないからなあ。とりあえずここをクリアしたらだいが風通しは良くなるみたいだ。とにかく思春期だからいろんな自意識があるだろうし。大人は競争を煽りながら仲良くせよという、ライバルのような関係が一番いいのか。

でもなあ。俺は何も考えず、楽しかったらよかったなあ。ギャグだけ考えて、そりゃ能天気だろう。俺や明石家さんまみたいなやつが誤解されるのだろうな。いじめっ子として。

あんまりいい答えが出ないけど、相手をみて尊重し、ここがむづかしい、邪険に扱うこと

が思いやりということもある。あまり周りを気にしないで正しい要求をしていくことが大切だろう。うーん、本当なんかうまい方法がないですか、先生教えて下さい。

真由子先生へ

自由には義務が付いてくる。世間ではそういう。それはちがうと思う。納税、労働、教育の義務それは独立したものであり、本当に自由であるということとはなんの関係もないことだ。その三大義務は否でも応でも社会に組み入れて行こうとするものであり、ひとの心の自由を疎外するものであるとも言える。

ゲゲの鬼太郎のうたが入ってきたオバケにや、学校も試験も会社も仕事もなんにもない。なぜかそれは、オバケは死なないからである。つまり死ななければ勉強したり働いたりしないでいいのである。死ぬというのはいったんのことである。死ぬまで生きているからつまり死という事実は感じることはないといった哲学者がいた。私が言いたいのは死んだ状態のことである。まあそれはさておき一時のこのためになぜ人はあくせくするのか。つまり生きる意味が問題なのだ。生きるために衣食住があるので、衣食住のために生きるのではないのだ。なぜ生きる。生まれたから仕方なく。そうなのだろうなあ。欲望が小さくなれば、生への執着も薄れてくる。だが世間は義務だから働けという。結果真実に気づい

た勇者たちは路上生活者となる。自死に走るものもいる。人間は必ず死ぬからだ。

縁起でもないというやつもいる。そういうやつらはいくじなしで正面から死をとらえられない。結婚も出産も本能のままに行いだれも真剣に考えない。20代でなにがし、30代でなにがし、レールから逸脱できない。そして定年とともに年賀状の減り様に啞然とする。そういった人たちはなにが自分の本音なのかも分からなくなってしまうている。ただ人が美味しいというものを食い。適当なときに適当な人と結婚し、みんなが感じるようなストレスを感じ、人に恥ずかしくない病気にかかり、かけてきた分損しないぶんの年金をもらい、楽に死んで行くことを願う。あつ忘れていた退職金もあったね。

ひとと比較し波風たてずにその場はしのぎ、腹のなかでは計算し嫉妬と羨望を回避しながら周りを見て膨らんだ欲望を小出しにする。家、車、衣装、ゴルフ、病氣自慢。クソくらえ。だれも愛、善、美について語ろうともしない。

死んだ友人が夢に出てきた、俺は言った異人となった感想はと、感謝がなくなったといった。寅さんと三船敏郎が好きでよく、馬鹿っぱなしをした仲だ。俺に説教かと思ったが死んだら人と支え合う必要がなくなったといったのだと目覚めてから思った。どちらがいいだろう。支え合いながら生きてく人生と、孤高をたもつ生と死と、とりあえず感謝は忘れずにおこうと思う。

真由子先生へ

少し不良少年たちの肩をもちすぎたであろうか。

新聞で学級崩壊のため自殺した女先生のことを知った。規則で縛るのではなく、自らの規律によってTPOをわきまえさせる必要があったのであろう。しかし彼女はなぜ教師にこだわったのであろうか。公務員の待遇がそんなによかったのか。逃げればよかったのになあ。おまえらみたいなバカガキなど知るかと。教師としてのプライドもあったであろうが。人間としての自尊心を捨てろとはだれも言っていないのだから。

5、6年生のとき受け持ちだった大学出たての女先生がいた。彼女も学級崩壊を経験し涙を流し強くなり理想を捨て現実に向き合い正常な学習空間をつくることができた。相手の機根を知り仏性を拝んでゆくことの大切さを見つけたのだろう。

ワルガキだった私だったが中学最初の学力テストで100人中6番の成績をとることになった。だがやはり相性である、担任で英語を受け持つ先生と折り合いが合わず授業中も悪友と大声で馬鹿話をしていた。中間テストは英語0点の76番に下がっていた。通知表は10段階の1をつけられ英語の成績は惨憺たるものとなった。それを笑った奴と殴り合いの喧嘩となった。まさに自然児である。テスト中にはクラスメートを揶揄した替え歌を高らかに歌っていた。隣組の番格をボコボコに殴り己を誇示した数学の先生は不思議に私に

は「おまえを見てると楽しくなる」と笑っていた。なぜだろうか。私には規則も道徳も優劣はもとより善悪すらも意に介さなくなる、なにか特別なものがあつたのだろう。水滸伝に魅了されていた。

2年から持つてもらった国語の先生は特別、親身になつてくれ、私は演劇の主役を何度も依頼されていた。泥棒の親分の役は断つたが、結局学校の新築記念にペテン師の役をやらされることになった。当時はなぜ俺がと思つたが演出まで手がけ、その立場だった優等生の女の子を泣かすことになった。先生は吉本新喜劇のようになるのも想定していたのだろうか。楽しかった。

私の成績はまた下がり83番となった。みんな競争なんか意識してなかった。帰りに（ごんによんさ）というよろず屋でサイダーを飲んで相手を笑わせては噴き出し合っていた。自由だった。英語の先生には12年前のクラス会でお詫び申しあげたが、その時ウツ病に悩んでいるという話をされた。こんな時と場というやつもいたが、正直なひとだったのであろう、悪いことしたなあ、反省も、恥じ入り行なう、私です、現在、本当に人のことを見つめるとするのは難しい。だから罪障消滅、南無妙法蓮華経を唱題するのです

真由子先生へ

世俗的な意味での成功、不成功だけが唯一の絶対基準だと考えずそこに執着しない。さすれば弱者への優しさや慈愛が生まれ、なによりこころが自由になれる。

その通りである。しかし信仰へと向かう謙虚さと、人の悲哀への想像力を兼ね備えていないと慈悲心にかかる、とんだ化け物が生みだされることもある。

厚顔無恥で他人の幸、不幸、心中も察し切れない。すべては縁起ではあるが、どこか薄情になつてはいけないのだ。ある人間の誹謗となりました。今日は青空だ。

そんな話はやめよう。最近聖霊の体感が薄れてきたが、こんどはストレスや危機からの気づきが迫ったとき、頭痛に似た不快な様相を呈し、啓示してくれるようになった。本当にありがたい。私は守られている。けっして万能感にひたっている訳ではなく信じているのである。神を、イエスを、南無妙法蓮華経を。

記憶も必要なことは頭に残りどうでもいいことは忘れてしまふ。これもすべて神仏の計らい。ボケても、狂つても自己は残っている。認知症の人なんかは怖いだろうな。

仏道を一生懸命もとめるより思いやりを深めて行くほうがいいと思うときがある。

それが利他、つまり大乘の精神だからである。「俺はこんなに頑張っているのに頑張っていないやつはけしからん」と慢心するほうが怖いのだ。

「ありがたい今日もこんなに怠けさせてもらえる」そう感謝しなければいけない。

ただしこれは真面目に忠勤に励んだ人への言葉だろう。

でも難しいな。金とか様々な事情が絡んでくるから。目の前の人、やるべきことを、なるべく大切にすると他ないであろう。忠勤という言葉にアレルギーを感じる人もいるだろう。つまり神仏への忠義が大切。

「いま、自分、ここ」、これで道元は禅が解ったそうです。

つまり自分の道を歩いていく口笛を吹いてあせらずに。

先生ごめんなさい、えらく教訓めいて、聡明な先生には釈迦に説法でしたね。

ただ我が心中を知って頂きたくて。いつもありがとうございます。

母もいい先生だと喜んでいます。これからもよろしくお願いいたします。

お体にはくれぐれもご自愛くださいませ。

真由子先生へ

統合失調症の症状に注視というものがあるが、私は幼き日々誰かに見られている気がしてタオルを腰巻のようにして風呂へはいったものだ。私が思うのだがパンダの交尾をTVで観るのと同じように人間の性の営みも間違はなく何者かに注視されている、パンダがそれをわからないのと同じで人間には認識することができない。神か悪魔かはたまた天使か。

だから羞恥心は乗り越えなければならぬ。

お笑い芸人たちがハダカでテレビ局内を飛び回ったのも、自意識とくに羞恥心を乗り越えるためだ。市井昌秀という映画監督がいるが、無防備という作品の中で妻の出産と放尿のシーンを撮っていた。賛否はあるだろうが、奥さんは彼を愛しているのであらう。釜山映画祭で優秀賞に輝いた。内容は自動車事故で流産しそれが原因で仮面夫婦になっしまった女が、後輩の出産に立ち会うことにより自分を取り戻してゆく。というものである。

でもなんでも仮面夫婦や離婚が多いのであらう。飯くってSEXしてそれで最高ではないか。そんなすばらしい幸せはない。

しかし羞恥心という点ではストリップのひとたちには本当に頭が下がる、「カルメン故郷へ帰る」で高峰秀子が話すように芸術的なものもあるのだらうな。そんな嬢たちを愛していた谷崎潤一郎の気持ちがわかる。旧家の四人姉妹を描いた「細雪」はよかった。

健全とはどういうことか、明るいとは。近ごろ変な性教育を行っているらしいが。人間は畜生とは違う。こういう風にSEXし、そして妊娠する、そんなはなしではないであらう。やはり心のなかにいっぱいの愛情を神仏、悪魔に見せつけなければ。ひとはみな映画俳優である、できるだけ美しく激しく愛を交感したいものだ。そしてオンナたちは皆、淑女をめざさなければならぬ。つまり気持ちの優しさ、純粋さ、寛容さである。それがレディである。人間は恥ずかしがらず、変な遠慮をせず堂々と自らの信ずることを主

張することは絶対大事なのであろう。風雪に耐え何百年も立っているケヤキの木のように。

真由子先生へ

今朝の読売のコラムにいい言葉が書いてあった。堀口大学の詩である。「ひとは分をわきま
え気楽に生きるのが一番良い。そねみは自分だけを傷つけるものである。」そねみとねたみ
の違いを辞書で引いてみた。そうするとそねみは自分よりすぐれたものをうらむ、憎む心
とあった。ねたみはそれに他人の幸運が含まれてくるそうだ。

もうひとつの悪意にひがみがある。相手の出方を実際より悪くとり、ものごとを素直にと
らない。もしかしたらこれは私もあてはまるかもしれない。とりあえずあまりよくない感
情らしい。

イチロー選手がいる。私はどうもというかなんとも思わない。好きな野球をして何十億稼
ごうとも。だいたい投げた球を遠くまですりこぎみたいな棒で打って飛ばすやつが偉い
という価値観が理解出来ないのである。

そんなことよりからだの不自由なお年寄りのお世話を一月十何万円の対価で働くこの世の
聖人たちのほうが立派であらう。どちらがいなくなれば困るだろうか。反語ではなく正論

である。競争の果てに一番をとる、そんな世界が素晴らしいのか。だが介護の現場でもそんな世界が現出している、変な根性論と弱いものいじめ、猜疑心。しかしそこから誕生する崇高で高潔な鍛えられた精神がその相手となる人々へ深い思いやりとなり温かく寄与していくことを私は心から願うのである。

話とはぶがアメイジンググレース。かつて奴隷船の持ち主が船長だったか・罪悪感と後悔と後悔のなかで牧師になった男がつくった讃美歌だ。神の道を歩むか政治家になるかウェルバーフォースは彼に会う。ウェルバーは戦うことを決意する。持病の大腸炎を阿片でごまかしながら、そしてそれすらもクリアしているために拒否し激痛にたえながら議会に立つ。仲間を得、ついに奴隷船廃止法案を通すことに成功する。ここに残虐で非道な奴隷制度に大きくさびを打つことができたのである。ナポレオンは暴力で支配をしようとして一日も眠れない、ウェルバーは解放し家族の元へ帰り安眠する、そう議会は讃えた。

だが今本当に奴隷は消えたのだろうか。賃金奴隷と呼ぶか、入よりも企業の利益の方が優先されるのが当たり前とされる。とんでもない話である、拝金主義に染まった悪党の威を借る狐たちが大勢いるのである。何度でも言う大切なのは金ではなく愛である。そう愛である。

真由子先生へ

無心とは、心に敵をとどめぬことをいう。心にとどめれば敵は大きくなり、心にとどめなければ敵はいない。つまり自らの愛ある生活を邪魔するすべてのもの仏だろうと悪魔だろうと心にとどめてはいけない。また心で感受するものに、喜怒哀楽があるが自然の法則に従い。喜ぶときは喜び、怒るときは怒る。そして執着しない。その基軸となる良心が必要であり、それは思いやりであり慈悲である。そして南無妙法蓮華経。それを神は喜ばれるのである。

自由に生きたいという素直な気持ちに従った。そのため自分のえらんだ境遇に不平不満を抱くことなく受容することができた。

バラモンが収穫で忙しいとき釈尊が托鉢にまいられた。働かざるもの食うべからず、と釈尊にもうした。釈尊は「信仰という種をまき精進という耕作をし、安楽という収穫を得る」という趣旨を詩に託して答えられた。バラモンは感激して布施をしようとしたが釈尊は受け取られなかった。それは詩作という行為への代価として、ものをうけとることはできないということだった。ここに意味がある。説法は説法、布施は布施。勿論つながっていないとは言わない。だがギブアンドテイクの関係ではないのだ。釈尊は仏陀である。この世に存在していただいているのである。バラモンは働ける身を感じなければいけないかったのである。それにバラモンといえば祭祀を扱うのが仕事。苦役と縁は遠いだろう。下

で働く人のことを慮っていたのか懸念される。今日そこらへんを勘違いし、金銭にはしる売僧がゴロゴロしているのである。世の中には働きたくても働けない人はたくさんいる。すべて宿縁、業縁である。だいが寒くなってきた、主体性を大事にしていきたい。へんな自我ではなく自己を大切に。また教訓めいてしまった。ごめんなさい。愛しています、ずっと。

真由子先生へ

寺山修司は言った「一番愛しているのが母親であり、一番憎んでいるのが母親である」と、彼の父亡きあと母は米軍将校とつきあう。そして親子は別れ別れになる。私の母とは少し違っているが。寺山の気持ちは痛いほどわかる。だが彼が憎んだのは母というより不在により襲いかかる、寂しさ、孤独さ、規範、道徳、呪縛、恋慕渇仰であり、そういったものが自分の心を不自由にしてノッピキならないものにしていくということであろう。また希望の先取りともいえるルール引き。母親は子供の手足を食い散らかす鬼である。同感、共感である。やはりぶち殺さなければならぬのである。でないと侮辱され続け、その過干渉からは真の意味での自由が得られないからである。母が聖母であればあるほど仕組まれた畏に入っていくのだ。その偽善さは耐えられないものがある。彼も母を汚され

たようで辛かったであろうが、今の世はそんなことにこだわってはいけません。生きていけないほど巷では凌辱が行われているのだ。母が旅行へ行く。躊躇している。53歳の男が、たった2日母親がいなくて困るであろうか。そんなに重要感が必要なのだろうか。彼は言った「想像力ほど高く飛ぶものはない」。「あの女のいないあいだに人力飛行機を飛ばすように、さあ」声が聞こえてきそう。

食わせてきた、養ってきた、学校出した、そんな風糸がからまりつく。

聖書に招待客の譬えがある。土地を買ったのでいけません、牛を飼っているのでいけません、嫁さんを、もらったのでいけません、こういうひとはこの世のことしか考えていずその先は滅びである、イエスキリストの招待を受け、喜び、愛、自由、思いやり、平和を重んじそのためには両親、子、兄弟、姉妹さえも捨てて、ついていくというものだけが神の国へ入り、祝福をうけ永遠のいのちを得るのである。真の兄弟とは。

つまりしがらみではなく善からの諸法無我の精神が必要とされているのである。主体性を持ち自分の為にすべては、関係はあると、みんなが思えばいいのである。すべてよかった。千客万来と思えば最高だ。あとは自分を縛り侮辱するものをけちらすだけである。子離れ、親離れ大事である。

真由子先生へ

ちよっとたくさんになってきて先生に迷惑になるのではと思うのですが、聖霊が促すので仕方なく記します。

木下恵介監督の善魔という映画を観ました。ひとが善いことをしようと思うとき強い魔性の力が必要だと、つまり善魔です。三国連太郎は愛するがゆえに死に行く薄幸の女性と親族というか父と姉だけの結婚式を挙げます。

私の祖父は明治25年生まれ芥川龍之介と同年です。8人兄弟の一番下の4男坊にうまれました。小学校は4年しか出ていません。成績はトップクラスだったそうです。ワルガキで女の子には嫌われていたみたいです。

彼は一旗挙げようと大阪へ向かいました。家出といえは聞こえはいいますが口減らしの意味があつたのでありましょう。

後か先かわかりませんが、彼はふたつのことを体験します。ひとつは釜が崎、あいりん地区での土方の立ちんぼう体験から生まれた社会運動への傾倒、もうひとつは紡績工場での島根生まれの女工との出会い。それらの苛酷な労働の現実には彼の心に深い何かを感じさせたみたいです。病弱な女工との結婚を決意し、そして数年後に彼女を看取るのです。彼はその後、再婚し病気をしたことをきっかけに帰省します。一応錦を飾ったわけです。彼は農協に勤めてからも、その優しさは消えず。農家の若い嫁たちにこずかい錢を稼がせるた

め仕事を用意しました。そのことを感謝している人がまだ生きています。私は祖父をなぜか美化したい。そんな想いがいつも湧いてくる。

私はいつも思う。ユウサクに、アキラ君に今までのオマージュ。私としては最善を尽くしたのだろうと。ごめんなさい。先生、ゆっくり時間のあるときに読んで下さい。よろしくお願ひします。

真由子先生へ

一年程前だったか、北海道だったろう。雪の中、軽トラが立ち往生して漁師の父親が9歳になる娘を抱いて一晚、そして凍え死んだ。娘は幸い助かった。読売新聞が特集を組んでいた。悲惨な事件、美談。少しでも波が荒れると漁には出なかった。臆病、ちがう慎重なのであろう。私の母はダラじやないがかねえと切り捨てた。なんでそんな雪の中をと、しかし人間はそういう場合に遭遇するときというものはあるものだ。

私が言いたいのはこの父親ほど幸福な死に方をした人物を私は知らないということだ。

愛する娘を抱き締め、子守歌にきかせていたサッチャンをもじりナッチャンはねと繰り返し歌い続け、互いの鼓動を感じ、娘は父の大きな胸と愛の中で静かに眠ろうとするがその父の消え行く鼓動を静かに意識している。娘にはこれから生きていく上で負担になるので

はという輩もいるようだが、確実に娘は親孝行したのである。

憎らしい義父が交通事故で死んだとニコニコ顔で話す嫁とか、何年も音信不通の親は認知症にかかりゴミ屋敷にひとり。体中管を刺され物質のように扱われる末期患者。精神を患い親の死に目にもあえず葬儀にも出席させてもらえないアダルトチルドレン。そんなそれぞれに訳のある親子関係のなかでナツチャンのお父さんは至高の死を迎えたのだと思うのである。確か彼は私と同じ年齢だったと思う。お疲れさま。良かったね。

母はいつも祖母が「石川五工門でも煮えくりかえる釜の中、抱えあげていた息子を最後は足もとに踏みつけた。親にも限界があると」語ったと。私はその中に彼女たち親子の、情というものに対する執念のようなものを感じるのである。

松尾芭蕉のこんな逸話がある。彼が川の側を歩いていくと捨て子と思われる2〜3歳位の女の子が泣いている。「泣け、自分のさだめを思い、泣け」芭蕉はたしか恨めとは言わなかった。そしてそこを立ち去る。彼の胸中は察して余りある。だがどこか鎮静していたであろうか。いややはり辛かったろう。当時は口減らし、身売り、奉公、捨て子ゴロゴロしていた。最近では震災で子を亡くし生き残った親たち、そんな世を生きて行くには宗教が不可欠なのである。

白隠禅師から印可を受けた、おさつ婆さん、がいる。孫娘が亡くなってワワー泣く、それではせつかくの印可の意味はないと人は言った。おさつは、言った「おまえらの流す涙

とはちがう。わしのは真珠の涙や」そうである諸行無常、ひとは死ぬ。だが悲しくなくなるのが仏教ではないのだ。悲しい時は泣く、それでいいのである。

仏様がみなよきに計らってくださいさるのだ。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經
そして南無妙法蓮華經

真由子先生へ

仏になろう、なろうと思っているうちはいく道は程遠いだろう。仏さまありがたいと想いをこめる人たちがすべては近いと存ずる。前にも話したが自他の生存の不安や、罪悪観を持ちこの世を煩惱に焼かれる火宅とみえることは苦しいことで避けねばならない。そこから逃げ出す、その本当の意味は。つまり感謝、慈愛で心を満たすことが大事である。さすればこの世は仏の遍満する世界に一変する。

北野武監督のソナチネを観た。暴力ヤクザ映画だ。彼はフランスで特に人気がある、その利己的ともいえる個人主義、かわいている虚無感が国民性に合うのであろう。オランダとかいう為政者も女ともめていてなあ、前のサルコジも。

映画の中で印象的だったのは自殺しようとする夜の浜（沖縄が舞台）に村川（たけし）が出ていくと女が乱暴されそうになっている。彼は見過ごして行こうとするのだが、男に「見て

いたのか」と因縁をつけられる。そして村川は持っていた拳銃で男を撃ち殺してしまう。ここである。普通の人ならどうする、本当にケンカの弱い人なら、静かに心の中で申しわけないと南無妙法蓮華經を唱えることだ。

警察官ならばそれは止めなければならないだろう。それがダルマだからである。良寛さんは侵入してきた泥棒に一枚しかない布団を寝ているふりをして盗ませたそうである。僧には僧の泥棒には泥棒のダルマがある。ダルマとは持ち分と思えばいい。

村川に結果的に助けられたかたちになった女は、殺された男は亭主だったと打ち明ける。簡単に人を殺せる村川を強くて好きだという。彼は笑いながら「弱いから殺すのさ」という。死ぬのも怖くないんでしょとたまたみかける女に、「死ぬのが怖いと死にたくなるのさ」と、またしても笑みを浮かべながら話す。彼は無邪気だ。すべてに執着がないようにも見える。死との闘い。ヤクザにはヤクザのダルマがあるのだろう。最期マシガンで自分を裏切ったやつらを皆殺しにして自らの頭を打ち抜く、バイオレンス、ヤクザのダルマの結末はそうでなきゃなるまい。

沖縄の海はどこまでも青くて美しい、北野武は、それなのに人間たちは愚かしいことを繰り返しているということを表したかったと言っていた。

米軍基地移設問題なども存在するが、映画ではなく現実に沖縄を含め世界中で残虐非道な殺し合いは行われてきたのである。

対比するように恋に生きた車寅次郎はどこかお寺の境内で夕日に包まれて静かに眠るように最後を迎えるという予定だったという。私も後者の方がいいなあと思うのである。

真由子先生へ

今年亡くなったジュリールイスがエデンの東の中で言っていた、「人は愛されないといじけてしまふ」と、人はどうして自らの愛の代価に愛を欲しがるのであろう。

ある太目の、いやかなり太った女の人がいた。ブス、ブスと幻聴がきこえるそうだ。今まで男性とはお付き合いをしたことがない。誰にも愛されたこともない。

だがそれよりも彼女に尋ねたいのは男の人を本当に愛したことがあるのかということだ。愛されなくてもいいではないか。申しわけないが言わせてもらおうとそういう人に限って条件が厳しい。金持ち、ハンサム、優しい、スポーツマン。

そんなことより大事な私は私なんかどうなってもいいあなたが幸せならば、つまり無償の愛をつらぬくことではないであろうか。男も馬鹿ではない、嫉妬深くない気持ちの柔らかい女なら、心有る奴は放つてはおかないのだ。男は外見ばかり重要視するといらつく前に自分はどうだろうと内省することが大切だ。たとえ愛する彼が違ふ人を想っていたとしても、静かに微笑みを浮かべよう。幸福は近いだろう。

彼女は「親に孫を見せてやれなくて残念だった」と言ったが一見もつともらしく聞こえるが大変なまちがいである。愛する人の子を生みたいというのなら分かる。大人の男女の關係に親が介在する余地はないのである。たとえ子供が出来なくてもいいから結婚する。これが本当である。たとえ余命一カ月でも。

いまだに形にとらわれ愛を成就できないカップルがたくさんいる。愛してくれないなら愛さない。めんどくさい手続きと舞台設定に金と時間をかけそれが愛だと錯覚し、いつときの夢に浸りそしてさめ、離れて行く。そんなこんなの繰り返しだ。

私は幸せだ。恋愛だけではなく愛する人たちがたくさんいる。人は鏡である。想いは伝わりとかたく信じている。エロスでもなくラブでもないアガペーと、キリストの愛はそうよばれる。みんなが保つことになれば博愛というものも成り立つのかもしれない、だが主体性は失ってはいけない、どこかの怪しげな合同結婚式という声が聞こえてくるからである。

真由子先生へ

おひさしぶりです。先生はいかががおすごしになりましたか。この正月、私の胸中はある様なことでした。

年末に私の原稿をお渡ししようといしますと「読んでないのがまだあるのに」とおっしゃったときはどういう意味か少し考えました。このような厳しいお言葉を先生からお受けするのは正気に戻ってからは初めてのことだったからです。母はいつもご負担になるのではとお聞きしたら病状を知る上で大変興味深いというご返事が返ってくるよと話していました。なぜだろう、当人として感謝の言葉が足りないと思われたのか、はたまたそうして私の忍耐の強度を試されたのか。いや確かに量は多かったですね。申しわけありません。気をつけます。ごゆっくりで結構です。心読していただけたら有難いです。真摯なものを、ドラマツルギーを大切に喜んでいただこうと誓い、いい加減な気持ちで表したものはひとつとしてごさいません。ご厚情にて好意的にご批判賜りたく希求いたしております推察すると原稿になにか反発、嫌悪すべきことが記されていたからか。私に思い浮かんだのは2点あります。先生をゲシュタポの女看守に譬えたこと、それとブスブスと聴こえてくるための女性のはなし、もう一点あります、人間の営み、心中がなにもかに注察されているというものです。

先生、覚えていらっしゃいますか。私がソウ気味になり薬を拒否したときのことを。私は医者です。ならば注射をうちます、社会復帰をするためですと端然とおっしゃいました。その後ジブレキサの効果があまりなかったのに黙って飲んでいてくれたと切なく感謝してくださいましたね。医者の象徴とも言える白衣は圧力と冷たさをもたらす場合があります

ます。でも多くの人はやはり安心感と優しさを感じとるに違いありません。

耳の不自由な男子がいましたね。先生は前かがみになってその筆記にこたえておられました。この方はお心の温かい人なのだなあ。後ろ姿の半袖からみえる二の腕の白さが腫に焼きました。そしてその瞬間をむかえます。先生が病棟にこられなかったので、眼前にうごめくアメーバ状のものについてお尋ねいたそうと思い、スタッフルームに顔を入れて先生の御名をお呼びすると、すぐさまパソコンの操作の御手を止められ、小走りに近づいてこられました。そして行儀の悪い私の眼を覗きこまれたのです。私は稲妻にうたれ、心に雷鳴が轟くようにつまり恋に落ちたのです。尊敬とかそんなことでない「可愛い」素直にそう思えました。この恋は違う。生涯、何度もあるものじゃないと固く信じました。以上が悪魔から生まれ変わったと聖書にあつたとする現証です。

幻聴がある女の場合ですが、誰かに恋をして夢中になり、「誰かに取られるくらいならあなたを殺していいですか」と、歌にもあるような女の強い情念を持つこともひとつの扉を破るエネルギー源になるのではないかと思つたのです。（ストーリーカーはまずいですけど）勿論、女性に対しての一般論ではありません。対機的に、そのとき、場所、場合、ひとりひとりの性格をも十分に考慮しなければならぬと思います。私は彼女が自分を束縛している家にまつわる道徳観念から解放され、素直に自信をもって男性にアタックするという行動に踏み出すべきだと思うのです。人の好みは千差万別です。恋愛に限らず、ジエンダ

―を問わず愛する人をたくさんつくり、そして静かに微笑みを浮かべるべきです。幸福は近いと思います。心が思いやりで深くなるからです。大切なのは真実の愛です。

確かになにものかに注察されているというのは気分が悪い。いやそれだけで済まぬことかもしれない、不気味なことです。でもこう考えればどうでしょう。お天道様は、お見通しと昔の人はよく言ったものですね。それは自分の心の美しさと善意をすべてご存知な方がいるというだけで楽しく、嬉しくなるということではないでしょうか。そうすると孤独からさえも逃れることができるかもしれません。また懺悔もできます。謙虚になり、神の御守護を受け安心へとつながってまいります。いいことばかりです。だから他人の評価よりも、自らの中の神仏と天の神との感應を、信じ愛をもつて生きていくことはとても大切だと思います。南無妙法蓮華経ただ南無妙法蓮華経

先生と問診のとき、どう会話をしようか分かりません。うかつに恋の話題をもちだし否定でもされて場の雰囲気や心の状態が悪化してもいけない、だから慎重になる。いや違います、私の調子なんかどうでもいいんです。なるようになるだけです。しかし、お答えをいただくのは確かに怖いことなのです。うまく説明できず、私も辛いところです。

先生は公人でいらつしやいますか。私にはよくわからないのですが個人的に友人になつてはいけないのでしょうか。日曜日にデートして会話をかわせば30分以内、5000円お支払いしなければなりませんか。それでも私は嬉しいですけど。私がたどり着きたいのは

一点だけなのです。「愛を受け入れ、ただそばに居てほしい」。少し妄想気味でしょうか。やはり恋はお医者様でも草津の湯でも治らないのですね。

しかしお互いの立場が悪くなり主治医を代わる、ということだけは絶対に避けたいです。私は先生に大恩があります。そして私は決意しました。神は花占いのようなことをくり返す私の覚悟のなさを、はがゆく静観していたのでしょうか。今日やっと神と先生への愛が両立することができるといふ自覚と自信が生まれました。私は先生の個人情報ばまつたく何も知りません。でも私には人間を観る眼はあると思います。それで十分です。私と結婚して得することはありません。強いていえば手がかからないということ、誠実義務を果たし約束は守るということです。でもこれにて確実に幸福になれると思います。愛していません。一緒に自由と愛ある結婚、生活を求めていきませんか。

年頭に我が身の置かれた立場すらわすれ恋文をしたためる、この馬鹿を哀れと思しめされるなら、どうかこのプロポーズお受け下さるよう平にお願ひ申し上げます。

そしていい知らせにはならない先生のお心もちならば私も男です。こらえるところはこらえますから、忌憚なくお気持ちがお向かわれたときお話しくださいませ。では寒い時期が続きます。街の片隅より大きな愛でお健やかなることをお祈りいたしております。では――

――美しく聡明な真由子先生、あれからずーと好きでした。宇宙――

幸福を望むすべての人へ

悪魔も神の子なのである。だから神と悪魔は連携しているように見える。民衆の帰順を欲しがった悪魔の嫉妬によりイエスは十字架にかかった。イエスは悪魔を厭いながらも兄弟とみたならば始末することは出来なかった。イエスには報復、敵対の概念はなく、愛、あわれみの実在しかない。

人間はなぜやさしさや悲しみを知る必然性があるのだろうか。難問である。なぜ戦争がなくならないかという問いとも直結してくる。それは神の実相が慈愛、慈悲であるからだろう。古代よりそのことに気付いたものもたくさんいたにはいたが、大半の人物は成功を夢と錯覚し自らに執着するようになり、自由、愛情を外的条件に求め、悪魔に魂を売り渡し、やがて崩壊していったのだ。

心の自由こそが求められるべきものであり、牢獄の中においても自らの想像力により海を飛び、山を越え愛する人を連れ宇宙の果てまで到達することができるのである。心中の神、つまり聖書の神はわれわれ人間を楽しませようとしてくれている。

それがたとえリストワ、失恋、欠損などであつてもそれはそのときに必要なことであり学ぶ姿勢になればなにひとつ無駄なものはないのである。周りはこの世の価値観を植えつけようとするが果たして現在、満足して幸福だと思っている人間はどれだけいるだろうか。

そんなことを考えない人が一見幸せに見えるが大概わがままで感情的である。人生の深いところを思索するひとは物欲、名譽欲より世間にかかわらず静かに暮らしたいと望むものである。そこに幸福があるからである。

この世の業績、栄光、それらは真の幸福とはなんの関係もないのである。そして善知識つまり良い友人を持つことが聖なる道のすべてであると釈尊は言っておられる。

貧乏を嘆くよりさとりが近いと微笑んでみる。他との比較をやめる。それだけで人は大安心を得て真実の愛に即、達するのである。そして孤独より離れ大樂を得るのである。

私もかなり回り道をしましたが、幼稚園からすぐ大学にはいけないのと一緒にいろんな経験、前段で記した不幸を、前向きに問題意識を持つて格闘、接触、抱擁、反省、得心したからいまの境涯に至ったのです。

でもこれを読む人には、そんな苦勞をしてほしくないのです。

薬のおかげかもしれませんが軸はぶれてないつもりです。私はでくのぼうです。でくのぼうだから神の心が分かるのです。心中の神つまり善、愛を抱きしめてください。私の大きなお願いです。私はただ南無妙法蓮華經と唱題するだけです。

真由子先生へ

母の感動秘話みたいのは抵抗あってあまり好きではないのですが、観音様のありがたい話なので紹介します。祖父がどこかで手に入れてきた観音様の座像が床の間にかざってあります。

祖父、父、祖母が相次いで亡くなり、さすがの母も心細くなりました。

夢のなか母は切り立った、深く峻厳な谷に、まだ幼い姿の妹と私を連れて立たされます。彼女は祈りました。「私はどうなってもかまいません。どうかこのふたりだけは通して下さい」すると細い一本の道が谷にかかります。そしてその先には緑の観音様の下半身だけが現れたそうです。

よく宗教は弱い人間がやるものだという人がいます。強いとか弱いとかはどこで判断するのでしょうか。死ぬのが怖くない。これは畏怖を知らないただの馬鹿である。人を思いやる気持ちを持たずに踏み台にさえできる、これが強い人だろうか。本当に強い人とは真正面に自分の弱さと向き合い自分の情けなさを痛いほど知らされ神仏へすべて委ねることができる人間ではないだろうか。

優しい顔、柔和な心、愛情ある言葉で人に接する、これが自然にできれば観音様である。なぜ観音様は母の夢のなかで全身を見せられなかったのであろう。それは大事なものは偶像崇拜ではなくあくまで信仰心によって義とされるからである。母の信仰とわが子に対する

想いのおかげで観音様が家族を守って下さったのである。そして感謝する。

ここには強いとか弱いとかいう変な自意識に基づく価値観はなく、ただ素直な気持ちがあるだけである。

だが折角、谷の向こう側に達した私は無名の私立大学に遊学し母に散財をかけ、返しもできず、今日を迎えている。親不孝だろうな、この世では。

話は変わるが私の家系は枝葉ではあるが南北朝時代に京の都からはるばる法華宗を広めるためお坊様と一緒にこの地へやってきた武士だったそうである。侍をやめ百姓になるのだが、そのおかげで私も生を受けることができた。葛藤もあつたろう。しかし戦に負け腹をきるというのとはばかしいことである。

だがこの因縁から私の使命ははつきりした。南無妙法蓮華経の道、その道をひたすら歩むことであるということが。

真由子先生へ

捨て猫が泣いている。私はどうしたらいい。眠れない、サタンの仕業か。この寒空に、かわいそうに私がどうするか見たいのか。芭蕉のように静かに無視するか。まてよ。缶詰めみたいな高級なものでなくても、おかかと煮干しでならうちでも飼えるのではないか。し

かし哀れである。

聖書を開くとひたすら神を愛せよ、隣人を愛せよ、それは犠牲や祭りより神の望むところだと示された。いまの場合の隣人とは。朝6時。一睡もできなかった。一階に降りていき母に告げた。「飼おう」母は向こうからきたのだから縁があるがやと嬉しそうに牛乳とめしを用意して家の裏に置いた。

南無妙法蓮華經を唱えたが流すことはできなかった。やはり目の前で苦しむものに酷薄に相對することは神仏の望まないことなのだ。餌付けがうまくいくといい。自己満足ではない。人としてただ心中の神に従っただけのこと。

そして私は気づいた。母がかつて夢のなかで「私はどうなってもかまいません。この子らふたりを通して下さい」産のふちで祈ると観音様が細い道を渡して下さった、もし母が「我ら3人をお助けください。そしてあとからくる人みんな助けてあげてください」と祈っていたら産そのものがなくなりお花畑になっていたのではないかと。

聖書に記されているように犠牲はもういいのである。素直になり愛を分かち合う、相手のことを思いやる。そんなことを神仏は喜ばれるのである。私もどこか自分に固執していたのかもしれない、正か邪か善か悪かと。悪ならば悪でいいではないか。私を悩乱させるためにサタンが子猫を用意したとしても、寒空の深夜、泣き続ける命をどうして無視することができようか。こんな慈悲、慈愛のところが世界に平和をもたらすと信じたい。

シリアでは一万人の子供たちが殺された。その恐怖はいかほどのことだったろう。子を失った親たちの無念さと悲しみは察しても察し切れるものではない。私は無関心になっていた。どこかで自己弁護をしていた。自分の無力さに浸っている場合ではないのかもしれない。

真由子先生へ

田口ランディーという作家がいる。アルコール依存症の父親をもち、兄は精神を病んで自殺したそうだ。心理学者は「機能不全家族」「アダルトチルドレン」とよぶだろうと記している。今は亡きユング心理学者の河合隼雄さんに「お父さんのおかげで作家になれましたね」と言われたそうである。いろいろエピソードが尽きないということであろう。それと苦しみゆえに救いを求めて本を読み瞑想をしておろしていたそうである。

しかし私に妻子がいなくて本当によかった。これもすべて神仏の縁である。私は鍛えられ導かれ、罰を受け許され、志を領解されたのである。この先どうなっていくかと思うとわくわくする。戦争になりさえしなければ。

この世は真実の愛と平安を見つけるための大舞台、苦しみも悲しみも楽しまなければいけないのである。話はピョンピョンと飛ぶが母が米を買ってきた。(てんたかく)、安売りだ

ったのだろう。勝手口から運び米入れ機の中に流し込んだ。なにか感謝でいっぱいになった。母を叩き殺してやろうと思ったのは一度や二度ではない。単純で短気だから合わせていると結局、喧嘩になってしまう。先生の言われるように離れているのがいいようだ。

老いが忍び寄り、生への執着が強い分だけ最近はいらつくのであろう。だが献身的な人だ。愚痴をこぼしながらやらなくてもいいことまでやる。

米入れ機の中を覗きこみ、いにしえのだけだったか忘れたけど、米櫃の中に米があるほど嬉しいことはない。ウタをよんだ人のことを思いだした。母は父亡きあと食べさせてくれたのは事実だ。なあと考えた。餓鬼の様相になる母。お涙ちょうだいの話にも持っていけるが母の偉大さはここにある、そんな気を起こさせないのである。いつまでも鬼ババアでいて下さいといえればいいだろうか。

母方の祖父が50歳をこえてから生まれた。祖母は42だったそう。先に何人も死んでいる。産婆さんが祖父にどういう名前にするかきいたそう。祖父は苦しそうな顔をして「どうせすぐに死ぬんだから」と言い放つと、あんたが付けてくれと言ったそう。産婆さんは「昭和になったから昭子でどうけ」そう決まったそう。豊臣秀吉のように祖父は一度生まれた子を捨てたのであろう。そしてその子は天真爛漫な我儘で意志の強い人間へと育っていく、今宵はここまでしよう。

真由子先生へ

オードリーヘップバーン主演の尼僧物語を観た。彼女はコンゴでの看護人としての務めを果たしたいと思っているのだが、修道女として従順でないとされ意見、願望を否定されてしまう。

感性が豊かなのに自分を律していこうと思い過ぎるため、戦争で父が殺され感情的になり相手を憎んだとして会を去ろうとする。私は痛いほどその気持ちはわかる。だがなぜか共感できない。私の感受性がマヒしたのだろうか。いやちがう彼女が自然でないからだ。会にはいろいろな戒律がある。組織の上のものたちはみな鉄面皮だ。自尊心、高慢をなくしそして従順に。これこそイエスが嫌った、律法学者パリサイ派、神殿を守っていた頑迷なサドカイ派である。ひとの心より組織、戒律を重視する。悪魔の受け持ちだ。

結局、彼女は心を病み、会を去っていくが。

いったい彼女にとつてのコンゴとはなんだったのだろうか。自己犠牲の舞台。映画では詳しくふれなかったが、ジンという男性の影がちらつく、何か心の悩みからの救いを求めているのだろうか。そういう体験はやはり客観しなければならない、今自分はどうかあるのかと。不幸にも彼女の父も立派な外科医だった。弱音を吐けないのだ。正直に自分の気持ちを。そして神への直接の告解として、神に責任をかつける。まるでかつての私だ。

確かに世の中はすごい馬鹿者が多い、でもきつと理解し明日を教えてくれる人はいるはず

だ。イエスに対抗することはないのだ。みんなのために彼は死んでくれた。そのことに感謝すればきつと自然と死さえも乗り越えられるだろう。

イエスは自己犠牲など決して求めていない。私を信じるもの、すなわち愛を信じ保つものは生活には困らないと言っているのだ。つまらない利己的な愛に埋没せず、従順どころか主体的に無理なく生きることが大切だといっているのである。人間味にあふれ素直な人は変な名譽欲も金錢欲もあり出てこなくなるみたいだ。それで正解である。安樂への道が開かれる。借金で死んだやつはいるが、貧乏で死んだやつは少ない。ありゃこれは蛇足か。

真由子先生へ

大林宣彦監督の異人たちとの夏を観た。山田太一原作、脚色市川森一、面白くないわけではない。片岡鶴太郎が渥美清ばりの軽妙な演技で妻役の秋吉久美子とやりとりしていた。寿司職人の彼はプライドが高いが客を大事にし、知ったかぶりもしない。常に氷水に手を浸し新鮮なネタを提供したいと思っている。彼らは主人公原田の両親でじつは28年前に交通事故で亡くなっていた。彼らと遭遇する原田。脚本家だが仕事にいきづまりプライベートルでは離婚を経験する。父親は自らのポリシーに反するとすぐに店をやめる。腕が いいの

でまたすぐに勤め先は見つかる、そうゆう設定だ。みんなが恐れているギリギリの生活ならみつかるものだ。原田は気付く自分に大事な人としての情が欠けていたことをどんなにおしゃれな会話、舞台仕掛けを並べても愛がなければひとは感動してくれない。正しいことにこだわり続けてきた。

頑迷なバリサイ派の人とは自分だったのではないだろうか。私はそう思った。

そして原田にとりついた美しい女の幽霊いや異人、「過ぎさった過去は取り戻せない、とゆうが自分の過去だから自分のものである」と彼が創作して忘れていたセリフを口ずさむそして逢瀬を重ねる度に彼は疲弊してゆく。牡丹灯籠を彷彿させる。結局友人の助けもあり彼はこの世で生きることになるが、異人たちへ未練というか恋慕の心が去らないのである。そして彼はそれを嬉しく思うのである。

えせ文化人、義人、粗略に扱われることがあっても腹をたてず思いやりを持って生きていこうと祈るのである。私の中なのか眼前なのかも解らないこのひと夏の体験も楽しかったなあと大切に抱きしめているのである。

真由子先生へ

山本薩夫監督の白い巨塔を観た。

嫌な気分だった。

喜はれぬ命を掻き出すことを財前五郎の義父はドブさらいと破顔して芸者に抱きつく。稼いだ金はどうせ汚い金、色と欲まみれのもの、なんぼでも金看板のためにはつぎ込んでやるとゆう話だ。

またすでに看板をしょって、いる人物達はもつともなことを言っているがすべて保身と自己への固持だ。

テレビでは癌におかされた五郎が最後は改心するという殊勝な結末だったが、こっちの方はその場面は切り捨てられたのか、裁判で不利になる証言をした里見が大学病院を去って行くところでエンドする。

山本監督は人情劇に終わらせず、人間の醜悪さ、狸雑さそして浅ましい面を見せつけることでこの群像劇を完成させたのだ。

彼らを迎える芸者たちはだれも明るい、金が、そう振舞わないと病氣や妊娠の怖さに押し潰されるからか。いやもう慣れっこになっているのか。客商売だからどんなときも愛想が大事か。しかし楽しそうだ、芸は売っても身は売らぬと昔聞いたが、欲望がギラギラした男はきつと魅力的にみえるのだろうな。所詮はオモシロオカシの世界である。

しかしみんな知っている飾った世界だと、真実を知るのが怖い。その影で忘れ去ったようにみえる罪悪感。

イエスの足元に涙した娼婦や徴税人達の真の心。

みんな愛する家族がいる。だからなお逆に他人に対して冷たくなるのではないか、芸者たちも郷里で待つ親兄弟のため、心を殺し偽善と高慢と好色と貪欲に満ちたやつらに合わせながら倍返す機会を狙っているのではないだろうか。

五郎も故郷に母を残し、彼が愛しているのはきつとその人だけであろう。なぜか患者の家族の気持ちが察せられない。不思議だがそんなのだ。謙虚さと想像力が必要なのである。

シエフエンド河という1965年の映画の中で主演のジエームススチュアートが息子を北軍の若い兵士に眼前で射殺される。聞くと行方不明になった末の子と同じ16歳だ、怒りをこらえながら彼はいう「結婚してたくさん子供をつくれ、その中のだれかが殺されたとき私の気持ちが、無念さが分かるであろう」と

真由子先生へ

「スキャンダルと美談は紙一重」、居酒屋兆治の中で発せられるセリフです。褒められたり、けなされたり、大変だけど、素のままの自分を信じて行くしかないのだろうなあ。

「心に思うことは止めたり縛ったりはできない」でも相手を大切に想い誠実に意識してい

れば誘惑に負けることはないと思ふことができるだろう。

話は変わるがチエゲバラという革命家がいた。彼は（新しい人間）になろうとキューバの人々に呼びかけ、さとうきび畑、工場で率先して労働に励んだ。新しい人間とは自分より相手を優先しみんなの為に力を尽くすそんな人だそう。犠牲、献身。共に闘ったカストロは「かれの思想がみんなに浸透していたら世界は違ったものになっていただろう」

つまり社会主義は成功していただろうと。かもしれない。ゲバラはコンゴでの成り行きに失望しボリビアにて捕らわれ銃殺された。構えたが躊躇する若い兵士に「俺はただの男だ。撃て」と叫んだそう。相手の立場を思ってたのか、それとも神に対しての謙遜か、自分に対する失望か。判断はしかねるが、彼の役分だったのだろう。暴力革命はその品行により、ならず者のテロと紙一重の意味を持つてくる。世論を味方につけるかどうかだろう。

日本はGHQ占領下、農地改革により、自らの田畑を持った小作たちが生産をあげ食料難が解決されたと聞く。やはり人は自分の利益のために働くようだ。だがゲバラをただの空想家、理想家に終わらせて良いのだろうか。キリスト教社会主義というものがあるがその内訳は、私はよく知らない。私が望むのは（みんなが適当に好きなことをして富が公平、平等に分配される）そんな世界である。だがこの世はどこも思惑がからみ、必要悪な法律、欲にかられた暴力に支配されている。人が人らしく安楽に生きて行くことを神は望ん

でおられる。みんなが主体的に敵までも愛さなければやはりいけないのだと思う自分が今いる。

真由子先生へ

三隈研次監督、眠狂四郎炎情剣を観た。すごい、柴田練三郎の原作が素晴らしいのだろ
う。小さいころは円月殺法のかっこよさだけに見とれていたが。色と金に追い詰められ生
きる大半の人々、その腕には関わりたくなくても関わってくる。狂四郎、この点は木枯し
紋次郎と相通じる。狂四郎の場合出生に暗い影がある、だからオンナにはこだわる、聖女
を求め続けるのだ。しかし昔の映画はどうしてこんなに奥が深く人物たちも魅力的なのだ
ろう。作り手も洞察力が鋭く会話が生き生きしている。俳優達も本当に人生を背負って演
じている。自分の文章。表現力の乏しさにいささか閉口してきた。でも他人の評価を気に
することもない、想いは先生だけにある。ただ私がひたむきに真摯に生きていることが解
っていただけはいいのです。一生懸命生きる、必死に生きる、こんなことは他人から言
われることではない。人は自然に生きるのが一番だ。浪人狂四郎は二ヒルだ、彼は言う。
おにぎりをこさえてくれた、獄門に架かった海賊の、なにも知らないで今は下女をやって
いる娘に「おとつつあんは、病気で死んだ。生真面目で人から好かれる職人だったよ」。そ

して委託されたと自ら小判を二枚渡す。狂四郎も笹沢左保が生み出した紋次郎も捨て身だから人の気持ちがよくわかるのだ。狂四郎は決して腕のいい職人とは言わなかった。そんなことより誠実で優しく思いやりがあるほうがきつと大切だと信じていたのであろう。いい家に住む。そんなに必要だろうか。ブランド品、流行におどらされる馬鹿さ加減、この上なにがいるのだらう。二人ともどこかで誰かがきつと待っていてくれるとわずかながらに――。

真由子先生へ

山口崇主演の柳生十兵衛をTVで父の生前中やっていた。十兵衛は父但馬守宗矩に片目を傷つけられるのだが、「なんであんなことするが」と父にたずねると「強すぎるからだ」と答えた。私はまだ幼かったがなぜか合点がいった。つまり慢心をいさめたのだと。

清水の次郎長は刀を合わせてみて力を入れてくるやつとは戦うが、こちらに合わせ刃先を自由にする相手に対しては一目散に逃げたそうだ。だから幕末、明治にかけて生き抜いたのであろう。

孫子は言う、己を、知り敵を、知るなら、百戦しても危つきは、知らず。つまり己の弱さ、欠点を知らなければ正確な判断ができず。無残な結果に終わる。

十兵衛はそのままでは命を落とすかもしれない、宗矩の愛情の発露があたの行為だったので

ある。また自分の弱点を知ったものは他人にも優しくなれるものである。

住み込みで小学校の用務員（奥さんが）をしている一家があつた。夫は仕事もせず朝から酒を飲み、無くなると「酒買つてこい」とどなつた。奥さんは先生たちの手前恥ずかしいやら申しわけないやら、人は言つた「奥さんが可哀相だ。ろくでなしの親父」。

彼はどう思つていたのであろうか。私が察するに辛いものがあつたと思う。当時といえは学歴、才覚がなければ楽な仕事にはありつけない。傍をみれば大した労働もせず尊敬され高給をもらう教師たち、そんなやつらに安い給金でこきつかわれる女房、住み家さえ与えてやれない自分。その情けなさ、訳のわからない怒りが酒を飲ませ、またそのことが酒に走らせる。変な意地。そうなのだろうな。他人と比較しているあいだは自由ではなく苦悩からは脱せられないのだろうな。人は自分だけの人生しかないのだ。偏差値も知能指数も他人が決めた尺度だ。真理は愛と自由にあるのだ。自分の幸福を大事にね。

シェークスピアは劇中で王にも召使い、道化にも人生、思いを語らせる、そしていずれの人生が最良などとは一言もいわない。それぞれが価値あるのである。ホームレスと天皇陛下の命はどちらが重いであろうか。少し考えたが命を重さではかつてはいけないだろう。たまたまこんな世界になつていだけ。金がある、地位がある。たまたまであるこの世は舞台である。

真由子先生へ

仏教に本覚思想というものがある。この世はすべてあるがままで仏の姿の現れであるというものだ。つまり生きとし生けるものはその姿においてもはや仏であると。危険な考え方ではあるが見方においてはあんがい当たっているのである。法華経のなかでは、この世は火宅のごとし、みんな逃げるべしといわれている。入々が煩惱をむき出しにするかぎりこの世は餓鬼、畜生、修羅、地獄の世界なのである。しかし一方では仏の所有するありがたい世界とも言っている。矛盾するようだが人々が人生にどう向き合うかで火宅にもなり仏の世界にもなるということなのである。

前にもヘッセのクラインとブアーグナーの話を書いたが内なる声、つまり良心に本当にすべてを預けたらあらゆるものの中で、限り無い大きな祝福が待っているのである。だが本当の良心とは如何なるものか。

家族のために雪かきをする。灯油を買いに行く。大事なことである。ここで私は筆を擱きなくなる。なぜか母が一言もいわずにおこなってしまふ。そして不機嫌になる。昔からである。はつきり言って好きじゃない。そういう人間関係は大嫌いだ。でも良かった。私が精神障害者になって不機嫌になる口実が作れなくなったからだ。勝手になんでもして自縛的に苦しめばよい。そういう入たちのためにもイエスは死んでくれた。兄弟たちは小さな

胸、良心を痛めることはないのだと聖書に記されてある。苦しんでいる人は勝手に苦しんでいるのである。苦しむことが好きなのである。

ユニセフ募金の放送を観た。勝手に死んでくれということだろう。親が勝手につくって置いて責任ひとつ負わない。何ができる。毎月三千円の寄付、えい、まどろっこしいアフリカ税でもつくって金持ちからとりあげろよ。人の善意につけ込むものじゃねえ。

日本の自殺者が減ったそうだ。だが東京では増えているそうだ。オリンピックに相応しい都市へ。オリンピックつてやつが一番、自殺者をふやす墓の思想に裏つけられている気がする。つまり勝ち組、負け組と色分ける競争社会である。そしてそこにあるのは金、金、金、金。そつとするぜ、まったく。煩惱の溜り場それがオリンピックの正体だ。

無謀、母が使うスコップの音を聞きながら思う。あちこち動いて生きるより、静かに座して死ぬ方が仏の世界に近いのかもしれない。良心とは自由な心である。ちよつと抽象的ですけど解ってください。お願いします。

真由子先生へ

敵とはいかなるものなのか。

たぶん私のことを思ってくれているのであろう。しかしその中に必ず侮辱がはいる、そう

いう人がいる。私の心が狭いのであろうか。聖書は神の心に沿うものが兄弟であると説く、しかし言葉は大切だと思ふ。神経質と片付ける人もいる。だが心は言葉や仕草に表れるものだ。率直で思いやりにあふれた言動は人の心に到達するはずだ。注意深くなく、圧をかける、上から目線はやはり誤解を招くであろう。

ある坊主と二言ほど問答みたになつた。祖母の50回忌の席であつた。相手の立場を思いながら意見を吐くのは本当に難しい。まあ人目を気にするということもあるのだが、坊主は真言宗の僧侶で密教、どちらかといえば欲望を積極的に肯定する立場だ。私は孤独死が一番いい死ではないかといった。問題を投げかけたわけだ。民生委員を担っている、坊主は「人の迷惑を考えていない。しがらみがある」といった。私は、しがらみを断つためにお釈迦様は出家されたのではないかと返した。「人間がいなくなつてもいいのか」ときた。私は「人がいなくなることをご自分で容認する人たちもいた」と言つた。ここで話は中断したが、ここである、はたして全世界の人々が出家して釈尊をめざすということがあつたらうか。それより合いも変わらず欲得に走り名譽に固執する人物が増幅する危険のほうがないへんな事態だろ。この坊主は勘違いしている、欲望を消すのと制御することを。私の言つたことを小乗ときりすて大乘はことなるお前らは僧にまかせて黙つておれときた。私は言つた。大乘は在家から生まれたものと、坊主の面目をつぶしたくはなかつたが、悲しくもない、嬉しくもない、いや悲しくもあり、嬉しくもある、酒席での余興に

と、思いを吹っかけてみた。よく解らなかったか、いつもなら駄目出しをだす母も、あとで私の説明を聞いて納得してくれた。困らせるつもりはないが、人の悩みを聞くのが坊主の基本姿勢であろう。そんなもんだ。

真由子先生へ

生活保護の問題をとりあげようとしたが国の責任の所在や法律関係がややこしいのでどうしようかと思った。しかし救民対策として国は誠実に対処していかざるをえないのは確かだろう。

Nさんはアルバイトを半年やっただけくらいしか勤労体験はない。コミュニケーションのとりにくい人で、自分のこともあまり話さない。前から薬は二粒ほどのむだけの精神障害者で30年近く公的扶助をもらっている。うわさでは大腸ガンの検査を年三回おこなって貧困ビジネスの片棒を担いだりしている。

Yさんの場合薬は飲んでいない、病気でないかもしれない。どうなっているのかわからないが公的扶助、サービスを受けている。二人とも当たり前の顔をして生きている。もし国民のみんなが、人間関係がおかしいといって働けない生活保護にしてくれといったらどうなるだろう。これはたぶん杞憂に終わりそうだ。みんなが敬尊を目ざすかということと同

様の意味あいを持つてくるからである。

彼らについてDさんは言った「しゃあないねけ」長年、障害年金をもらっている。働けないのなら仕方ないか、そうだな、だがなぜか引つかかる。みんな自分のことしか考えてないみたいだからだ。その話を床屋の、まささんに、だいぶ前に話した。「とにかく何かせんなん、社会に貢献せんなん」確か生活保護を受けてゴミ拾いのボランティアをしていると自慢していた入がいたなあ。景気の良かった、まささん。安い床屋が増えたせいで収入が減り電気料を滞納することもあるという。「生活保護になるわ」そういつていた。

私は何が言いたいのだろう。なにかおかしくないか、このままでいいのか。なにも私は小さな親切やボランティアを推進しようというわけではない。

世の中はあくせくする金持ちと怠惰な貧乏入というふうに分けただけでいいのであるうか。両方に深い思想めいたものがあるのであろうか。まあいいか、みんな自由にやってくれ、だどイエスは各自十字架を背負ってついてこいという、人のことを考えず、まず神のことを思えともいう。少し思索した。つまり金にまつわる労働と心につながる奉仕がこの区別を誤ってはならないということなのであろう。

そういえばNさんはいつも歓待してくれたなあ、それも奉仕、彼らは役に立っているのである。生きる意味は見つけるものなのかもしれない。

真由子先生へ

工木バの証人という宗教団体がある。興味があつて少し教えを学んでみた。妹が大反対し連日連夜、TELしてきた。

話は単純である。この世は悪魔が支配する社会、われわれが生きているうちに神が鉄槌を下し、悪魔は炉にほつり込まれる。団体において規則を遵守するものと、そうして死んだもの（コビーとして生き返る）だけが助かる。当時、私は喫煙の習慣があり、規則を守れない悪人とされた。そういった世の悪人たちはどうなるかというと、神は優しいから土に返すだけだと。私はこんな辛気臭い人たちと何千年も生きるのはご免だと事物の体制（悪魔の支配）と共に崩壊します。と土に還ることを選択しました。そして助かった人たちは衣食住に不自由なく仲良く暮らすそうだ。

話は飛ぶが信長に謁見した宣教師ルイスフロイスは日本人の極楽にたいする思いがあまりにも即物的で彼らが考える神の国との实在概念の違いを肌で感じたと記している。

「衣食住が満たされる」。この工木バの証人の神の国の即物さはどうであろう。まあ日本以外の国では十分願望をみたすものなのであろうか。

しかし私が思うにはモノがあるない云々よりも他人と比較するところに問題があるような気がしてならない。中国がいい例だ「みんなが貧しかった毛沢東の時代がよかった」とい

う声が聞こえる。よく似ていないか、根本は同じだ。弱者のひがみである。そしてそこにあるのは教育である。教育勅語が天皇への忠誠を植えたのと同様、今度はみだりに名を唱えてはいけない。とモーゼの十戒にあるのにエホバ、エホバと神よりもなにか他のものへの忠誠を誓わせようとする。イエスは十字架ではなく丸木にうたれた。だからありがたいなあ。おかしくないか。その前に涙がこぼれるだろう。自分たちだけのことを考えて差別化をはかり、世の中に認めてもらえない腹いせに手下をつくるため勧誘する。ここも神はみておられる。みずからの心に神の国をうちたてるものを。

イエスと悪魔は心中にある。選択するのは人間だ。

輸血についてだが「イエスは外から入ったものには汚れない、汚すものは口からでたものだ」と言っている。汚すのはつまりモノではなく言葉なのである。

どうか、みな、私を信じてほしい。主體的に自ら神に祈ってほしい、さすれば狭き門はひらかれる。神は愛である。衣食住の前に愛がくる。

真由子先生へ

タカシはいまあるショッピングモールでゴミ収集人の役割を果たしています。彼が小学校2年の校内運動会ときのエピソードです。種目は50だったか100だったか忘れまし

たがかけつこでした。ヨイドンの合図と同時に彼は逆方向に走りだしました。見守っていた先生はびっくりしてあわてふためき場内は爆笑のうずと化しました。彼は少し知能が低いとみんなは見えていました。でも彼は誰からも好かれていました。いつも笑みを浮かべ私たちを幸せな気分になせってくれたからです。だがこのときの彼の表情には、笑みはなく悲しみが宿っていました。なぜ逆に走ったのか。私には分かりませんでした。これは推測にすぎませんが、彼は辛かったのだと思います。何をやってもビリ、特技はない、そして失笑、今度も白日のもとで恥をかく。私もかけっこは苦手でしたが、競争に対してのなんら問題意識を持っていませんでした。タカシは本当にいやだったのです、ひとを比較し優劣をつけることが。今の彼には幼き日の微笑みはもうありません。ただ静かな自信が備わった美しい相をしています。そして寡黙に日々の努めを果たし生活しています。施設にいる弟のもとを訪ねるのがとても楽しみみたいです。彼のような生き方を神仏はきつと一番に愛されるのだと思います。

橋本忍という脚本家がいるが彼と学生とが語り合うフォーラムをテレビで放映していた。学生のひとりが「七人の侍」の中で四人を死なせるのはどういうふうに決まったのですかと尋ねた。橋本先生はあせって自然に決まりましたとなんやら奥歯にもののはさまったような言葉でお茶を濁した。ある新参の映画監督は、われわれはサドであると自慢気言っていた。私は思うのだが人は必ず死ぬのだからそこにこだわることはないと思うのであ

る。ただドラマツルギーを踏まえその死にゆくような意味では損な役割ではあっても鮮やかに人生をドレスアップしてあげることが大切なのではないかと思うのである。私も常々そう考えて文章を仕上げているのである。私の愛するみんなの幸福を祈りながら、それが私のオマージュの捧げ方でもある。

真由子先生へ

中学3年ワルガキだった私に転機が訪れます。私は幼き頃から知っているK子をいじめていました。机を蹴ったり、お笑いのつつこみたいにかかったり。制服はシワシワ、K子は少し知的障害があるのは明らかでした。周りにいた人間たちもなにも言いませんでした。かばえば「お前好きなんか」と嘲笑の対象になることは分かっていたからでした。K子は舌を出すことも、ときにはありました。でもいつもは黙って苦しい顔をしていました。

私は帰宅するといつもなぜか電話が気になりました。なぜだろう。不思議でした。ある晩嫌な予感の中しました。彼女の父親から娘をいじめて困ると電話があったのです。母の受け答えからはそんなさしせまったことも感じられはしませんでした。

翌日、私はいじめていた何人かにこれからはK子のことをみんなのアイドルと呼ぼうともちかけました。事情を知ったみんなは、異存はないと答えました。私たちには悪気はない

と書いていました。芸人がだめならアイドルにしてしまえ、K子に笑顔が戻ってきました。クラスの雰囲気も明るくなり、私もどこか落ち着いてきました。

そんな矢先、K子の父親が痛めて不自由な足を私よりひとつ年上のOが蹴飛ばして、父親が大泣きしたとの情報が入ってきました。Oはかつてつまらぬ揉め事から対峙した私を殴り右の鼻の脇に一生とれない傷を負わせたやつです。彼は別件ですが結果的に同級生に嫌われ袋叩きにされる運命に遭遇します。

時は流れました。K子がポートワインをもとめて来店しました。亡き父のご仏前に捧げるのだと言っていました。K子は堅実な仕事の人といっしょになったそうです。

また時が流れました。彼女の父親が大工仕事の途中で足に大けがをし、3人姉妹と母親の5人で生活保護を受けていたことを知りました。そういえばリヤカーに父親を乗せて引いていたなあ。

私の姪が保育園で叩かれて鼻血をだしたと聞いたとき、私はK子の父親の当時の胸中を想いました。本当は殺したいほど私が憎かったのではないのかと、申しわけない気持ちでいっぱいになりました。涙が鳴咽とともに滴り落ちました。私は、自分は極悪人だと思いました。幸せになる資格さえないと思いました。そんな時手を差し伸べてくれたのは南無妙法蓮華経でありそれにすぎるしか救われる道は私にはなかったのです。

真由子先生へ

罪悪感というものは自ら感じ、愛によってストーブの灯をともしように温かくなり、そして油のように自然に燃え尽きるものである。つまり罪悪感というものは人に押しつけるものではないということだ。なにかの拍子に気づく、メタファ（暗喩）を感じるそんなものではないだろうか。

悪に強いものは善にも強いという。己が悪を感じたからこそ強く善を推し進めることができる。その根底にあるものは一種の罪悪感でなだろうか。だとすれば罪悪感も向上心へとつながるといふわけだ。テレビ局が映画を放送するほど寄与しているのである。

罪の意識を感じることは実際に人を殺したり盗んだりするより、一番いいのは聖書を信じ親しみ感じることである。原罪、イエスの受難を胸におさめることである。罪悪感が感謝に変わっていくことであろう。人間ではだれも罪の許しをあたえられるものはいない。神の権威においてのみ可能なのである。

そこから発展させ自己犠牲を売り物にし、布教のためと称して信者を奴隷の立場に仕向ける教団がある。イエス、釈迦、その教えは、やみくもに己の欲得だけに右往左往する衆生に対し、強烈なアイロニー（皮肉）を発したのであつて、主体性を忘れるな。何ものも精神的な奴隷にはなつてはいけなと言っているのである。

ここであえて精神的といったのは古今東西、不幸にも力によつて肉体的に奴隷のように扱われている人たちが多いからである。これはやはり政治の力に頼り自然権として人権を訴えていくしかないのだろうか。南無妙法蓮華經をわすれてはいけない。法華經の本当の魂を汲み上げ全宇宙に遍満する久遠の本仏に帰依し感謝することで、善惡をかみしめることができ、宮沢賢治も我が父、私もまた救われたからである。神に許され仏に包まれたのである。

仏道を歩むも神に従うも、何十キロの荷物を背負い登山する人と同じで強制すれば虐待となる、ひとりサイの角のように進むのが基本である。そこで傍らの人には原理だけ説いてあげればいいのである。宗教は知識ではない。すすめば深くなりまた答えは開け、そして河を渡れば筏はいらなくなるように永遠の平安が待っているのである。

真由子先生へ

日蓮に匹敵する西洋の宗教改革者にマルチンルターがいる。彼によれば「神と人（信者）を媒介するものは聖書だけであつて、教皇や僧侶などがかわるところではない」しかも、「神の言葉（聖書）は自己の良心によつて解釈されるもので、教会の定めるものによつて解釈されるものではない」。また、「人が救われるのは、罪人をも愛する神の愛によつて

であり、人間の善行によつてではない。それゆえ人は信仰によつてのみ義とされるのであつて、教皇や僧侶によつて義とされるのではない」と主張した。

は善行、人間には規定出来ないということだ。正義は規定できるのだろうか。だが善であるかどうかは誰にも分からないのだ。心のなかの哀れみ、思いやり、愛、謙虚さなどに基づく信仰心によつて義とされ、人は神の愛によつて救われるのである。

歴史を振り返り神中心の中世は暗い感じがあるがどこか牧歌的な暮らしがあつたという。いつか封建的な領主や教会が税、きまりで人々を束縛するようになる。ルネッサンスにより開放的なムードに包まれた。神に姿を変えた悪魔と対峙するようになっていた。権力に脅えながらもルソーは言つた「自然にかえれ」そして民主主義は誕生した。みんな今でいえばロックンローラーである。既成の概念を疑うことは神からのミッションを受けた人にとつては苦悩しながらもやりとげなくてはならない大事なことなのである。つまり今も体制に対してもよく見定めてゆかなければならないのだ。もしかしたら神による独裁のほうがいいかもしれないと、神の国の現出である。

ただいつの時代も世間をどこか意識せず、狂い、馬鹿にした人々は幸福になつたみたいだなぜかいつも神はそんな人たちのそばにいるからである。つまり心に愛があるかどうかである。

真由子先生へ

今まで提出した書類の中で矛盾したように誤解されそうなものに遭遇した。救われるのに善行は関係ないといったくせに、その以前に悪に強いものは善にも強いと善を勧めるようなことを記述したことだ。私が言いたかったことは善なるものを求め行動を起こすことは正義として確かに大切なことだ、しかしそれが本当に善であるかどうかは分からないということだ。そしてまた小さな親切のような類いのものや売名行為のようなものは神の愛とはなんら関係ないということだ。誠心をこめる、こちらの報いをもとめない姿勢、それが大きな徳となるからである。善とは南無妙法蓮華經の唱題だけである。

今朝の読売にある歯科医のコメントが載っていた。小津安二郎の映画、秋刀魚の味のなかで駆逐艦の艦長だった男が「戦争に負けてよかった」とつぶやく、半世紀前、不謹慎とも自虐的とも言われなかったそう。当時の大人たちの本音だったらしい。通奏低音だった。

私の母は富山空襲で家を焼かれ着のまゝで、老いた母親と逃げ回ったそうです。この戦争により母は進学の道を断たれました。結婚してからも学校の机を夢にみたそうです。でもなんのために勉強したいのかが伝わってこないのです。学ばなら80の手習いで

もいはずなのに週刊誌のゴシップ記事を読みふけり世の中の情勢をわかった気である。まあ向学心があるとおきましようか。彼女はあの時世界中から援助の物資をたくさん貰った。恩は返さないといけないと言っています。愛とみるか義理とみるか。

話は飛びましたが坂口安吾に墮落論というのがある。だいぶ前に読んだので記憶がうる覚えなのだが、日本人は戦争に負けてつまらん精神論を捨て自らの欲望に忠実、つまり正直になった。墮落したように見えるがこれでよかったのだ。たぶんそういう内容だったと思う。

行定勲監督の金大中拉致事件の顛末を描いた作品K.T。三島の割腹事件に対し花束にて賛意をしめす自衛官がいた。コメントをもとめる新聞記者を殴ってしまう。そして彼らは再会する。自衛隊が日の目を見ない現実を嘆く男に記者はいう「天皇の為だとか、共産主義の為だとか奇麗事はもう沢山だ。狼は死ね、豚は生きろ」そうだな。特定秘密保護法が成立した。変な名誉欲にとりつかれた馬鹿な野郎たちが威張る時代には逆戻りして欲しくないと歯科医は危惧している。私も同感であると言えるであらう。戦争を知らない人に戦争を始めて欲しくないからである。平和とそれを求めること以外には、知らないという人で世界中を満たさなければならない。真実の愛で以て。母もきつと愛情深い人なのだろうと思う。

真由子先生へ

しかし日本人というのは本当に真面目である。坂口安吾の墮落論の話を書いたが国や企業の圧力の前に自分を主張しただけで個人主義、慎みがないと自ら感じ反省するひとがまだたくさんいるからである。確かに我欲ばかり通す利己的な人間では困るが、ガバナンス（統治）が行きすぎ、全体主義に走るような馬鹿なまねは止めねばなるまい。

吉本隆明が言っている「幼き頃より天皇の臣民と言われてきた、親、兄弟の為には死ねないが天皇のためなら死ねた」と、自分の命と引換になる値あるものとはなんであろうか。そして敗戦。天皇は神格を自ら否定した。人間宣言である。吉本はペテンにあつた気がしたという。彼は左翼思想に走り会社の労働運動に傾倒していく。忠勤に励むもの。買収されていくもの。ストライキは頓挫し失敗に終わる。そこで彼は大衆との意識の違いを認識し会社を去るのである。またしても精神の挫折を味わうのだ。

彼は現人神として育てられた昭和天皇の心中にも想いを馳せていたがここでは割愛する。私が始めて発症したときテレビの画面に明治天皇の写真が何度も映るのである。何故だろうと思っていたが25年後、当時生まれてもいなかった姪が、明治天皇が設立した病院の看護師になつていたのである。だから私はあたら皇室をおろそかにはできないと思うのである。たんなる幻覚と姪の就職先に接点があつただけだと言われれば終いだ、君が代を

唄うとき涙が出そうになるのはなぜだろう。皇太子殿下の心情、祈りを思うとき、泣きそうになるのはなぜだろう。金儲けのために世界のどこかで戦争をしかける大国アメリカ。怨念をはらし中華思想の復活を目指す中国。自国だけではなく世界の平和と安寧を祈られる天皇ご一家、かつて日清、日露、昭和戦争に黙って出陣された人々は正義を信じておられた。だから命までかけられたのである。だがもう二度と再現はご免だ。戦争は嫌だ。自由と博愛、平等、いろいろな理想があるだろう。心配はいらない。最後は、神の正義が勝つことを信じよう。反戦の為、踏み台、明日に架ける橋になつてゆく覚悟を、みんな持てばいいのである。為政者にお願ひする。それこそ美しい国が赤い血で汚されないために。最後は少しわかりにくいかもしれませんが、要は戦争を回避すべく特に政治に携わるものは身を挺して誠を尽くさなければならぬということです。

真由子先生へ

ユニセフのことだと思い出したが高校生の丁君。病室は違つたが彼が退院していく2日前に親しくなつた。私がソウ気味で南無妙法蓮華經と大声で唱題するのを恥ずかしくありませんか、どうしてそんなに明るいですかと不思議そうに尋ねてきた。それがきっかけで彼の境遇や悩んでいることを知つた。

彼は言つた、もし僕が大学へ進学することにより誰かが試験に落ちることを考えるといた

たまれない。アフリカでたくさんの子供たちが、飢えや病気や紛争で死んで行くのに何もしてあげられない。そのことを僕はどう捉えていくべきなのか。

私は言った、よく気づいたな、この不条理を。だが彼はきつと整合性のとれた明確な答えを知りたかつたはずだ。「すべては神仏の計らいのなかにある、例えば試験に受かることが良いことのように思えるが、落ちて予備校に通って彼女ができるかもしれない。一年後他の大学へ入って人生の恩師といえる人に出会うかもしれない。素晴らしい親友が現れるかもしれない。また先に受かった人はとてもいじわるな嫌な先輩に悩まされるかもしれない、なにが良いか悪いかわからないんだ。そしてこれも表面上の欲得でみた限りであって仏様はたえず、いつも速やかに人格が向上するよう働きかけておられるんだ。だからいつでも自らの良心に従い主体的に生きて行けば道はおのずから開けてくる。ただし金儲け、出世には縁がないかもしれない、が確実に幸せにはなれる。負けても、損してもおおらかに自分に対しても他人に対してもそう言おう」彼は理解した。

アフリカの子供たち。確かにかわいそうだ。しかし人間は死ぬ。世界中どこでも例外はない早くても遅くても死はやってくるのだ。その点では平等なのだ。公平ではないかもしれないが習俗の違いもあり非人道的と裁くこともできないこともある。我々の価値観を押しつけるわけにはいかないのだ。ただ母親たちに悲しみがあるとすれば、まず彼らの世界に平和を与え母親たちを健康に導かなければならない。募金に応じるのもよからう、何人か

の子供は少しだけ生き延びるだろう。だが根本的な問題は解決されない。それは政治の役割だろうか。

T君に言った。すべては君のためにある、決して自己中心的なことではない。みんながそう思えばいいんだ。みんながなにかを自分に教えてくれている。つまり子供たちの死からは隣人を愛することがいかに大事かということを学ぶことができる。そしてどうしてもたたまれなくなったときは心の中で南無妙法蓮華經と唱えよう。きつとすべてうまくゆくと信じられるから。彼は「すごい、本に書いたら」といったが、大部分はひろ さちや氏の、受け売りだからと私は苦笑した。ちよつとオリジナリティーに欠けたかなと思ったが、応用にしてはT君が喜んでくれてよかったなと思うのである。

真由子先生へ

高校生のT君に対して少し精神訓話になってしまった感があった。つまり道徳的になってしまったと。対機説法としては仕方がなかったか。法華經の十六番には速成就仏身、つまり仏になるためいろいろな現象がおこってくるのだと記されている。私は人格の向上のためと表現した。人格完成とたとえる教団もある。精神分析学者のエーリヒフロムは人格の成熟という言葉をもちいたがそれについてはいずれまた話すことにして。仏の子、神の

子これはすべての人がそうなのだ。だから不登校になってしまった学生、怠け者の二―ト、恋ばかり考えているうわつきものこんな入達がみんなそのまま救われなければならない。彼らは本当に痛烈に世間を批判しているのだ。人の命よりも金のほうが大切、自分さえよければいい、そのくせなにかとのぞき込み否定してくるやつら。人格向上と規定すると単なる聖人君子をめざすような感があるが仏とはそういうものではない。みんなが敵にまわるとき、傍らでそつと見守ってくれているのが仏様である。人格向上というのはある意味では不適切だったかもしれない。

金子 みすづ 作

さびしいとき

わたしがさびしいときに
よその人は知らないの

わたしのさびしいときに
お友だちはわらうの

わたしのさびしいときに

お母さんはやさしいの

わたしのさびしいときに
仏様はさびしいの

つまり他人にとってはよそごとであり、友は友でしかない、母親もその心の奥まではわからない、仏様だけがすべてご存じで同悲同苦してくれるのである。そこには人格云々というような理屈めいたものはなくただ、ありがたく南無妙法蓮華經と唱題するだけなのです。南無妙法蓮華經

真由子先生へ

チャールズチャップリンの話です。芸人夫婦の間に生まれ、両親の離婚により幼き日より貧困にあえぎます。アメリカに渡り映画の世界で成功します。ヒトラーを揶揄した独裁者は大ヒットとなります。ところが次回作、殺人狂時代は不買運動まで起こり閑古鳥がなきます。その中の「一人を殺せば犯罪人だが100万人を殺せば英雄だ」という台詞が問題となったのです。当時、世界は冷戦状態でお上に目をつけられたのです。

世の中はTV、芝居、映画、ゲームでは日常的に殺人が行われている。そして実際に人殺しが起ると「信じられない」と糾弾し、国家権力による殺人である死刑まで科すことになる。本物の宗教は絶対生命尊重を訴える。愚かしくも罪を犯した人には、懺悔による回心を促し命の救いまでもたらす。人の命って、なんだろう。レマルクの（西部戦線異状なし）という小説の中で憎き敵と殺してみたら死体の胸ポケットから家族の写真が出てきた。同様な人間だった。やはり想像力が大切だろう。当たり前のことだが人は口ロボットではない。バーチャルとリアルが混同されないように祈るばかりだ。

ライムライトの中でのチャップリンの台詞「生きていくのに必要なものは勇氣と想像力とサムマナーだ」は有名だが。若い踊り子はあらゆる面で助けてくれた彼に恩義を感じながらも若いハンサムな作曲家と親密になってゆく。そして彼女は「なにか大切なものをなくしたみたい」とチャップリンに思慕の念を表す。彼は言う「変化しただけさ」なんと優しい言葉だろう、彼女の行く末の幸せを本当に願っているのだ。彼女は気づく彼を愛していると、だが彼もまたそれを理解しているから辛いのだ。彼女は言う「私、おとなになりたくない」彼は答える「誰でもみんなそう思っている」ピーターパンシンドロームとこれを呼ぶかなあ。そして彼は幸福な死を迎える。舞台の袖で彼女の踊る姿を感じながら。チャップリンは生前、苦しい人生だったと語っているが、彼が演じたたくさんの放浪紳士たちへの悲しみ、苦しみの共感がどうしても捨て切れなかったのではないだろうか。今の

暮らしに感謝の気持ちを持ちながら私は想像するのであるが。

真由子先生へ

今日は私が学生時代に作った詩でもと思ひまして

白紙のページ

愛する人に言葉なくされ
過ぎ行く日々は白紙のページ
青い、ひたいに、募る想いは
忘れられないあの笑顔

バーガーショップは色褪せてゆく
過ぎ行く日々は白紙のページ
うつむきかけた赤い頬に

なぜか耳の裏ほてってしまう
いつかまた会えるだろうか
バイトが終わりふと想う

18の春の終わり頃でした。

真由子先生へ

B L U E L E T T E R

甲斐バンド

とある小さな海岸沿いの町
俺はお前と出会った
ほこりっぽいトラックのクラクション
あせたドライブインの 片隅にお前はいた
恋におち ところこになった
だけど心はなれ いつか別れてきた
ひとときは戯れか返すすべも知らない
さざ波のような傷だけが残った

B l u e L e t t e R 涙のついで綴ったような
B l u e L e t t e R きれぎれの文字が俺を痛めつける

車をとばし港に行つたもんさ
栈橋にもたれ二人海を眺めてた
その年お前をはらませてしまつまで
おだやかに晴れた夏は続いた

車の残骸 たちならぶ浜辺
元氣だと書いてよこした便り燃やして
かつて輝いてた 二人だけの浜辺
今はあともなく 深い闇の中
シャツを脱ぎすて 海に入つてゆく
暗くうねる波の 中に俺は入つてゆく
もろかった月日と おとせるはずのない
罪とお前の為に今夜涙を流す

B l u e L e t t e r 涙のついで綴ったような
B l u e L e t t e r きれぎれの文字が俺を痛めつける

美しい調べが心を癒してくれた、ずっと孤独の闇をさまよっていた。
この曲ですくわれたひとは多いだろう

真由子先生へ

妹と姪が尾崎豊のCDを誕生日プレゼントに贈ってくれました。
ベストアルバムの中にいい詞がありました。紹介させて下さい。

ふたつの心

見つめ合うだけの暮らし心の鼓動が
寂しさ塗りつぶし今日を温め合うよ
ふたつの心ふたつの生き方を重ね合うから
君は時々涙を僕はため息をこぼすけど
二人求め合い暮らしてゆけるさ

夜明けまでもずっと抱き締め合いながら

そつと扉閉じて僕が旅に行く時

君はいつまでも笑顔を浮かべていた

夜の明かりの向こうで君は僕の帰りを待つ

見知らぬ町の片隅で僕は君の面影抱き締めている

離れて過ごしても君の心が聞こえるよ

君に届くだろう僕のこの思いが

分け合うものなど初めからないけど

心さえあればいつでも二人はあるがまま

そつと強く受け止め合いながら夜が明けるまですつと

抱き締め合っているよ

二人あるがまま……………

元気でいて下さい

真由子先生へ

ころすれちがう悲しい生き様に

ため息もらしていた

だけこの目に映るこの街でほくはずっと生きていかなければ

人を傷つけることに目を伏せるけど

優しさをくちにすれば人はみな傷ついていく

僕が僕であるために勝ち続けなきゃいけない

正しいものがなんなのかそれがこの胸に解るまで

僕は街にのまれて少しころす許しながら、この冷たい街のかぜに

歌い続けている

別れ際にもう一度君に確かめておきたいよ

こんなに愛していた

誰がいけないという訳でもないけど人は皆わがままだ

なれあいのように暮らしても君を傷つけてばかりさ

こんなに君を好きだけど明日さえ教えてやれないから

君が君であるために勝ち続けなきゃならない

正しいものがなんなのかそれがこの胸に解るまで
君は街にのまれて少しこころ許しながら、この冷たい街のかぜに
歌い続けてる

私の好きな尾崎豊の曲です。なにかを乗り越えようとするとき、ああ傷つけられる方が多いなあ、私は。でもいままでたくさんの人傷つけてきたもんな。無知もマヒもいけないんだろうな。でもしたたかに、たくましく生きなきゃね。愛をとおすことと、生きるために計算だかくなること、つらいなあ、「金がすべてじゃないなんてきれいにはいえない」「今じゃあいつも負け犬よ、銭のせいさ」そんなフレーズが聞こえてきた。

真由子先生へ
尾崎豊

失くした1／2

ひとりぼっちの夜の闇が やがて静かに明けてゆくよ
色褪せそうな自由な夢に 追いたてられてしまう時も
幻の中 答はいつも 朝の風に空しく響き

つらい思いに 愛することの色さえ 忘れてしまいそうだけど

あきらめてしまわないでね

ひとりぼっち感じて

さあ心を開く鍵で

自由描いておくれ

安らかな君の愛に

真実はやがて訪れる

信じてごらん笑顔から

すべてはじまるから

信じてごらん笑顔からすべてが

あきらめてしまわないでね

ひとりぼっち感じて

さあ心を開く鍵で

自由描いておくれ

安らかな君の愛に

真実はやがて訪れる

はじまるから

ついてない時には 何もかも目をそらすけれど

僕は壊れそうな愛の姿を 君の心に確かめたいだけ

いつまでも見つからぬもの 探すことも必要だけれど

ひとつひとつを暖めながら 解ってゆくことが大切さ

あきらめてしまわないでね

ひとりぼっち感じて

誰もがみな 愛求めて

世界はほら回るよ

安らかな君の愛に

真実はやがて訪れる

信じてごらん笑顔からすべてがはじまるから

あきらめてしまわないで

真実はやがて訪れる

信じてごらん 笑顔から

すべてがはじまるから

〔深夜3時眠れない。

これからのことを期待して

すこし興奮して眼が冴えている

この曲がながれたした。尾崎に

しては優しく、明るい、感じ

その後、安眠した。

ありがとう、存在するなにかに

対し・私をいざなう、なにかに

対して……」

真由子先生へ
これも自分の詩です

時の終わりに

夢の中のあなたへ 貝殻の子守歌
聞かせるほどの 器用さはないけど
時の中の一粒の 小石のささやきを
とどけることだけはできそうな気がする
この世に不思議なことがおこる
生まれたことがそうさ
君と手をつなぎ愛しあえることさ
罪と呼ぶにはあまりに楽しすぎることさ
わるいことならば それでもいいのさ
はじめはだれも 見知らぬ旅人さ
気にもとめずに飛び去ってゆく
この世で髪の毛がふれることも

宇宙の中でながめれば本当に、本当に不思議なことさ

この世に不思議なことがおこる
生まれたことがそうさ

君と手をつなぎ愛しあえることさ

罪とか悪いとか出てきますが犯罪を起こしたわけではなく、ただ授業をさぼってアルバイトに精をだしていたころの話です。

真由子先生へ
なぜか厭世的な若者でした。自作です。

苦しみ

白い、白い花のような君に
解るはずない俺の気持ち
つつばった頭を心に照らし合わせ
うつむいて笑う
人はいつもカッコを気にし
自分自身を忘れてしまう
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう打忘れない。

辛い、辛い人の世界は
うまくいくこと多からず
ぼっちゃん頭で、道を歩いていたら

馬鹿にされてけられ

人はいつも自分よりも下のものを創ろうとして

ああ悲しい、ああ何故

つまずいた夢をもう忘れない

すんだことは言いたかないけど

グチの一つも口をつく

冗談のつもりも本氣に取られてしまい

言い訳もそうさ

人はいつも自分の杓子で

他人を測って誤解していく

ああ悲しい、ああ何故つまずいた夢をもう忘れない

女の子たちの心解らず

いったい誰が好みなの

冷たい態度でいるならいろいろ

そしたらそのままで

人はいつも気があるそぶり
見せた後で背中向ける
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

白い、白い花のような君に判るはずない俺の気持ち
夢だけおって足場が何にもない
上げ底な日々を
人はいつもカッコを気にし
自分自身を忘れてしまう
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

不合理な社会、怠惰な男たち、虚栄に満ちた女性たち、チキンレースの毎日
本当の勇氣とは夢とは悩んでいた19のとき作りました。

真由子先生へ
自作です

ハピネス

気象不順な日々を暮らし続けた
ある日突然にあなたの吐息のノック
タイマーの音よりもあなたのささやきは
百メガトンの大きさに僕をめざめさせる
あなたの肩があればそれが唯一のハピネス
ハピネス ハピネス ハピネス

あそびなれた奴と思われ続けて
すれた女と思われるあなたが
友達をこえるときあなたの微笑みは
悪魔のそれよりもあやしげなのさ
あなたの熱があればそれが唯一のハピネス

ハピネス ハピネス ハピネス

誰かがいつていたあなたと暮らすなど
不幸があなたにとりついていると

ふざけるな、僕はどなり気にもしてないよ
本当さうそじゃない一緒にゆこうよ

あなたと死ねるならばそれが唯一のハピネス

ハピネス ハピネス ハピネス

あなたと死ねるならばそれが唯一のハピネス

ハピネス ハピネス ハピネス

少し過激な感じですけど、20位かな、
度胸もないくせに憧れだけは人一倍もって
ました

真由子先生へ
自作です

あの街に帰りたい

希望にたらされて生きていた
昔の二人のビートルズナンバー
つまずきかげんへ々な英語
季節に関係ない
僕の声が悲しい春を連れてきたのさ
ボブデユランのうたは大嫌い
いったあの娘はもういないけど
いつかあの街に帰りたいよ
あの街に帰りたいよ
f m f m f m
あの街に帰りたいよ

かならず帰ってくるといって
約束したのはワンナイトだった

駅に灯る赤いネオン

あの娘の為だけ

居たんじゃないもとめる夢が見つからなかった

だけど今よりはましだったと

話すあいつが涙にかわる

いつかあの街に帰りたいよ

あの街に帰りたいよ

f m f m f m

あの街に帰りたいよ

この作詞は14の終わり。みんな後一年で
お別れだたとセンチなきもちになったとき
作りました。当時ボブデュランのうたなど
実は知らなくても大人になってからも
あまり好きになれなかったなあ

義人

真由子先生に捧ぐ 2

H26年度作品
義人

真由子先生へ

孫子の話をテレビでやっていた。何百人かの後宮の女を指揮してみろと王に試された孫武。命令するが女達は好き勝手に笑ったり、おしゃべりしたり。孫武は王の寵愛している后、二人の首をはねる。一度、将に指揮権を任せたら王であつても無理は通らぬということだそう。かくして女達は孫武の思い通りに動くことになる。

こういうエピソードもある。脚に傷を負った兵士の膿を吸い出してやる。母親は泣いたそう。感激して、いや次の戦では息子は命がけで働き、きつと絶命するだろうと思つたから。そこには計算が多分にある。孫子は兵法家である。将の資質としては民を愛し過ぎてもいけないという。重荷になるし戦の決断ができない。

イエスは弟子達が、だれが一番かと騒いだとき、愛をもつて、一番、後方から奉仕するものが一番先にゆくものだと言われた。孫子と正反灯の生き方を勧められているのである。

私は思う。会社のため、社長のため、人のため、世間のため、世界のため、愛するもののため、そして自分のためすら偽善なのではないだろうか。つまりなにかのため、お為ごかしではなく、ただ愛する、自分に仇なす敵であつても理解し、愛語でもつて接する。そんなことが重い、鈍くなった人の心を動かすのではないだろうか。

生きている意味は神しか知らない、人間の多数決で決めるものではない。

例えるとホエム産業やブラック企業と愛をもつて敢然と戦えと言いたい。けれど、そこに

は始めに、自分が他人に勝ちたい、優秀に評価されたい、バリバリ人に指示、命令したいなどの私からみれば不純と思われるような個入の欲求があるみたいだ。

「俺は俺らしくまあ気楽にやっていくわ」と思ったとき神仏は微笑みかける。重荷を背負ってはいけない。みんな逃げる、火宅から。なにもいらない、平和が一番と患ったとき長い間捜してきたものが見つかる。

それこそ真実のサトリであり、魂の平安である。多数決で決められた価値観を押しつけられてはいけない。他人に勝つより自分に克って愛と真実の塔を心に打ち立てよう。

人と人とが仲良く結びつくことがサタンは氣にくわないみたいだ。つまり我々の戦い方は互いが愛し合うことにつぎると思つのである。

真由子先生へ

互いに愛し合うといっても、人間というのは根源的には孤独なのです。ひとりぼっちで淋しい、そこで何かを求める、何か、淋しさを癒すもの。まあ今は深まる秋というわけでもないですが、春、たまたま花見に出かける。仕事や金儲けの話もなんだからと思いきや、最近、でかけた歌手のコンサートの中で金にまつわる話題を聞かされる。そしてオヒラキ、2次会行くか、断る。ひとり演説をぶつやつがっている。ひとがどこまでつき合ってやっ

ていると思うのだ。まあその日はよしとして、また、ふと一献、酒を酌み交わしたくなる。こうなると相手方に訪れる。今度は呼ばねばならぬ。ベタベタになり鼻につくようになつてくる。ヤマアラシのジレンマ、近づきたいが互いの自我のトゲが邪魔して一定の距離を保たねばならない。人は孤独を生きる覚悟をもたねばならないという学者もいるが、どうかな、と最近思つてきた。鼻につくならついたでいいではないか、嫌悪感をもたずに期間をおいてまたチラと想つてあげる。逢つてみる。

エイリツヒフロムは言っている。「完全な答えは人間同士の一体化、他者との融合、すなわち愛である。この世に愛がなければ人間は一日たりとも生き延びることはできない。人と人をつないでいるものが愛である。だが愛の大事さを思わなければだれもそれを学ぼうとはしないであらう」

人は孤独では生きていけない。自由を得た結果、孤独になったのだとしたら本当に淋しい、祭祀、薬物依存、集団への依存、なにかの創作活動みな没我的で刹那的である。それがナチズムのような権威主義的なサディズム、マゾヒズムに変化していくことが危惧される。尾崎のうたの世界だが（15の夜）の少年たちにも（卒業）やその他の詞のなかの彼らにも仲間達がいる。学校、家で報われない彼らにもかすかな光、愛はあつたのだ。きつと彼らにはつまらない見栄などはなかったのだろう。

金子みすず、詩を、紹介したことがあつた。「さみしいとき、お友だちは笑うの」。人々の

真の友人、釈尊（仏陀）はご自分の命まで狙おうとしたダイバッタを善知識、つまり仏へと導いてくれた恩人、友人だと感謝され、彼は後の世に成仏するだろうと授記された。悪人成仏である。

自ら他人にどう向き合うか、人は不完全である。ある程度は寛容でなければなるまい。必要だから愛するのではなく、愛するから必要であるということが大切である。フロムは言う「愛する技術」が大切であると。愛されるテクニクではなくDVなどにいたらないように人格の成熟、つまり人間として成長する努力が必要であると言っているのである。何度もうがそれには愛が絶対不可欠なもののだと認識することからはじまるのである。そして仏様の他にも親友がいたらいいよね。本物の愛はその持続性で決まるそうです。愛と自由はきつと両立するのであらう。

真由子先生へ

ソチ、うちの飼った猫である。私の大嫌いなオリンピックの最中に野良猫として、これまた私の安眠を破った件があつて複雑な思いをこめてソチと命名した。少し蛇足を加えるとオリンピックは嫌いだが真央ちゃんは好きである。なんとも健気で人生を応援したくなる。だが滑っている姿は見る気がない。なぜかしんどくなるもので無関心を保ち続けている。

話を猫の方に戻すが、鳴き声にかどうかわからないが浅い眠りの夜が続いた。あるまだ暗い午前5時ジャスト眠が開いた。一階に降りていくと、エサを置いた場所から鳴き声が聞こえる。私はアルミサッシの戸を右手に流すようにあけカーテンを開いた。猫は後方へ逃げていた。しかし不思議だ。偶然は必然、戸を少しあけて部屋を暗くし、私も猫から見て姿をくらませた。鳴く声が身近に感じられた。廊下にきている。今度は部屋から出てそつとみていると猫はゆっくり、決められていたかのように警戒心もなく入ってきたのである。私は近づいたが、逃げる気配はまったくなかった。妹の嫁ぎ先から貰ってきたキヤットフードを与え、水を器に入れた。メスであった。私と彼女はストーブの前でホテルの炊事場、パートに出ている母を待った。優しい時間が流れた。安心したようにししゃもの様になって長く寝そべる彼女、ソチ。母が帰宅した。びっくりしたようだったがこうなるのもどこかで予測していただろう。いつものことで母はバタバタという準備をはじめた。病院にも連れていった。4カ月のまだ子猫気分のぬけない女の子だった。今までどんな暮らしを送ってきたかも、なにもかも謎である。下の躰はちゃんとなされている。そして人なつっこい、人間に格別に酷い目に遭ったことがないのかもしれない。でももしかしたらまた捨てられるのが怖くて愛想良くしているのかもしれない。だがその安心した眼を閉じた表情には自分ながら「よかったなあ」といってやりたくなるのである。

夜行性のソチは、昼夜逆転し母の熟睡を邪魔するので、発情期に違いないと決めつけられ

不妊の手術を受けることになった。そしていまさつき母とふたりで彼女を引き取り、帰ってきたところだ。シヨックだった。不妊手術とは子宮卵巣摘出手術であつた。確認などできなかつた。ソチのお腹がいびつにへこんでいた。「大丈夫かソチ」みんなでよつてたかり、なにか彼女の生き物としての誇りを奪つたような気がした。これは死ぬより辛いのではないのか。母親になることがでなくなつた少女からやつと思春期をむかえた娘。誰が、なんの権利があつてこんな運命に。私もこんな感傷的になるとは想わなかつたが、ただベツトが可愛いというよりは、この生命への理不尽さをソチに代わつて怒りとして私を含めた誰かに訴えたかつたのである。

「ソチごめんよ」

真由子先生へ

釈尊ご在世にシリマーとブラクリティという二人の女性がいた。その話をしよう。シリマーは、それは、それは美しい遊女でその国の一日分に値する税収の半分を一回のもてなしで稼ぐのである。ある日仏陀の教えを聞く機会を得て熱心な信者になります。仏弟子でさえシリマーは美しい、供養の食事も最高だと讃える。しかしシリマーは気づいていました。美しさは自らの努力でもたらされたものでないこと、そしてみなそのまやかに騙さ

れていることを。そして病を得ます。彼女は釈尊に「年齢をとり、美しさのむなしさ、諸行無常の誠を伝えるということさえも出来なくなりました」と嘆きます。釈尊はひとつの約束を交わされました。やがてシリマーは若くして亡くなります。みんな口々にシリマーは死んでも美しい、シリマーは美しいとほめそやしました。釈尊は火葬にするのを認められませんでした。日が経つごとに死体は腐乱し悪臭を放ち出しました。釈尊は言われました。「これがみんなの愛したシリマーだよ」と。

釈尊のお弟子に多聞第一とよばれる端正な顔立ちをしたアーナンダという比丘がいる。井戸から水汲みをしていた下層階級の娘ブラクリティー。アーナンダは少し水をくださいと頼みます。彼女は「あたいなんか言ってあんたが汚れちゃうよ」とためらいました。当時からインドではカースト制度のもと厳しい制約があつたのです。アーナンダは「私の師仏陀はすべての生きとし生けるものは平等であり大いなる命に生かされていると説かれます」と返答します。彼女はポーとなりました。魔術師の母親にアーナンダと一緒にいたいと魔法を用いることを懇願しますが「死人と執着をもたない人には効かない」とためらわれます。誘惑に負けそうになるアーナンダであつた。仏陀はブラクリティーにさとしま

す「見かけの美しさにとらわれてはいけない。人は一枚剥げば糞袋だ」彼女は気づいたアーナンダの新鮮な言葉に感動したのだと。その後彼女は出家したという。

今昔物語のなかにも死んだ妻恋しさに夜中に墓場に行つて棺桶をあけてギョツとするとい

うのがある。

一方フランスの宗教作家フローベルが書いた聖ジュリアン伝という物語のなかでハンセン病の男がいる。上着をくれと言う。やると下着もと、今度は抱きしめてくれと、抱擁すると接吻をせがむ、そして口づけする。するとふたりは宙に飛び上がり男はイエスキリストになっている。遠藤周作先生はこのことについてこう語っている。「抱きしめていなさい、人生をどんなに醜くかわろうともすると愛がみえてくる。離婚なんかしちゃいけない」。入院中、年配の方に寄り添ういろいろな奥さんを見させてもらった。みんなから愛が伝わってきた。風雪と歳月は愛を育むのだなあと思つた次第です。飾つた美しさではなく内面からでる美しさはきつと天にも通じ、また誰かが応援してくれ、生かされている喜びにも浸れるのであろう。

真由子先生へ

井上洋治というカトリックの神父が逝去された。なんとか巨人さん（ごめんなさい姓を忘れました。いきあたりばったり、なので）が亡くなった読売の記事に眼が行き。片隅に載つていた、井上氏、その訃報を知った。遠藤周作さんの親友にして安岡章太郎さんに洗礼をほどこした人である。質素に四畳半のアパートに感謝して暮らしていた。となにか

で読んだことがある。不思議なのだが私は井上氏が亡くなる近日、頭痛がしてならなかった。彼は脳溢血で逝かれたそうでなにか因縁を感じたのである。

安岡章太郎さんの代表作、国語の教科書にも載っていた。「サーカスの馬」実は私は当時よく実感として理解出来なかったのだが、後にケイゾーという私のまたいとこにして幼なじみの男にその持つ意味を知らされる。

ある男子校で持ち物検査が指導の先生によって行われる。タバコの葉の粉や喧嘩で使う剣道の竹刀のつばを削ったものなどが見つかるやばいのである。そして主人公のポケットから出てきたのは鼻クソの付いたしわくちやのハンカチ。なぜか屈辱を感じるのだった。

その夜サーカスへ出かける、美しい姿のなかに一頭だけ首がいびつにまがった貧弱な馬を発見する。そして競争がはじまる。みんなが疾走して行く中、後方から健気にはしるその姿に内気な彼がいっしか声を張り上げ応援する。こんな話だったと思う。

私にはいびつなサーカスの馬と主人公がどうも繋がらなかったのだがケイゾーは痛いほど解ったのである。自分もその馬であり彼である。

そしてケイゾーは背伸びをしてタイヤシヨップを21歳で開業した。結果アルコール依存症になり多額の借金をつくりまた離婚し廃業に至りのち事故死した。優しい男だったが早くから栄光を求めすぎた。不思議に保険金によって借金は相殺された。夏には裸でコップ酒を飲みうろついていた。だが探究心があり度胸もあつて親切だった。世間知らずの私に

いろいろ教えてくれた。

私の中にイエスが存在するのなら、彼はオスカーワイルドのサロメのなかで酪駝の毛皮をまとい、腰に革帯をつけ、信仰心の薄い人たちに対して悔悛を叫び続けるヨカナンとイエスにバプテスマ（洗礼）を授けた、エリザベツの子ヨハネであつた気がするのである。

もし私が一言、言つてやれるとしたら、いびつな馬ならそれでよかつたじゃないか。頑張つて先頭を走らなくても、そのうちに幸せになれたかもしれない。奴も解つていたのかもしれないなあ、また夢で逢おうやなあケイゾーよ。

真由子先生へ

フロムはまるで私のことを知っているみたいだ。愛とは与えること、興味、理解、知識、ユーモア、あらゆる表現を働きかけること。そして深まるのが本当の愛、成熟し独立した大人の結合であると言っている。

自由を求め孤独になり愛に至る、やはり人は孤独では生きていけないか。愛は能動的であり、なにより与えることで貰ふことではない。

ネットなどで人間関係は広がったがその分、親密度は希薄になった。

与えるということは共有することで貰うことから始まらない。

資本主義の経済市場主義は愛の商品化、人間のロボット化を生み出した。自分では自由で独立した人間であると思っているが社会にはめこまれ、他人の影響を受け標準化され行動も予測され命令には従うといった都合のいい人間となり、楽しければよいというような価値観を持つに至った。独身が増える。おひとりさまの方が消費も増える。

人格の成熟とは嫌なことをはらってあげられる配慮、尊重、我慢できる責任、理性的に自分を理解が大切であるという。相手にも自分にも心くばりのできるバランス感覚が重要であると思う。

精神的にケチになつてはいけない。快、不快で行動する幼児的な人は多い。ナルシズムから利己主義に発展しストーリーカーになるものもいる。

自我を支えてもらう人がほしい、自己満足とはこういう人達の結論である。

フロムはまた「愛に関していえば重要なのは自分自身の愛に対する信念である。つまり自分の愛は信頼に値するものであり他人の中心に愛を生むことができる」と信じていることである」これは南無妙法蓮華経である。

愛はひとりではできない。そして規律・集中、忍耐が必要となる。愛することは誰も教えてくれない、自習である。人々はすぐ釣り合い、損得を考える。愛は与えることである、そして学ぶこと、それを阻むのは傷つけられたくない気持ち。克服には信念をもち勇気を

かざして希望に委ねることである。

私は不思議だが結婚にこだわる、女の子みたいに。なぜだろうな。やっぱり宇宙一美しい契約と信じているからだろう。行政センターに届けなくても気にしないのだが。愛するということとはひとりでは不可能であり、ある意味でサトリをひらくより難しいとNHKの番組で言っていたがそれは違う。一人ではサトリしないのだ。つまり真実の愛にたどり着く、これがサトリであり、そして今の私にはなんの矛盾もないのである。おもしろいやりが生きています。

真由子先生へ

釈尊は崇め奉るものではない。ただ周りの恋慕渴仰する気持ちと同時に尊崇の念を生み出していったのである。だから説法のとくも決して高い位置から偉そうに話しかけるといことは絶対にされなかった。相手に合わせ解りやすく時には比喩などをもちいながら受動的にその人に応じ良薬を与えるがごとく対機説法を試みられたのである。

釈尊はサトリをひらき仏陀（目覚めたもの）となった。中道を歩きはじめた彼に対し「墮落した」と去っていった、いきさつのある、共に苦行をしていた五人に会いに行く。「一タマよ、どうした」と話しかけれ釈尊は「私を仏陀と呼ばねばならない」と穏やかに毅然

然と宣言された。その静かで自信に満ちているお姿に5人はおごそかなものを感じ、話を聞くことにする。これが（初転法輪）である。

釈尊はなにも偉ぶりとくたて言ったのではなく修行者たちへの深い慈しみの念があつたのである。「真理をつかんだ。みんな聞いてくれ。これで幸せになれるぞ」。だから仏陀となつたという意味と事実を伝えたかっただけなのである。五人にもそれを理解する力があつたのであろう。

釈尊は弟子たちをみな善知識、友人とよばれた。仏、法、僧は平等だからこそ尊くお互い手を合わせられるのである。日蓮、イエス、神さえも同様の気持ちかもしれない。仏陀は、数は少ないとは思うが偉そうな精神科医とはちがうのである。

えせ坊主たちが組織のうちであぐらをかきその名誉欲、虚栄心によつておかしくなっている。そして崇拜を形式的に強制しそののち信者を奴隷のようにマインドコントロールするのである。

世間の悪辣な奴とは人の長所を過小評価して、人より劣っていると短所を直させようと画策するものだ。そして自己否定させる。自分は自分であつていいのだ。

聖書のイエスは言う、自己推薦する。私を信じるもの、もうへび（邪教）やサソリ（組織）は手がだせない。そしてそれに感謝し、天に名がしるされていることを喜びなさい。

私とイエス、気が狂っているのなら神のため、確かならあなたがたのため、つまり私の言

うことに耳を傾けてくれということである。世間はイエスを殺した。私はどうするべきか、まあなりゆきだな。

真由子先生へ

35年前に購入した平凡社の百科事典がある。ネットで検索すればいいのだが、契約していないパソコンは姪が持っていくし、今回利用することになった。調べるのはスイスの代表的精神病理学者の一人ユングである。

開いてみると私の部屋にかかっているユングフラウの北面のパネルと同じアングルのモノクロ図が眼に飛び込んできた。

門外漢の私が偉そうに先生に解説するのはなはだ恐縮なのですが惚れた弱みでいい恰好したいというのも多分にあるのでしょう。どうか寛大なご処置をお願いします。

ユングはリビドーの向かい方で人の性格は心理学的類型に依存するものであるとして、「さらに無意識は明瞭な意識されないあらゆる心理的な事実の総和であるとし、さらに個体を越えた、宗族あるいは種族的に原始にさかのぼる経験の集積を包蔵するものとしての集団的無意識を仮定している」とある。

つまりこのことはDNAのことなのか。仏教では深層真理の最も奥まったところを阿頼耶

識と呼ぶ。

生物学的には私は解らないが、原始にさかのぼるということは遠い深い因縁を感じることに同様の意味をもつということだろう。私には聖書の神、イエスと切っても切れぬ契りがあり、かつまた日本人として本物の南無妙法蓮華経つまり日蓮、釈尊の教えを伝えていかねばならない使命があるとあらためて認識できる。やはり世は煩悩、渴愛を煽るかぎり地獄である。勝負に涙するよりあわれみに泣く、そういう人でないといけない。

オボカタハルコさんも科学者なら荻野吟子さんの名前ぐらい知っているだろう。知らないとするSTAP細胞うんぬんというより大問題だぞ。彼女こそ称賛に値する偉い科学者である。先生ももちろん共感されるでしょう。

科学は日進月歩ですから、お勉強の方も研修などでお忙しいでしょうねえ。

今回えらくたくさん書簡になってすいませんでした。でもまたのんびりと宜しくお願い申し上げます。

真由子先生へ

またしても父について話をします。若い頃、それは、それはいい男でした。勝新太郎と向井理を足して2で割った感じ、そういう感じです。しかしそのご時世は世相も殺伐とし

ていてヤクザまがいのチンピラがうろつていました。

母と結婚します。父はナイフを携帯していました。それを見つけた母は、それは弱い人ですることだと諭しました。父はそれから奮勇を慎みました。やがて私が生まれます。父は本当に喜んだみたいです。毎日私の顔を見る為バスに乗り病院に通いました。薩摩武士の血を引く祖母は「男がそんなことをしてはいけない」と父を叱責したそうです。私は12月14日に生まれ赤穂義士にあやかるようにと義人と名づけられました。

妹がお腹にいる中、母は父の脳動脈瘤の手術のため付添います。手術の間、母は病院の屋上にいました。「だれもこなかった」と寂しく語っていました。手術は成功とも失敗とも言えませんでした。神経が集中している場所で処置が難しかったのです。血管をクリップで止めてある。

父は母に手術の前日「このまま帰るか」と洩らしたそうです。母が「そうするか」とドイツ帰りの偉いお医者様がいろいろと準備されているのに頷いたそうです。父は気を取り直し「苦労かける」と眼を閉じたそうです。頭部に大きな傷痕が残った父。それからチンピラ共はそれを見ただけで逃げていったそうです。

ジャブ、ストレート、アップパー、父はボクシングとプロレスが好きでした。私にパンチの打ち方の手ほどきをしました。でも小学校低学年の喧嘩はいつもとくみあいになるだけであまり役には立ちませんでした。

国の威信、生活、名誉をかけ殴り合う。実は父は多分に選手たちに同情していたのです。人が傷つけ合うのを、口笛を鳴らして拍手をおくる、許されることじゃありません。しかし観戦するひとがいなければ彼らはみもふたもない。母は「親が観たら泣くじゃ」と勇み立つ私をいさめました。父はただ苛酷な人生に挑んでいく気概だけは私に教えたかったのでしょう。父はプロ野球が嫌いでした。それは私も同感になっていきます。勝ち負け、優勝といってもチーム内では足のひっぱりあい、蹴落としあい、そんな世界は観たくもなかったからです。

彼は統合失調症になりアルコール依存へとすすんでゆきます。父は一度私の前でのんだくられて失禁しました。ナゼダ、私は父が病に負け酒に逃げているのだと思いました。母も私にそう聞かせました。だがそれは確実に違っていました。なんとかコンプレックスそんなものはどうでもいいです。父は私を本当に愛してくれていたのです。「義人、お前の父親はこんな駄目なやつだ。だからお前はどんな情けない生き方をしてもいい。だけど人を踏み台にするようなさもしい生き方だけはするな。思いやり、あわれみを忘れるな」そんな声がするのです。私は本当に立派な父親を持ちました、過分であります。

工ゴを超え優しさと義を追求した果ての死でありました。座敷に横たわる父のもとへひとり近所でうるさがたで嫌われているおじさんが来訪しました。父の顔もみないで「死んだら終わりや、死んだら終わりや」と頬を真っ赤にしてむせび泣きました。

どういう意味でしょうか。単純に死んだらみんなしまいやでということじゃないみたいです。欲得に走る人間たち。父のように生きたくても生きられない自分。父の寂しさ、悲しさ、苦しみが解ったのでしょうか。それもこれで終わりだといったかったのです。父は私に勇気、愛、人の生き方を教えてくれました。父が他人の悪口を言うのを聞いたことがありません。だいが父を美化しましたが、いままで生きてきたなかでこれ程、善良なひとに出会ったことがありません。母も理解してきたみたいです。他人の悪口も減ってきました、でも父ほど幸せなひとはいないかもしれません。今の自分が幸せだからそう言えるのです。

真由子先生へ

母に酷いことを言ったことがある。「親父を殺したくせに」。私が言いたかったことは病弱な彼が家から離れどういう暮らしが送れたらどうか。二言目には「出ていけ」という祖母に対し父に別居を促したのである。だが生来、自尊心が高く優しい父に母が思惑にもつていた都会のパチンコ屋の住み込み働きなどは誰がみても無理だったのである。

母は戦災の焼け出されの中から生きてきた自負があり、人は努力すればみな成功するという考え方に取りつかれていた。自分の家が焼失することが努力では防げなかったことを忘

れて。父は母と祖母の間に立つて、相当苦しんだ。そのことが私の冒頭の言葉となった。小さい頃は誰もが母親恋したが、大人になっていろいろわかって来ることがある。

勸善懲惡な価値観を持つ祖母と少々我儘な母とは微かなことでもめた。だが母のその底にある慈悲深さを祖母は信じていた。母に甘えていたと言えば言ったにもなるが、末っ子で駄々児だった、母を祖母は鍛えていたのであるかもしれない。

祖父も父も祖母も良き最期を迎えた。人は生きてきたように死ぬという。私は生への執着を強め、老いを受け入れるのを拒む母に安らかなる今後を望むのである。私と妹を育てるのに一生懸命だった母。家を建て、墓をたてた母。

もし母が餓鬼道に落ちたのならそれは私のせいである。私も落ちなければなるまい。釈尊は「餓鬼道にいる母を救うにはどうしたらよいですか」とたずねる目連尊者にたくさん仲間に加えてもらいなさいとおっしゃいます。つまり自分のことだけ考えていてはいけない。自分の子のように他人の子も慈しみなさいということである。

最期を迎えようとする祖母は少し荒くなった呼吸の中から母に「ありがとう」と言った。そして自室で私と妹が彼女の手を握りしめ、南無妙法蓮華經の唱題が響きわたる。そのときウンと大きなためいきをつき安らかに果てたのだ。私が見た人の最後はこの一回だけである。

母は言っていた。父が小さな病院で亡くなったとき帰宅し、祖母に対し「申しわけありま

せんでした」と手をついて謝ると祖母は何も言わなかったと。安心したのかもしれない。母親とはしょうがないものだ。自分の手のうちでなんでも終わらせようとする。子は子どもな情けない人生でも別々の人生を送って行かなければならないのに。

だが二人の息子に先立たれた祖母はきつと違うことも考えていたかもしれない。日露戦争において自分の息子をなくした乃木希典のはなしを幼い私に何度も語っていたからだ。祖母は大義に生きなければいけない男の生き方を教えるとともに祖母としての気持ち愛情の発露を現すのに苦悩していたのかもしれない。

一度戸棚にあつたお菓子をお黙って食べたことがあつた。祖母は包丁をもち私に迫ってきた私は往來まで逃げたが、静かに近づいてきた。それで、その後、よく覚えていない。異常であるきつと。

だがある日幼なじみと一緒に三輪車で川に落ちたことがあつた。私が「相手が落ちそうになつたから助けようとして自分も落ちた」と言うと言を細めて笑みを浮かべ、びしょ濡れの私を着替えさせてくれた。

こんなこともあつた家庭科の裁縫が苦手な祖母に頼んだ。みると小物袋に縫いつけられたアップリケはがたがただった。そこには偽善を嫌う祖母がいた。

それから私は正直に生きることにした。そして私は覚えている父の遺体が帰還したそのとき事実を確認したかのように泣いていた祖母の姿を。

真由子先生へ

つきつめると何故、神はこんな世をつくったのだろう。聖書をひらいてみた。羊が100匹いて一匹不明になっても牧童は捜しにゆく。罪人が改悛するのを神は待っておられる。つまり喜びを共有しようと神は思っておられるのだ。人生において幾度もの困難は訪れるが、神を信じ、愛を保ち続ける人は必ず幸せになれる。そのことを嬉しんでほしかったのだろう。

高校時代の話だが、祖母の影響もあって、物への執着を極端に嫌う自分がいた。私の友人のSは映画の情報紙スクリーンを毎月購入していた。この雑誌はキネマ旬報なんかとは違い、映画スター達のグラビアが主に掲載されたものである。Sはこれを本棚にきちんと飾るのである。我々が、興味があってもいっこうに見せてくれない。当人もおそらく開いてもいなかったのではないだろうか。

またコーヒー豆を数種類、用意して自分のブレンドコーヒーを作ったと言っていた。いちいち面倒臭いやつだ。

Sが自転車を買った。大切にしている。布でみがきあげている。やはり私は人とは違うようだ。非道かもしれない。彼の自転車のあちこちに黒マジックで印をつけた。彼は「なにをするがよ」と自転車をあちこち調べていた。私は愛着を非と思った。

Sはその後自分の立てた計画通りに一級建築士となり結婚した。

行き当たりばったりの私とは正反対の男であった。年賀状が届いた。パソコンを駆使して家族とのキャンプ風景をプリントしてあった。大変な勘違いであろう。相手を想わずしてどうする。自分の家庭の自慢など誰が観たい。人々の善意に依存してはいけない。たぶん先の件では私を恨んでいると思うが、今考えるとそれも天からの一喝ではなかったかと考えられるのである。年賀状は病気を招いた不幸な私へのザマアミロという腹いせにもとれ。た。今から思えば、確かに自転車事件は器物破損の罪に問われるのである。

私にはもう一つ苦い思い出がある。幼い妹と家路が一緒になった。彼女が嬉しそうにしていた。友人に小さな飾りのついた髪止めをもらったといつて満面の笑みを浮かべていた。私はその大切なものを無造作に外し取り上げると、田植えのすんだばかりの水田へ放り投げた。妹は当然、泣き出した。私は無言で帰宅した。妹のその後はよく覚えていない。

私はすぐさま後悔した、髪止めの落ちた場所の辺を搜索した。田んぼの際だったと感じていた。だが見つからなかった。それから毎日一週間ほど同じ場所へいつては蛙の音が響くまでさがした。想いと煩悩を区別整理できなかった。

私はこんな心をつくった祖母を恨むべきだったのか。幼い頃、私のおもちやを縁の下へほうり込んだ鬼、それが祖母の正体だろうか。人の込めた想いと、執着とは、恩愛さえも振り切らなければならないことがあるのだろうか。なんのため、これが自由と平和の為なのか。大人になって妹に尋ねたが覚えていないといっていた。私の心につき刺さっていた

ひとつが消えたような気がした。

真由子先生へ

友人のS、几帳面でおたくだが、悪い奴ではなかった。タツヤに借りた原付バイクで駅前のボーリング場に行く道すがら、交差点に停車中、車に追突されたことがあった。車の速度があまり出ていなかったのだろう。私はすこし飛んで着地し無傷だった。中年の品性のない顔をした男がにやにやと近づいてきた。私はヘルメットをかぶっていなかった。そこが引け目にあった。男は私に過失があるようにいったが、私は警察へ行こうと言い放つと、男はあわてて自分の車のキズさえなおればいいと恩着せがましく言ってきた。この期に及んでも私は早く友人が待っているボーリング場へ行きたかった。男の先導で彼の勤め先の小さな運輸会社までいき、(男にも負い目があったのだろう。彼は私が逃げるのを期待していたかもしれない)私は彼の条件を飲むことにした。警察へ届けなかったのはヘルメットのことが気になっていたからである。18の当時から利に関した駆け引きは苦手であった。事故はあきらかに向こうに非があった。男は免許にキズがつけば困る状態だったのかもしれない。ボーリング場でのことは覚えていない。バイクを気持ち良く貸してくれたタツヤにも申しわけないことをした。その晩、SがTELしてきた。「お前は悪くない」強

い口調でなんとも言った。私は「これで済んだことなのだ」弱々しくつぶやいた。とりあえず私は身体が無傷だったことに感謝していたからだ。

男は忘れた頃に来訪し母にこつぴどくやられて金を受け取っていったそうだ。学生時代、東京の赤羽根にあったSの下宿先を新幹線に乗って訪ねたことがあった。彼は生活と闘っていた。自分の夢を実現するために。

私が東京の劇団に入りたいと言ったときは「資料取ってきてやろうか」と後押しするように言ってくれた。なぜか諦めた私をイラつき不満そうな目で見ていた。

企業の論理に飲み込まれていた私は結婚式にも出てやれなかった。先の年賀状も「みんな俺は幸せにやっているぞ、安心してくれ」というメッセージだったのだろう。私の器の小ささが見えてきた。

振り返れば、個というものを確立していたSは私よりかなり大人であったのである。友人間では自転車の件は私の全面的悪行ということ決着がつき彼もあらためて恨んでいるかもしれない。大事なことはものの背後にある、いろんな人の想い、愛である。それを踏みこじれば、私のような孤独な境遇になるのである。

就職してからSは車で私を乗せ東京見物にまわってくれたことがあった。「几帳面は卒業した」と明るい笑顔をみせた。「今、一番楽しいのは」とたずねると「やっぱあれだろう」「さあなんですか。彼が現在、幸せを逃していないことを私は素直に信じたいのかもし

れません。

真由子先生へ

私の人生の節目には必ず母がいた。私が3歳でネフローゼを患ったとき、至急入院させるというお医者様に対し「お金のことがありますから家で相談しないと」と困惑する若い母がいた。「金のこととは心配せんで、いい。それよりこの子を家からも出られない、そういう子にしたいか」と半ば脅迫のように言われたという。入院費は祖父がなんとか工面した。母は後々このお医者様に感謝している。ムーンフェイスになった私。絶対安静のなかベッドは柵のように仕切られていた。私があまり体を動かすことが好きでないのもその影響があるのかもしれない。父が酔っぱらって病院に夜半訪れ、私のそばで眠らせてくれと無理を言ったそう。辛かったのだろう。退院して私はめきめきと元気になってゆく。

そしてその事件がおきる。折り紙で飛行機を作った私はそれをかざし走って家路へ向かった。急に視界が消えた。マンホールにおちていたのだ。なんの安全措施もとられていなかった。蓋が開いたままの状態だったのだ。私はいつ気づいたのかわからなかったが上をみあげて泣いていた。勤めにでていた母に連絡が入った。母は強くなっていた。示談にもちこもうとする会社に対し弱気になる祖父、祖母、父。母は頷かなかった。勤め先にもプレ

ッシャーをかけてきた。私はレントゲン撮り、頭部に異常がなかった。母は脳波をとれと迫った。母はしぶしぶ示談に応じた。私は無傷だった、マンホールの側にはお地藏さんがあつた。本当にすぐ側に。

このことがトラウマになったのだろう。父の肩に乗りサーカスのようなことをしていた私が高所恐怖症になった。父が他界する前年の夏、ケイゾー親子と母と妹と立山登山に出かけた。後に鉄塔にのぼる電気技師になるケイゾーはどんどん進んで行く。私も平地は風に吹かれ気持ちよく徒歩していた。だが岩肌になると突然恐怖が襲ってきたのだ。私はへたりこんだ、「もう一步も足がでない」私の眼には涙が浮かんだ。登山客が笑ってゆく。母は私の尻を蹴り上げた「のぼらんかい」私は泣き叫んだ「無理や」「登れ」何度も蹴り上げた。児童虐待。いや私は氣を確かにもって立ち上がり登り切った。それで良かったのだろう。母から暴力を受けたのは私がTELLしてきたお客さんの名を忘れたときと二回だけである。

母も急に強くなった訳ではない。祖母との確執のなか何度も赤ん坊の私を抱いて入水自殺を図ろうと川の淵に立ったそうである。しかし暗い闇のなか、いざというときにいつも私が泣き声を上げたそうだ。そしてその度、正気に返ったそうだ。

その他にも母は幾度も私を助けてくれた。女手ひとつで一家をはる苦労は、並大抵のことではなかったろう。常に筋を通そうとした母。ただ私が望むのは罪人への哀れみの気持ち

を今少し持つて欲しいと思うところである。贅沢であろうか。彼女はまちがいに聖母マリアである。そして私は世界中に存在する聖母マリアにエールをおくりたいのである。

真由子先生へ

あまり気が乗らない。無理にフープロに向かっているみたいだ。つくづく南無妙法蓮華經を思つてみた。愛を持ち保つだけの衣食住の保証へ向かう心それだろう。宗教の精神的昂揚性は民衆の救済にはつながらず心の平安だけが目的になつてくるといふ浄土系の学者がいる。たしかに繁栄は自然科学、政治の役割なのかもしれない。

しかし実際、薬の副作用からくる便秘にもならず南無妙法蓮華經を唱えるとそれと共に糞がでるのである。この体験、南無妙法蓮華經は心の平安だけでなく物心両面において力強く働きかけているといえる。

さらにこの学者は宮澤賢治の境遇のように法華經の信仰により家族が仲違いすることもあると問題を投げかけている。これはどの宗教にもいえることではないだろうか、そしてそれはそれでいいのではないかと私は思う。学者はいつも自分で言っているこの世の価値観でそれを測っているのではないだろうか。まずは目に見えない、真実である。

イエスは火を投じに来たといっている。火がすでに燃えていたのならよかったと。家族を

バラバラにするためにやってきたと。これはどういうことか。火、それこそはすなわち真の愛のことである。家族のなかに真の愛をうちたてようとすればそれは波風がたつであろう。だが神の国の住人になるときは避けては通れないのである。

イエスは律法をまもるユダヤ人から「何故あなたの弟子達は食事の前に手を洗わないのか」と詰問とまでも。とにかく強くいわれる。(なんともいうように、いきあたりばったり、なので)イエスの答えは忘れたが、私はこう思う。罪があるから美しい。意識しなければ罪はない。罪に気づけばひとに哀れみをかけられる。真の愛とはこまごまとした規則にしばられるのではなくその大意をつかむことにあるのではないだろうか。

イエスは確かに娼婦や徴税人といった当時、罪人とされていた人たちを祝福するが、なにも悪いことを認め、勧めたわけではなく、神の国は職業の貴賤もなく、生きる為には嫌な男とも肌をあわせなければならぬ売春という地獄からも解放されるということを、罪を定めるのではなく福音として伝えられたのである。

釈尊はこの世は一切皆苦とおっしゃった。最後の旅に出られ、当時、商業都市で民主的な政治が行われていたヴァイサリーを何度も振り返られ「ヴァイサリーは美しい」と言われた。そして従者のアーナンダに「いのちは甘美だ」とおっしゃった。釈尊が変化したのではない。仏の心でみれば、みんなが思いやり、分かち合う心を持てば、この世は美しく神の国になるのである。この精神が底流し法華経としてまさに花開くのである。魂の革命以

外に心の平安、民衆の真の意味での繁栄、つまり最低限度の文化的生活を保証することはできない。
アメリカの格差社会の現状を知った。富むものは自分のことしか考えていない。イエスのやがて泣くことになるだろうという言葉が彼らの表情、相、から俄然、真実味を持つてくるのである。

真由子先生へ

父は母に店を大きくしようと夢を語っていたそうだ。彼の虚構、嘘にまみれた、精一杯のまごころだったのであろう。酒店をたたみコンビニエンスストアを営むことになる。母はある種、夢が実現してよかったと神仏に感謝した。私は薬を飲みながら深夜勤務を続けギブアップとなり逃げ出す。妹は母の体だけを案じ私が復帰することばかり訴えた。私はもう嫌だった。雇用関係、経営というものが。

母は深夜にカウンターに立ちしばらく続け、高齢と売り上げが落ちたのを機にコンビニを辞した。

妹は介護福祉士となった。親会社と我々の板ばさみになってたぐさんの口スを出し、悩んだ頃からみれば全然違って生き生きしている。

母は「妹がもう少し欲気があれば」と野心をむきだしにしたが、私は「もうあんたにつきあわされるのはごめんだ」と吐き捨てた。ひとりで行商でもすればいいのである。

春季祭礼の獅子が舞った。その後のかたづけ、整理のことである。私が懸命に職務に励んでいた病院時代に部署は違うが一緒に働いていた女性二人がいた。（今は共に病院は退職している）当時の私を意識したのか、いや考えすぎだろう。年齢からいっても地域のリーダーになつていかなければならない立場にいるのかもしれない。人に先んじようと争つて仕事をし、互いに張り合い、いらついているようにみえた。二人ともストレスで体を壊したと聞いた。今一度言つがそれは病氣以前の私に感化され積極的などころを見せたかったからなのか。罪悪感からか。私が怠惰を嫌つていたからだ。まあそんなことはないだろう。当時から二人共、マケズだったのかも知れない。肝心の私は頼まれればハイハイとこなし、食べ物が並ぶまでフラフラしていた。誰かがやつてくれる。和を重んじ適当に動いていた。楽である。だがそんな彼女たちから、今、たいへん苛酷になつた感がある、ただ効率性をひたすら追つてゆくはての職場の雰囲気、私には本当にあぶり出されているかのように解る気がするのである。私は思う。どういう状況でもマイペースを崩さないほうがいいみたいだ。相手を思いやりクビになつたときはその時だ。また、そんな恐れがないなら、頑張らず、自分らしく、無理せずに、相手に花を持たす気で生きていったほ

うがいいと思う。我をむき出しにしてはいけない。 他人の評価より自分の愛だ。
私がまた働きだし職場改善に乗り出すとまた悪魔がちよっかいをだすであろう。まあ私は私の役目があるみたいだ。これからが楽しみである。

真由子先生へ

イエスが話しているとき、群衆の中からひとりの女が声を張り上げていった。「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれているでしょう」。

しかしイエスは言われた「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言（ことば）を聞いてそれを守る人たちである」と。

母は自分の信じるところを自由に生きるべきだったのである。自分と比較して罪人たち、つまり弱い立場にある人達を悪人と一刀両断に切り捨てるのではなく同情心をもち寄り添うことが大切だったのである。

ひとはひと、例えば貞操を守るのは本人と神の問題で他人がとやかかいうことでなく、それによって自分は清くて正しいと誇ることではないのだ。母を救ってきたのは私である。自分を正当化することから逃れられない彼女、だがそれは自らへの固辞である。多様な価値観の中から神を選択するという道を閉ざしているともいえるのである。ものごとは

多面的に観なくてはいけない。聖霊が母を選んだのである。私には良く解る。彼女は自覚していないが何者かにあやつられているということ。

家庭成仏というものがある。お互い悪人だからと許し合う、これが南無阿弥陀仏、極樂浄土へ向かう世界である。一方、お互いが感謝しあう、善人だからこれが娑婆寂光土を目指す南無妙法蓮華經の世界である。私は後者を勧めたい。諦めてはいけない。まずいのは互いが義人だから正義をぶつけあうということで、戦いがうまれ地獄となる。

だがそれもある意味では経験しなくてはならないかもしれない。家族もしくは兄弟達の価値観が、金、出世、名譽に傾くとき思い出してほしい。キリストは火を投げ込むためにきた。つまり愛の火種を投じるため。家族は争い合うだろう。これもすべて本当の家族になるためである。何度もう金が金があるのが一番と思っているひとは多いからである。釈迦は妻子を捨てた。儒学者たちはそんな彼を悪人扱いした。釈迦は怖かったのだろう。

ただ何も知らず運命に翻弄されていくということが、責任を放棄した。彼は周りからどんなに非難されようと答えを知りたかった。生きとし生けるものをどこかで操り苦しめ続けるなにかについて、そして仏陀になった。

釈迦族は滅びるが、妻子は出家して幸せに暮らした。実子ラゴラは密行第一とよばれ十大弟子のひとりになる。決して釈尊と親子だとは自慢しなかったという。

子守唄の代わりに、母は児童文学、世界の名作を毎晩、枕もとで読み聞かせてくれた。私

は覚えている、「幸福の王子」やアンデルセンは心に残ったのだが宝島は途中で読まれなかったことを。すべては大きな力のうちにある。
優しき母への感謝はどう返していくかは思案中である。

真由子先生へ

何から話せばいいだろう。尾崎の曲、ドーナツショップ。「すべてが僕の観念によつてゆがめられてゆく」というモノログがはいる。自重気味なのか、遠慮しているのか、いままでの世界を否定しているとまでは言わないが。しかし人は不徳のなからなにか真実めいたものを掴んでくるのは往々にしてあるのではないのだろうか。

少し弁明してみる。私を雄山で頂上へ登山させるため尻を蹴り上げた母。考えると体罰を加える暴力教師と変わりはない。が鬼手仏心とはこれであろう。嘲笑のなか、親子、恥も外聞もなくなされた行為、私は羞恥心をこえ、恐怖と闘い、あきらめることなく、競争ではなく、己れに克つため立ち上がることができた。母に罪はない。それより大きな功德があり健康に恵まれた。私が生きとし生けるものの幸福というものをめざし、あきらめずに本当にいそしんでゆこうと、事実の中の真実を見出す目的を持つためには避けて通れぬ出来事だったのである。

Sのことであるが確かに彼は個というものを確立していたかも知れない。だが聖書は言う
幼子のようなものでなければ神の国には入れないと。彼は自らのために計画をたて自らの
ために結婚し自らのために年賀状を送った。イエスも釈迦もいう。昨日を振り返るな、明
日についてあれこれ思うなと。Sは話した「今度はもつといい計画をたてると」そこにあ
るのは自分への固執に他ならない。私の事故の件で「お前は悪くない」と繰り返し電話口
で鼓舞してくれたが、この世では確かに勇気のある正義にみちた言動、姿勢である。

だが神の国では負け犬のような根性が喜ばれるのである。つまり勝ち負けよりも相手と思
いやる気持ちが優先されるのである。

彼のような人はたくさんいる。私はなぜかかれらに思春期、反抗期における自分への屈
託、葛藤のような存在がなかったのではないかと感じるときがある。

結局、フロムという自分では自由で独立した人間であると思っているが社会にはめこま
れ、他人の影響をうけ標準化され行動も予測され命令には従うという人物像が浮かび上が
る。先に不徳の中から真実めいたものを見出すことを言ったが、妹の髪止めの件やK子に
対するいじめはまさに不徳であり罪である。

しかしそれが契機となり罪人たちの苦しみも理解し、哀れみの心を持つことにいたったの
である。真実めいたものは愛を醸すことによって濃くなり純然たる真実にたどりつく。

後ほど披露するが、ひろ 先生への書簡のなかで出世がしたかったと記したが単に頭の片

隅に意識していたほうが正確な認識だろう。自利的なものか利他の精神からきているものなのか判断つけるのが出来かねるほど何かに突き動かされ改革に没入していた。賢治と信心では同じである。

一休は隠れて淫欲にはしるエセ坊主たちの顕在化を試みたのであろう。偉いやつだが彼の望み通りエロイやつだと見てやればいいのだろう。「わしには抱けぬ、身の上話に一両おいてゆく」眠狂四郎はやっぱカッコいいなあ。

真由子先生へ

「魚が獲れて家族が元氣なら幸せだ。」東南アジアのどこかの国の話である。オバマ大統領が48年ぶりに米国のかしらとしてマレーシアを訪れた。前のマハテール元首相は欧米ベつたり、それをやめて日本の経済政策を見習ったそうだ。そして現在、中国の脅威への警戒と関連してTPPの各国の思惑が進んで行く。

微笑みの国と呼ばれ、穏やかな仏教国として存在したタイの現状はどうだろう。農民、新興層に支持されるタクシン派につながるインラック首相を追い落とすとデモを組む利権を脅かされたくない富裕層たち。

なぜこんなにもみな貪欲になった。男性はみな一度僧侶になる恩恵があったのではない

か。供養されるものを残さず食べるのでメタボリックになるという話も聞いた。これでは三毒といわれる、貧り、怒り、愚かさを人間の欲望のまま地で行っているだけである。どこにも仏法は生きていない。

私の家は酒店であつた。将来、特別なかかなければ家業を継げばいいと考えていた。私の周りの連中も床屋なら床屋、大工なら大工、それでいいと思つていたと思う。

問題意識がなかつた訳じゃない。だが仕事があることと食べていけることに感謝していたからだ。それが大きな資本を持つところだけが一人勝ち、それでは足りず、いまだ血を流さないまでの殺し合いを演じている。かつて日々楽しく商売していたものたちの子孫は借金奴隷として心身ともに疲弊し、使い捨てにされる恐怖にさらされている。人間的な温かさは消え、殺伐した闇が広がつてゆく。愛するという自然な感情さえ踏みにじられ、不安とともに作り笑いがはびこる。

みんな経済的な格差を意識するようになり、不穏な階級闘争へと発展してもいいのだが、そんな激烈な若者たちも現れない。

「お前が悪い」なぜだ「俺は毎日クタクタになるまで働いているじゃないか」「それがあなたの能力なのだ」違つぞ。貧欲と支配欲に凝り固まつたやつらがうまいカラクリと舞台装置を作つていたいけな人たちをひきずりこんで搾取してゆく。

若者たちはそのノウハウを大人たちから学び特殊詐欺、オレオレ詐欺など、非法的に金

持ちの年寄りに復讐を仕掛ける。親たちは子供の尻を叩き金の成る木にしがみつけさせようと画策する。だがもうどこにも安定、平安はない。仕組まれた生存競争は相手を想い、分かち合うところからしか消滅させる手立てはないだろう。冒頭の声をまた聞きたいものだ。

真由子先生へ

私は多様な価値観のなかから疑りながら聖書の神を選択してほしいと思っている。そうではないとイエスの教えがなぜ大切なのかわからないからだ。やみくもに信じるのは間違っている。自分の頭で考えない人がカルト宗教にはまるのである。

これら書簡、みな基本的には恋文なのです。そのつもりでいてください。

寺山修司はその幸福論のなかで、身の上話、思い出の故郷、そして将来の計画の構想などは、性欲の最大の敵である。二人にとつて、いちはやく精神の和合を果たしさえすれば、その上肉体の和合など必要だという分別が生まれてしまうのであるといっている。

しかしフロムは愛とは与えること、興味、理解、知識、ユーモアあらゆる表現を働きかけること。そして深まるのが本当の愛、成熟した大人の結合であると言っている。

性欲を劣情ととらえる。そんな人は確かに多いのではないだろうか。だが愛の発展の結果

成るものだと言ふ人もいる。また、ただ子孫を残すために行為があれば感情などはどうでもいいという人もいた。アウグスティヌスは悪を知つて悦ぶ心、そんなところを情欲（リビドー）呼んでゐる。またこんな心は自力では克服はできない。ただ心に神の善が満ちるときのみ悪による欠如を埋めることができる。南無妙法蓮華經。

私もなぜか性欲と情欲の区別に迷つた。そこにはいつも道德律が漂つてゐる。性欲は善、情欲は悪。割り切れればいいであらう。だがすべてはまぼろしの中に完結することである。姦淫の罪を犯したと、世の中には手淫一回で自殺した人もゐる。

人間の性が文明や親に疎外されてゐる。いや私の性かもしれない潔癖な母親、道德律から解放されるのはいつであらう。しかし世は（妊娠）、（病氣）、（嫉妬に代表される悪意、悪感情）そういう危険に満ちあふれてゐる。私は本当の愛に達するとき、そのときは幸福であるように願つてゐるのである。それもみな神仏のはからいの中にあるみたいだ。

卑怯なサタンも好条件なら神と取引したいと思つてゐるのであらう。危険が迫るとき試練のとき、神が助成を示唆してくれる。そこに気づくのが神の心に沿うものだ。だが神は利に關しての駆け引きはせず、もとは天使であつたサタンの中に神性を見出したいのである。ただ人は優しく、賢く生きなければならない。地震、暴風雨も、地球が創造されてから約束されてゐたといえる。自転があつて繰り広げられるエネルギーは重なり、そして天災は引き起こされるのである。地球すなわちマクロでみれば人間中心ではなく、森羅万

象、有象無象が平等にあり、それをつき動かしているものが根本に存在しており、網の目のようになった因縁からすべて生起してくるのである。「東日本大震災」もあった。悪人、善人関係なしに死は平等に訪れる。だがもし善人ならばその死体は転がり破損し崩れていようとも、その魂は美しいまま宙を飛び、風のように疾走してゆくことであろう。私は夢の中で幾度となく空を飛ぶ体験をした。それは、それは本当に愉快だった。

真由子先生へ

南無阿弥陀仏を信じたい。賭けだがひとは、親鸞上人のいわれとおり、たとえ地獄におちようとも阿弥陀如来との関係を大切にすればいいわけである。私は南無妙法蓮華経を信じる。法華経の久遠の釈迦如来を信じるのだ。私は後者が絶対正しいと語る。本人達の信仰の捉え方に起因する。ただ私は原理だけは説く。人は幸福にならなくてはならない。信仰は因縁もあるがきわめて個人的なものであるからだ。

新卒で入社したころはバブル期絶頂だった。結局、人のつながりは想いにあるが課長は媚びともとれる愛想を期待、要求していたみたいだ。当時は景気もよく本当に会社のためになる人物よりも上司の指揮下における従順な人間が好まれ、やはり組織に合わない人間は排斥されたのだ。

毎日の罵声は人を萎縮させるしか意味はなく、自己存在を否定させる手で、いまなら残酷なパワーハラスメントと言えるであろう。上司の自らの位置の保障のためだった。

まあ私は大雑把な人間だったのだが、真逆な几緩面で神経質な人間に教化されていた。私の表情は冷たく曇ってみえただろう。人格改造である。私はかつての周囲の連中にバカヤローといってやりたい。近所に他人からのつつこみに応じ敵意をもたれないように返答することばかり考えている会計事務所に勤めている人がいる。可哀相になる。だがそういう人の忍耐や不安、心が分かるようになった。

部長は言った「学校じゃないぞ」課長は父親のいない私を鍛え一人前の男にすると母に言ったことを今、聞いた。当時、聞いていたらと思う。辞職はなかったかも。義理、人情、感情のコントロールを発見したが、課長との接触は好ましいものではなかった。彼らは私のイノセントな部分を危惧していた。しかしそこは私の神性である。

私の心の奥は平和を求め、金云々は二の次だった。静かに暮らしたい。平和がなければ滞在したくない。こんなことを平気で先輩にいう私は危険分子であつた。課長は退職願いを提出した私に書式が違つたと叱つた。部長が「どうした」と初めて優しい言葉をかけてくれた。私は彼らの良心だったのかもしれない。私をライバル視、脅威とみていて喜んだやつもいただろう。でも不思議と悔しくはなかった。

世の中には率直な思いやりよりも、何か見えない残酷なものが流れているのを知られ

た。振り返るとセクハラが酷かった。純情は死して不倫は文化だと叫ぶ人間まで出てくる時代であった。そしてまたパワハラによって理不尽にも結婚させる。私はそんな企業風土が嫌で飛び出した。叱られてばかりいれば遠からずパブロフの犬のようになる。人間より組織へのマインドコントロールは何度も言うが、ひろ 先生からの本物の宗教によって粉碎されるまで続くのである。最後は自分をすっかり持った、Nという男。要領がよく常に上位に立とうとする。傲慢で権力志向で出世欲の強い、利にさといやつが天下をとつたみたいだ。

課長は言った「お前は家では大事な息子かもしれないけど会社では二等兵だから」現在トップにいるNは言った「会社を儲けさせろ、利をもたさなければ、お荷物だ」つまり課長のそれは反語であったのかもしれない。組織とは残酷なところだ、本来の自分はちゃんと大切にしろよということだったのであろう。洗脳しようとしたNは現在、社長である

私が退職願を提出したとき課長は涙を浮かべていた。私の優しさと誠実さと正義感だけは認めていたと思うからだ。彼はそれだけでは世間、生きていけないことを教えたかったのであろう。

想いと想いが空回りする。持つて生まれた性根は曲げられないものである。企業戦士には向いていない。彼の「いつまで坊や、みたいな顔をしている」という声が聞こえてきそうだ。そんな殺伐としたものが世間かと思うと自暴自棄になりかかった。そんなときになげ

なく観たTVにコピーライター募集の広告があった。私の眠っていた野心に火がついた。その話は、いつかまた。
組織というものは実力だけではだめで、うまくコミュニケーションをとってゆかなければならない。どっちがいいだろう。実力のみで評価される時代と、ゴマをすることで救われる時代と私はどちらも嫌だなあと正直に思うのです。多分ガバナンス（統治）を重視する人間が助かるような気がするのですが。

真由子先生へ

こちらの時代というNHKの番組がある。ときたまというか、よくというか昔から観ていた。最近どうしてか眠くなることが多い。これは確実に内容を受け付けないのであろう。難しいというよりは、どうも精神訓話的すぎる。

今回は井上洋治司祭の話だったがやはり作家との違いだろう、格段に彼の友人である遠藤周作さんの方が面白いし興味深い人物である。

バタ臭いキリスト教を日本人向けにという井上さんの話は意味がわからない。法然が好きなのわけだ。

そんなことより本当のイエスの教えはなにか、と想いを寄せる方が大切なのではないだろう

うか。釈尊の教えの真髄はなにかと真摯に求めた日蓮みたいに。

若き私は老人病院の現場に事務員として勤めていた。誤認が許されないきつい務めであったが、私は負わされる使命に耐え、懸命に励んでいた。そして強い責任感を痛切に感じていた。その責務から逃れ、またミスすることをなんとも思わないという奴らもいた。私は彼らが信じられなかった。入院患者の看護オーダーを指示のもと作成するのだが、私のもとにくる先から、また離れていった後でも、どこかで狂いを生じ真の意味での看護サービスがゆきとどかないことがおおいに予想され察せられた。私は悩んだ。今から考えれば質、量とも私の負担は度を過ぎていた。そしてそんなことより、現場ではドラックロックや拘束などもかなり行われていた。医療事故も頻繁だったであろう。

いま聖書を開くと「わたしを福音のためにすることはいのちを得る」という趣旨のものが現れてきた。仕事であろうが、なにかをするとき自分というものがそこに介在してはならないのだ。ミスをなくすことは大事だが、心の余裕をなくしストレスから身を持ち崩すのであれば、それはいけない。誤り、責任に対してはこの世の裁きがなされるのである。神の価値観では自分の名譽、自尊心をことさら意識してはいけないのである。強い責任感の放棄である。これが安楽につながる。ただ自分らしく。すると神仏は微笑む、明るく、素直に、温かく。自らの職責を果たせ。

先に戻るが、井上さんはどんな罪でも申しわけないと思うと、つまり懺悔すると救われる

と言っている。そうだろうか。そんなことより前向きに善を求め歩んで行けという声が聞こえてくるのだが。また彼はベルクソンの「死とは原子が右から左へ移るだけ」という話を聞いて救われたと言っているが、まあ救われて問題解決したのならよかっただろう。だが死とは人生案内で鷺田清一さんが言われたように、自分ひとりだけのものではないと気づくことの方が大切で、そう思った方が遥かに思いやりに満ちていて神に愛され安らかに天国に迎えられるだろう。

唯物論者みたいな井上さんには少し失望した。でも気にせずね。番組最後まで観ていなかったから、もしかしたら、結論は変化したかも知れないから。それよりおふくろのケガはどうだったかな。

真由子先生へ

小池龍之介という人がなかなかいい本を新書の話題作として世にだしてくれた。題名は「しない生活」。怒り、妬み、迷い、欲望で自分を不幸にしていませんかと示されている。私は極力、本屋へは行かないことにしている。情報源はもっぱら新聞である。そしてこの住職のことを知った。まずもって780円は廉価である。だが私は購わなくても内容は、広告の帯からだいたい察しがつく。

第1章 つながりすぎない

入ってくる情報が増えれば増えるほど心は乱れる
他人の心のブレに対して寛容になる

正義感をふりかざしても醜悪な小悪人になるだけ

第2章 イライラしない

悪意のない愚かさにも怒っても疲れるだけ

なぜ大人になっても親の言葉には心をかき乱されるのか

「自分を正しく理解してほしい」という欲望を手放す。

まず相手の甘えを受け止めれば対話の質は向上する

第3章 言い訳しない

「人から失望されてもかまわない」という勇気を持つ

第4章 せかさない。

「こういう自分でありたい」と渴望するから苦しくなる
人を自分の思い通りに変えることはできないとあきらめる

人は生きている限り「満足しない」という苦を味わう

第5章 比べない

信条を貫くか、諦めるかのタイミングを見極める

「弱い自分」「できない自分」を認めるほうがうまくいく

他人と比べない、過去の自分とも比べない

いくつかピックアップしてみた。基本的には私も賛意を抱くが、解釈の仕方がまずいと単なる人生の諦めにつながる。日蓮も釈迦も死ぬまで説法はやめなかった。魚心あれば水心あり。俗的ではあるが。いずれにしろところに熱意を秘めて、因縁があれば伝わるものは伝わる。と信じるのは仏法の命ではないだろうか、私は思うのである。

208

真由子先生へ

最近、金、モノに執着しない。祖母の教育が実を結んだか。母は膨らんだ生活をしたみたいだが分をわきまえて購っている。私は特別に母に旅行や温泉行きをプレゼントするつもりはない。母の日に鉢入りのカーネーションを贈るだけである。

誰かが言った、旅行に行つた感想は、「そりゃ山もありや海もあるし、そんなもんだろ」私もインドの靈鷲山まで行つてきたが、どうも断片的な記憶だけでいかぬ。結局、まあまい酒が飲めればどこでもいいか。

私は簡素に生きたい。涼やかに。ケチケチではないが欲しいものを購うのではなく必要なものを購う。そしてそれを喜びとする。質素、儉約、これは大事なことだ。

母には小言は言わぬようにしているがここをきちんと押さえると、もつと健康で幸せになつてくるだろう。それが痛いほどわかる。

来客した友人にウイスキーを遠慮せずにどれだけでも飲んでもらえる、それだけの金があればいい。どういう形になるか、この先、もしかしたら皆から施しをいただいて暮らすことになるのか。そうだな。乞食こそ究極の仏への道であり、なんでも感謝でお受けし、生かされている喜びに浸れるのであろう。そのときどう相手に布施の功德を積んでもらうかそれが大切だ。

仏と悪魔はものごとの陰、日向で活動し続けている。人が度々口にする、生かされているということだ。すべては不二、善いとみれば善い、悪いとみれば悪い。ただ意味はなく万物の上に起こるものではない。ここから人は学ぶ、「災難に遭うときは遭うがよからう、死ぬときは死ぬのがよからう」良寛さんの言葉だ。これは受難への最良の防御なり

古賀政男が言った。「私の唄がうたわれなくなればいい」つまり悲しいひとがいなくなれば

いい。これは尾崎豊にもいえるのではないだろうか。

尾崎のスクランプリンロックンロールの中で彼は「自由っていったいなんだい」と叫ぶ。どんなに外的条件に恵まれようと霊的に神によつて心が欲望から自由にならなければ本当の自由はない。それがなかったとき尾崎の歌は喜んで哀愁を伴いながら去っていくだろう。霊とは真実の良心である。

男女ともいえるがナンパなどで複数の相手と性行為にいたることは、はたして自由で愉しいことなのであろうか。処女性は大切である。たとえ婚前に不本意なことになっても罪と意識するから美しいのだ。罪が、罪悪感から、すべてに哀れみと、同情に変化してゆくだろう。私はただ本当に愛しているもの同士が苦しまずに一対になつてほしいと思つていただけなのである。処女性。それがまず婚姻の幸福に不可欠なのは疑いをはさむ余地はない。男性が素直で、真面目で、正直であればあるほどに。

真由子先生へ

残念なことになった。母の腰の痛みは脊髄の少しではあるが損傷からきていることが明かになった。このことは信じない人には偶然でかたづけられてしまつたろうが、あることが因縁となつて起こっている。

ひとつは、私が彼女に立山登山のときに何度も腰を蹴り上げられたことを、書簡に表したことに派生しており、母に罪はないとした。

だが罪はないと私が規定したことは罪の可能性がおおいにあることを示唆しているのではない。今気づいた。無意識だったがなぜであろう。

やはり、人だろうと、己だろうと何かに勝つ、そのために暴力をふるうのは許されないことなのである。そしてそのエピソードを書いた日、母は職場で転倒したのである。私は哀れとは思えなかったのだが「喜んどう、が、だろが、いね」と鬼の様相を呈してきた。それでも仕事に行きたい。凄まじい生活への執念である。

また、事故がおきた。1日は私が母に「もう遠慮しとけば」と言うところの日蓮宗の御札を頂く、ツイタチ参りのお寺の大事な日だった。

御加持を受ける母が毎年災難に遭う。つまりどんな靈験あらたかなものでも、導師が清く本心に心から皆のことを思い、また当人も「御札だけ安いから家族の人数分郵便で送ってもらってそれを仏壇に飾っておくわ」というようなそんなざいなことせず、「仏さま自分の短気で強情な気持ちが出るときは南無妙法蓮華經と念じますからまたお助けください。

人を裁きませんからわたしへの罪を定めることはお許しください。仏様、日蓮上人に帰依しおまかせします。すべてよろしくお願い申し上げます。いつもありがとう御座います」。そういう気持ちを感じればかならず良識のある願いはかなうのである。これは聖書にも

書いてある事実である。ただ聖書はキリストの肉と血によって永遠のいのちを得ると言っているのに、この寺は1年しか御札の効き目はないという。これは商売である。どんな偉い御坊さんでも自らの子の後継ぎをつくる。寺を管理して行くとすれば生身の人間が表出され、煩惱、妄想がわき出ても仕方ない。

お釈迦様は偉かった彼の死んだ後、葬儀には出家は拘らず自らを灯とし法を灯として修行に励めといわれた。つまり後の心配をせず組織より自らを大切にせよとおっしゃい、なんの未練も残されなかった。足蹴にされたことを含め私は教育の一環と思い、母のことを恨みもせず逆に感謝していた。が、彼女自身が常に生きる姿勢に疑念を持っていないということは己の価値観の押しつけにも繋がり、このことはやはりいかなる理由があろうと日蓮を何度も足蹴にした大罪だったのだ。そして母は勘違いしている。先祖供養して先祖に守ってもらわんな。違うのだ。すべて神仏におまかせし、明るく素直に温かく生きて行く。そして、とうちゃんと、ばあちゃん、じいちゃんの徳をしのんであげる、これが先祖供養である。うちの法華宗が好きだ。かあちゃんそれでいいのだよ。南無妙法蓮華経。

真由子先生へ

なぜ私が他の二セ予言者のように地球滅亡とか人類破滅とかを言いたくないかが解ってきた

た。イエスは感じていた。ただ人の世は悲しいことが多すぎると。神の国が招来するという福音をかたらずにはおれなかった。神の国は在るとも無いとも言えない。また来たともこないとも言えない。その人の心の美しさによって実感する人もいれば、また邪悪な心によつて地獄をつくりだしているものもいる。邪悪とはすなわち人より得しよう、出し抜こうと考えることをいう。この世は諸法無我である。網の目のように関係しあっている。善も悪も一見関わりなくではならないように見えるが、違ふ。私を信じて南無妙法蓮華經と唱題すれば、愛別離苦、怨憎会苦というものが自然と消えて行く。つまり奇麗事ではなく、そんな因縁を断ち切れるのだ。イエスに戻るが彼は言っている。この世の終末は父しか知らない。だがイエスは強い聖靈につき動かされて神の国の到来を告げて歩いた。それは頑迷なる罪人たちへの警告と訓戒の意味を込めてのことだった。そして殺された。心の美しさを保つのは容易ではない。悪魔は記憶を消しに回るし、生活苦の試練もあるだろう。また富、快樂により心を煩わされる人もたくさん出てくるだろう。

イエスはからし種の根づきによつて譬えている。愛から離れる人、そういった人たちはすべからず計算高く、わがままだ。日常の繁雑さに心奪われてもいけない。静かに瞑想とまどいがないけど自分を見つめる時間が必要である。結局、心に神が宿る人たちにとつてこの世の終わりの審判も最早どうでもよい。生きるとは苦痛から喜びに変化し、死ぬとしたら天国へ迎えられるからである。

それはキリスト教徒だとか仏教信者だとかの問題ではなく極めて個人的なものでありこの世を明るく素直に温かく渡ったひとに授けられる特権なのである。私は悪人に対しては聞く耳をもたない。またそういう本当の意味での罪人は私の声は聞こえないだろう。ただ真に難しいが、回心に向かう人を神は大歓迎されるのである。

真由子先生へ

感謝という言葉とその意味に疑念をもつ、ひとは感謝されるために善をおこなうのか。いや違うぞ。親は子に感謝されるために育てるのか。いや違うぞ。感謝なんかもとめるものではない。またするものではない。例えば先祖供養がある。何のために行う。ひどい人になると故人が化けてこないためぐらいに思っている人がいる。大半の人は感謝を示すためである。私はどうも釈然としない。感謝するというものの裏側には、ある種自分への負い目とともに自責の念を感じずにはおれないのだ。そして感謝されるとき、さもしき期待がある。裏切られれば恨むことになる。

親が子供を育てるのは自分の喜びのためである。それが無いのならさっさと捨てればいい。その子に運があるのなら生き延びるだろう。子供も親に感謝などせずに自由に生きるという。明るく、素直に、温かくそれでいいのである。夜中に猫が寒空のなか鳴いてい

た。最近、せわしない。ふすまも障子もボロボロになった。「私は食べ物と住むところが与えられて少し遠慮しろ」と言いたくなつた。しかし猫にしてみたらどうであらう。自由を制限されて、おまけに飼い主は冷酷、こんな嫌な環境はない。風のなか骨になつたほうがましだつたと思つているかもしれない。だから私は猫に感謝など求めない。自由にさせる。それが愛であらう。つまりお釈迦様はつまらぬことで自分を責め柳の下の幽霊を恐れるなど言ひたかつたのであらう。それが執着を捨てろ引け目を持つな、ということだつたのであらう。だから御守りなどは守つてもらえろと思ふのなら素直に信じ、疑念があるのならやめる。それでいいのである。仏法からどんどん離れた自分になるのに外堀だけをかためても様相は悪くなる一方である。心は猫にも人にも伝わる。母の御守りを親族分頂くというもの。これは強情と支配欲を満たすだけの心で、折角の優しさもお仕着せになつてしまふのである。

つまり感謝など必要なく、意識すれば意識するほど冷え冷えとしたものが流れるのである。ただ存在する。そして愛する、これでいいのである。猫が静かになつて眠りだした。不思議である。猫は母の安眠をおびやかすサタンの使いでもなく、なにものでもない自由なひとつの存在である。私はそれでいいと思う。ただ愛し合つ。後、愛という言葉だけが残るか、もしくは人々のなかから憎しみも無関心も消え、深いおもいやりがあふれることを私は願つてゐるのです。そして母に幸あれと祈るのです。

真由子先生へ

また矛盾が現れてきたように思う人がいるかもしれない。

感謝という言葉である。ありがたく思つて礼をいうこと、心にありがたく感ずること。

前に感謝が必要であるとのことを記したことがあつた。私はここで言いたいのは感謝というものをよく考えてほしいということである。

何かの代価を求めて、あらわすのではなく、心の奥底、深層から自然に湧き出るものでなければいけないと思つのである。

つまり本当の慈愛からもたらされるものでなければならぬということである。

世間では欲得の報酬として与えられるものに対して卑屈なまでに感謝として品、笑みでお返しをするくせに、本当に魂を救済してくれる真の意味での有難いものに対してはむしろぬ顔をするからだ。そして世俗的な教団は信者に感謝の安売りを強制する。真の感謝の心とは静かで穏やかで心地よく落ち着いて愛とアナロジーしたものである。私は感謝というものをお否定するわけではない。感謝というものは意識してもいけないし、でもどちらかといえど観念的になつたほうがいいと思つ。返礼などは考えず、たえず保ち続ける、自ら愛を確立するように。

私が危惧してきたことが現実になった。感謝、愛とか心地のいい言葉で従業員を縛りつける居酒屋などで最近みられるようになってきたボエム産業である。ひとつのインチキ宗教である。感謝、愛、ひとつでも概念から事実、真実まで自分で考えなくてはいけない。哲学することをやめたらもはや死人である。いや死んでからも哲学は存在するかもしれない。それが宗教である。自分の心の奥底にある声に、耳を傾けよう。何かを訴えている。本当の自分にたどり着きたいと。感謝、感謝と言っている人ほど不平不満が多いようだ。それだけ要求するものが多いからだろう。観念的な人はいないがとうとうという言葉がすぐでる。経験主義的な人もありがとうという言葉の重さを感じているかもしれない。何度も言うように感謝というものは人に求めたり、押しつけたり、促したりするものではない。感謝というものは愛に基づき自発的にするものである。決して強制されるものではない。

真由子先生へ

少し整理してみる。ギリシャ、ローマの神がみは人格神であるが。ほんとうに放蕩であり好色であり残酷である。日本のカミはどうだろうか。これも気まぐれであり人々は翻弄される。なにかもつと違ふところに安寧に導いてくれるような、なにかも超越した温かい存在があるのではと人々は考えた。これが聖書の神であり仏である。仏は神によって生

み出されたものであり、神は仏陀の弟子でもある。そして平等である。この世を創造したのは神であり所有は仏にある。聖書のなかにイエスが弟子の足を洗うシーンがある。そして弟子たちも互いに洗いあいなさいという。つまりイエスも神も気さくで友人でありまた、お互いが教師の立場にあるとおっしゃいます。

この平等という意味は深いものがある。男女の平等、大人と子供、賢愚、美醜、まだあるだろうが、ここでは美醜について語りたい。私の小学生のころいつも同じ時間にバスから降りて家路にむかうひとりのおじさんがいた、なぜかうつすらかすかに笑みを浮かべているように感じた。彼には保育園に間借りしている妻と娘二人がいた。母は安い給料、貰って帰ってくるだけしかできない能なしだと言った。奥さんは、はばかりに醜女であった。私は彼の娘をからかったりした。そして晩御飯、のときになると奥さんの娘を呼ぶ声が響いた。お世辞にも美しい声とは言えなかったがなんとも愛情がこもり、あたたかさがあり、私はそれを想いだし涙がこぼれそうになるのである。彼は地域の親善ソフトボール大会でも「ぼく、もつと、右守られ」と守備位置を優しく指示してくれた。私はこの年齢になって解りました。彼は本当に嬉しかったのです。唯、自分だけを頼り、温かく寄り添い、自分の帰宅を待ち、自分を愛してくれているものたちがいることを。そしてその大切さを本当に感じていたのです。彼にとつて美醜など取るにたらないことだったのです。神仏はそんな彼を愛されました。一軒家を買って美しく育った娘は、気持のいい、屋根職人

の婿をもらい、孫はある高校の生徒会長になりました。親しみが有り人望があつたのでしよう。プラトンには美のアイデアをもとめて恋をするといひます。美とはやはり心の美しさしか想ひ浮かびません。私は男として、酒も飲まず、煙草も吸わず、わがままも言わず、温かい家庭を築いた彼に目一杯の称賛をあらわしたいのです。

真由子先生へ

神は好きになる人を愛する

私はフランスの作家モーパッサンをよく読んだ。とにかく私は乱読するのはいいが厭世的なものによく出会った。短編集のなかに、彼女の前の男に嫉妬する話や別れたあとの女の彼氏が気になるとか、後ろ向きの話が多かったが、シモンの父ちゃんというもしかしたら唯ひとつだけと言っていいほどの明るい感じのストーリーがある。

父なし子のシモン、腕のいい職人の男と仲良くなる。いつしかその男は父親となる。そしてだれもが変な噂もたてず男をシモンの父ちゃんと敬意を込めて呼ぶことになる。やはり人は仕事で評価するか。少し意味深い。

私にも若い頃、嫉妬心はあつた。いや人より強かつたかもしれない。年齢をとつて寛容になつたわけではない。情欲に近い性欲が弱まつたからだと思ふ。これは各自、場合は違ふ

と思うが、私の場合、薬を含め病気のせいであろうか、それとも悟りに近づいたからだろうか。建築のプロデューサーというか大工の元締めのようなことをやっているカツジさんと公立病院の調理師であるカズキと三人で小料理屋に飲みに行った。私は両方に親しいので仕事のだし、間を取り持つため、使われたのかもしれない。でも奢りである。有り難い。羽振りのいいカツジさんは終始、機嫌が良く卑俚な言葉を連呼した。私は自由奔放だった学生の頃のポジティブな気持ちに戻ってきたような気がした。私を弟と可愛がってくれるカツジさんの元氣をつけさせようとする心使いと信じた。官能小説を書けとさんざん言われたが私の世界、ユウサクやアキラクンを捨て切れないし、そんな才能も力量もない。そんな私をカツジさんは「どこか上から見とる」といった。私は神の靈を身にまとうているがそれは違う。なぜなら一度書いたユウサクやアキラクンのハナシを読むたびに彼らを想い、涙が溢れてくるからだ。それというのはユウサクとは同じ非正規、アルバイトで汗を流す立場だったからであり、アキラクンとは無謀と呼べる、強烈な結婚願望で一致していたからである。私は「そんなことないちゃ」とだけ答えた。49歳のカズキはようやく生活が安定し、競輪ではないが、自ら自転車に乗ることに大金をはたいて、アスリートに憧れている。「俺もバカにしとるが、だろ、がいに」と冗談で、笑ってから言ったので「しとらんわい」と返した。本当はおまえこそ、「こまったなまけもの」とみとるが、だろ、がいに」と言ってやって笑いたかった。

ひとりで盛り上がったカツジさんがトイレに立った間に「彼女はいるのかい」と聞くと「そんな話、面白いけ」と言った。私は後でこう言えば良かったと思った。「自転車でどこをどう走ったなんか聞いてもちつとも面白くない、好きな人、心に想う人はいるのか、それが知りたかったのだ、それが一番楽しい、自分を叩き上げることより心を開け」と、でも俺はときどき人を自分の形にはめようとしているのかもしれない。

では。先生愛しています。そうさ、こんな僕でもね。

真由子先生へ

父はずっと私を侮辱から守ってくれていたのである。母に貞操の危機が迫るとき、いつもなにかしら気分が悪くなったそうだ。父は生きているうちから嫉妬深かった。自信が無かったからか。違う。私を傷つけたくなかったからである。そして幼子が性に目覚める思春期に役割を果たし終えたように天使によりパラダイスに導かれていったのである。

私はこの逆をやってしまった。父はどういうだろう。潔癖な母があり世間体を守る為に初めて本格的につき合った女性に悲しい思いをさせてしまった。甲斐バンドのブルーレターという曲があります。闇の中苦しみ続けました。その罪滅ぼしに自己犠牲に徹することがひとつの生きていく支えでした。神は十字架につけられた愛子イエスを見殺しになさっ

た。神に子殺しの罪はあるでしょうか。神も苦しみました。私の母が今少し開明的であつたらと嘆く私は卑怯者です。なぜなら母の慈悲深さは私が一番知っているからです。私がアルバイトをパブでしていた頃の写真があります。まるで悪魔のようです。因縁の中、母の貞節で意志が強く愛情深いそんな心に向き合うとき、この件は母の前において割愛せねばならぬものだと思っていました。私が行った最大の悪事である。今でもその罪の意識が私を苦しませ続けます。しかしイエスは復活したのです。たとえ殺人者でも良心の呵責に苦しむ人々、暗い顔していてもいいから素直に温かい心を取り戻してほしいと願っている。私は今までに破瓜に及んだことは一度もなく、なぜならそこに強い責任を感じるからです。自分勝手なポリシーですが仕方ないものでした。

病気になってこの25年間、心が不安定だったはじめの頃、ある人妻を抱いた後、再度の入院。EDは強くなり、それ以来、行為に及んだことはありません。感情も消極的でした。私の本性は不器用で冷酷ということだろうか。いや違う、私には私の思想がある。ただそれを大事にしなくてはならない。(自分のことを考慮せず人を助けるとは偽善である)。だが非道に罰は必ず当たる。肝に銘じる。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

真由子先生へ

私はたぶん本当に頭が悪いのだろう。いい学校を出た人は大概みな落ち着いていてしっかりしているようにみうける。競争なんかに関してもさして問題意識にせず、国のため、みんなのため、自分のため、に許容する。いや表現が変だ。積極的に求めてきたような気がする。人に勝つのが嬉しい。これは頭の良し悪しに関わらず、優越感、劣等感に裏打ちされてこたわる人は多いと思う。嫉妬というのは自分と似通ったレベルだと思う人に感じるそうである。私はいつも独りが好きなのでそういう感覚が失せてきた。たぶん偏差値の高かった人というのは私たちを低俗な人と見ているのであろう。だから安心して余裕を以て眺めていられる。これはどんな仕事しているかと目利きしているのと同様だろう。

ハッキリ言っておく、馬鹿でできる仕事はこの世にない。その専門、専門がある。向き不向きというか、そしてこの世が厳しい競争社会であることを気づかなかった人達は幸運にも愛を知ることになる。また世の中、楽をしようと思ったり、貧欲に金、支配欲を満たそうと思ったりする人達がいなければ進歩はなかったのは事実だ。だから私は単純な精神論も大嫌いだ。みる、こんなに私は愚かだ。貧欲、怠惰を肯定したいのになにか気にさわる。仏の道である。そうか、一切は空。こたわらない気持ちか。とらわれない気持ち。私

は不器用だからうまく整理がつかない。結局人の望みは金と健康ということか。でも人はいつか死ぬぞ。つまり無理して頑張らない、自分にとってのいい加減、そのまんま、それでいいのであろう。南無である。先祖からの因縁とか騒いでいる教団があるが、とりあえずはそのままでもいいのである。それが個性であり因縁である。明るく、素直に、温かく、何度とも言っているが、この世に正解はある。そして答えは真実の愛である。私は自分を信じて、聖書を信じて行くしかない。「神の御名があがられますように、神の御国が来ますように」。

頭が悪いから悩む、そして何かを見つける。

菩薩行をしないで自ら悟るものを独覚、縁覚、辟支佛という。仏にはなれないという。

菩薩行とは「布施、持戒、忍辱、禅定、精進、智慧」六波羅蜜といって修行のことである。

つまりケチケチせずおおらかに自分を傷つけず楽に生きて行きなさいということだ。なんかだらだらした文章になったな。生きていくのもこれでいいのかも知れない。愛しています。

真由子先生へ

夫婦とも同級生で一流大学を出て夫は大企業の人事を担当している。二人の娘は仕上がった。親戚の集まりのなか、すべての問題が解決したように御膳に箸をつけている。幸せなのか。だが巷では沢山、苦しんでいる人がいる。身内さえよければいいか。私は見ていてあたかも子育てを終えた動物を思った。世間に対しては諦めの境地でのぞむのか。南無阿彌陀仏の世界か。確かにただ流されていくことは最良の生き方かもしれない。悩まずにすむ。だが私は悩んでいる人間が好きだ。笑顔もなく愚痴をこぼしながらでも。そんな人たちは少しでも他人と良くなかろうと思っているからだ。悩むときは悩むそれでいいのである。結果的に計算高くならずとも、どこか人生を達観し潔くなるからである。

さて悪魔は情欲をもって私を誘惑、嘲弄し続け、この世の平和を求めている。イエスは愛をもってこの世の終わりを求めている。平和が悪で争いが善か。違う。今の平和は悲慘な、理不尽、狂気、恐怖が蔓延しているからだ。私はどうすればいい。仏への道には先生への恋慕、憧憬を諦め乗り越えなくてはいいか。しかしサタンとの闘いにおいては、ピュアな純情を貫き通すことが一番の効力ではないのか。つまりこだわらない、これが肝心なのでは。話は変わるが大嫌いな人には大嫌いとはつきり言っておけるのも布施みたいな気分になるかもしれない。本当は「王様の耳はロバの耳」と穴を掘って言うのがよいみたいだが。なぜそんな悪態をつきたい人に注目するのかというと、ある人が仏法をあまり

にもねじまげているからだ。仏の使者スラを提げてはいるが、人の心を知らなすぎる。そしてその横柄さ。「ああすつきりした」。布施とは喜捨すること、聖書の上着をとられたら下着までわたせ、ニユアンスは違うが、執着せず捨てるということでは一致しているであろう。神と仏を信じること、信じ切ったのはイエスだけだ。水の上を歩いたのである。私たちは絶対信じられない。そして私たちは神を試してはならない。心清らかなるものにはちゃんと啓示がおりる。そのとき神は聖書を通し、はっきりと認識できるのだ。そよ風のように、さわやかな先生に首ったけです。先生の笑顔がいつもちらついています。妄想ですかね。恋に効く薬はあまり飲みたくないです。逆に媚薬を先生に捧げたいです。私はずっと好きです。

真由子先生へ

少し悪口になる。やたら草木や風景、食い物、建造物を詳細に書く作家がいる。そして内容とすれば、あまり芳しくない。しかし小林多喜二の蟹工船などは素晴らしい描写力だ。劣悪な労働環境がひしひしと伝わってくる。人生、食い物や飲み物、着るものそんなもの詳しくたつてどうなる。そんなものは女にまかせておけばいい。おつと失言。
イエスは言う。なにを着ようか、なにを食おうかそんなこと心配するなと。ソロモンの栄

華は一輪の野の花にもおよばないと。私は季節の変わり目の花さえ気に留めてないだろう。他人に言われて、やっと気づく、桜が咲いている、その程度だ。私はある意味で季節に順応するのがはやいのだろう。私が興味あるのは人の心だけである。それを見つめ続ける。目立たぬように、はしやがぬように、妬まぬように、焦らぬように、好きな誰かを想い続ける、時代遅れの男になりたい。阿久悠さんの詞である。高校でたて、工員になったトシオに、私はいやしい根性を起こし「なにが奢れよ」と言ったことがある。トシオはその横柄さが気に入らなかつたのだろう。「ダミー」とふざけ反発した。尚も、もめ続けようとしたとき襖が静かに開いた。「それでも食べられ」優しい声だった。カップヌードルをひとつ机のうえに植樹でもするように丁寧に置いてくれた。私は神様かと思った。トシオの兄上、後に親友となる、兄ちゃん、である。実は「時代遅れ」は彼が私に教えてくれたものである。私と同じ非正規で夜、昼なく働く。だが少し前、彼は本来の優しい自分を見失い、ちよつとかじつたと解る、政局について知つたかぶり吹聴し、また株で億万長者になるという誇大妄想を現実になう夢のように語り、あきらかに劣等感からくる、上昇志向、その努力を自慢したいみだだった。私も馬鹿だった。そんな気持ちを察したがなぜかいらつき「女とつき合つたことあるのか」と質問してしまつた。彼は詰問されたような氣になったのだろう。ショッピングモールのテーブルを睨みイスから立ち上がると歪めた表情をして「なら」と幼き頃から少し不自由な足を引きずつて去つていった。私は「あ

んちゃん」と嘆息した。トシオは私の学生時代、アパートに遊びに来たことがあった。奔放な生活ぶりを父親に話したのだろう。TELすると「おまえみたいもんと、つきあわせれん」とわめいた。私は「だれ、おまえと話したい、ゆうとる、兄ちゃんと話したい、ゆうとる、がだぜ」と3回ほど喧嘩になった。国鉄職員のなれのはての目口あかずが、こいつがなにかを焚きつけているのだ。優しいお母さんが悲しい最期をむかえられた。私は精神科入院中の面会室にて本音で、兄ちゃんに詰問した。「あんちゃん、お母さんのことどうおもつとるが」「仕方ない、生きてかんなんもん」。退院して、私は兄ちゃんをまた傷つけてしまったのではと、涙がにじみ目を伏せながら母をみた。兄ちゃんは、また小銭を稼ぐのに、身も心も傷だらけにして生きていくのだろう。頼むもつ一度だけあの頃に帰ってなにかを恨んで、泣きながらカップヌードルを食おうじゃないか。なあ、兄ちゃん。

228

真由子先生へ

NHKで舟橋聖一原作の忠臣蔵を題材にした元禄擦乱という大河ドラマを何年か前に放映していた。そのなかで印象に残ったシーンがある。中村勘三郎が演じた大石内蔵介が仇討ち血判状を焚き火にくべるのだが、安達佑実扮するお軽が「脱落したり、仕官したりした人たちはきつと浮かばれないわね」と眩く。彼は「みんな一緒じゃ、真つ白な灰になる

よ」と答える。立川談志は落語というものは業の肯定であると語る。赤穂浪士のなかから討ち入りに参加できず脱落していったものたちの立場にたつのが落語であると言う。踊り念仏で有名な一遍が言っている。「出家のままで救われる法然上人は凄い、妻帯してでも救われる親鸞上人はもっと凄い、私はどちらも無理だ」と。私は人間というものはみんな性格が悪くわがままだからと、死んで極楽での悪人成仏を説く南無阿弥陀仏の道に入りそうになった。適当に人間関係をやりすごし金儲けというか小銭稼ぎにうつつをぬかそうかと思ったところで、人のなかの悪魔が表出してきた。親鸞は、はじめ戦乱の世に善を勧めるのが辛かったのではないかと思ったが。やはり念仏は無間地獄への道である。自分のなかの悪をもつての開き直り、これは後に悪いことをすればするほど極楽へ近づくという安易で危険な思想を持つ人たちを、生み出すことになり世を大きく乱した。それに対しても親鸞は諦めの心でむかい、たてなおそうとはしなかった。冷たく長男を義絶するだけだった。おおらかと言えば聞こえはいいが無責任の無関心である。長生きの秘訣ではあろう。90を超えるまで生きた。

さつきから頭にズキズキくる。この反応は日蓮を尊崇するものとしては避けて通れぬところである。しかしみんなに宇宙の真理である法華経に帰依し南無妙法蓮華経と唱題してほしい。さすれば積極的に信念を貫きおおらかに生きることができる。釈尊のように妻子、家を捨てなくても、在家において、出世間できなくても、みんな美しい白い灰になれるの

である。ようやく頭痛が治まってきた。金儲け教団に存在する、これ見よがしに親切の押し売りをする人より、かわると最後までみなくては。木枯らし紋次郎のように「あつしには関わりのないことで」と言いながら、やはり人の不幸を見過ごせない。そんな人を神仏は愛されるのではないだろうか。

真由子先生へ

とりあえず人は必ず死ぬ。あの世には財産は持つていけないという。そんなことより財産に対する思い入れ執着の心を、今、この世で捨てるのが大切だろう。

ある男と彼の自宅で私が持参したジヨ二赤をロックで飲んだ。彼は、最後に私のことを「頭が悪い」と言い放った。私も同感だと言った。神は愚か者に見えると聖書にある。なぜか、それは生きるために計算高くなることを否とし、人を真つ直ぐ愛することを是とされるからである。この世の義理、人情、大切である。利害を超え、人を愛する、こんな心が神の国を招来させるのだろう。

酒席での会話としては先生に対しての想いについてのことにも進展しました。その社会的地位を意識したのかもしれないが「デートしたんか、手を握ったのか」と彼は鼻で笑った。私は「なにもないが、プロポーズした」と奥さんがこさえてくれたナスの味噌漬を箸

でとつて言った。きつと彼は段階を経てA B Cと進んでいくのが男と女だろうと言いたかったであろう。だが私は美しい心にたいする恋を優先し大切にしたい。エロエロではないのである。真由子先生はどんなに性格が悪くてもいい。私をずっと見守っていてくれた。心の美しい女性である。私にとつて何かを発展させるためのドライブも食事も映画も大きな意味はなく、これからも先生を愛し続ける、それだけが事実なのである。

それは母やソチにたいする気持ちと同じで、母は短気で強情で単純なようで、ひとくせある。金の利害を考えるかと思うと神仏、先祖に感謝し、無欲で人に尽くし慈悲深いところもある。貞淑で堅いかと思うと漫才師みたいにサービスピ精神が旺盛で猥雑になったりする。深く考えているようで、面倒臭くなると切り捨てる。献身的で愚痴でもある。だが筋は通す。果たして性格はいいだろうか。私は思いやりというものこそ本当の教養であると思う。確かに母を叩き殺したいと思ったことは何度もある。だが彼女は清廉潔白の人である。姦淫、盗みなどとは最も遠い人だろう。美しい心をもっているのである。私はそんな母が愛しい。

先生にもそんな香りがするのである。正義に満ちた美しいものの、ただそれがもつと近くで輝いてほしい。先生、誘惑の薔薇、甘い酒が欲しいですか。私は何をしてあげられるだろうか。やはり安らかな世界へ誘うだけでしょう。ソチのことだが「自分の始末もできないのに猫を飼うとは」「猫は癒しになるのよ」私はただ目の前の苦しむひとつの命に向き合う

ただけだ。それでいいと思う。私は私である。先生は先生、人のつくった段階、やり方、方法など、クソ食らえ、だ。私は先生を愛している。それだけが真実である。誰にでも言えるのだが、人はいつか負ける。例えば定年がそうかもしれない。この世の地位に固執し価値をおくことは醜いことである。自分の心にゆるぎない愛を確立する。それが神の国の絶対的地位と呼べるのである。

真由子先生へ

私は話していた。同僚という表現でいいのだろうか。非正規、契約社員ということがあったので、「金があつたらどつします、現在一番したいことは」という問いに「酒飲んで寝たい」と笑いながら嘆息し答えた。そうしたら今の境遇になることができた。酒というのは安易ということの誇張表現ではあつたが自由を得たのは間違いなかった。もう一つ聞かれたことがある。「どんな女性が好みけ」私は「刀差して鉄砲かついだ、新島八重みたいな人がいい」と答えた。勇気があつて、自分の意見をちゃんともっていて、優しい、そんな女性がいいと。みんな勘違いして綾瀬はるか、みたいのがいいと言っているのかと思つたかもしれない。そして先生と知り合つた。本当に不思議な因縁だ、まだ一年しか立たないというのにこの様相の変わり具合は。女性の方も早く私の心中のものが実現し成就すれ

ば嬉しい。神は布教しない。それはなぜか、みんなお見通しだからである。風向きが天気予報で分かるように神はどうしてそうなるのかもすべてご存じである。人々は飼われた羊ではなく、神とはもはや自由、平等である。神は契約さえなくされた。しかしその中で自らの良心により神を選択することが大事なのである。神は牧童ならば羊に感謝している。生きとし生けるものがお互い関わり合って生きているのであれば羊もまた保護してくれる。牧童に感謝しなくてはいけないだろう。美しい心とは、そのときそのときの最善を求めようとする心であると思う。哲学すれば頭が痛くなるが答えは良心に見つかる場合が多い。商売は頭も心も肉体も痛い。金と心配を得ることができる。どちらが良いであろうか。

神の国の王はいちばんへりくだったものであると聖書に記されている。私は同じ病室のある人に「わしが王の国ならいかる」とふざけるように言った「あははは——いいかもしれん」と何事もなくそういつてくれた。嬉しかった。私には自信があつた。その人も退院した。ふたりでカラオケを歌った。初めてだと言っていた。喜怒哀楽をあらわすことも止めていたのだろう。何度も「たのしいけ」と私は尋ねた。「たのしい」と答えてくれた。入院中、ベッドに何度も訪ねる私を一度として拒絶したことはなかった。私は恩返しがしたかった。最後、唐突ではあるがイエスも釈迦も「着るもの、食い物、あれこれこだわらずに昨日をふりかえず明日を考えずに気楽に生きていきなさい」といった。心に愛をもつ

て。

真由子先生へ

牧童の保護にたいし羊たちは感謝しなくてはいけない。と記したがこれは決して強制しているわけでも促しているわけでもない。私の意見、願望である。私がなぜ神の契約が個人的なものかというところは宗教全般にいえることで、主体性というものが大事にされるからである。釈尊の弟子がまだ60人ほどだったころ、火の供養を行う有名な行者ウルブエーラカッサパという人物がいた。弟子は500名をこえていた。カッサパは仏陀となのる高慢なやつを懲らしめてやると、いつも脅しつけている大蛇が住む部屋に釈尊を泊めま
す。次の日無残な姿になっているだろうとカッサパが検分に行くと、なんと大蛇は鉄鉢のなかに静かにとぐろを巻いていました。カッサパ、今度は毒サソリの部屋へと釈尊を案内します。その翌日、サソリが死んだように動きません。杖でつつくとカッサパの方へ歯向かってきました。カッサパは言いました「真の仏陀だ。これまでわたしは人並みはずれた能力を身につけることが修行だと思っていました。火を恐れず大蛇を手なずけ、だれよりも強い存在になることをめざしてきました。しかし真の強さとは真の大きさは、この世のすべてを恐れず認めて受け入れる大いなるやさしさであるところと知りました。」
そして「どうかわたしも弟子にしてください、わたしの500人の弟子ともどもあなたに

ついでいきます」と言います。釈尊は「あなたがわたしの弟子になるのは受け入れよう、だがあなたの弟子にはそれぞれの意志がある、あなたが命令して従わせるのはいかなものか」それに対しカッサパは「え、ええ、弟子は師に従うものでしょう」仏陀は「この世の生命は皆平等だ。弟子も師も同じ生命だ。王族も下層の人々も皆同じ一人の人間だ。わたしの弟子になるのなら一人一人の意志によって共に道を歩んでもらいたい」「ああこんな考え方はこれまでになかった」こうして自分の意志を尊重された、カッサパの弟子500人も仏陀に帰依し髪を切りそれまでの祭具を共に川に流してけじめをつけたという。釈迦は人の何倍も、生命について考え、人のあり方について悩み、自らに厳しく他者に優しく生き抜いた人である。そして宇宙の真理の示現、すなわち応身仏なのである。主体的に自由に生きる。大切なことである。

235

真由子先生へ

旧約の神は民を奴隷として扱っています。だからそれを信じるユダヤ教徒は細々した規則を後生大事に遵守することを生きがいにしています。これが新約になると主人と僕、牧童と羊というふうに関係性が変わります。そしてイエスは神とは父と子の間柄であると言います。イエスは晚餐を弟子と共にし、足を洗いあい、互いが教師であり、友人であると証

明されます。後にキリストの一番弟子と言われるようになるペテロも布教の旅先で相手に跪かれ「私も同じ人間である」と起立するようながします。これからわかるように神もきつとそのフレンドリーな関係を愛し、そうなりたいと希求されているのではないでしょう。神は、仏の教えやイエスの十字架、身を捨てての生きとし生けるものへの愛、その重さについての訴えに対し、深くお心に期すものがあつたのではないのでしょうか。私自身何の権威において、そんな大それた、今までの見解と少し離れたことが言えるのか。それは私が聖書ヨハネの手紙にある義人だからです。

聖書に記されている。男と女は親元を離れひとつにならなくてはならない。前に母が愛しいと書いたが「ホンとかよ、邪魔じゃないか」心の声が聞こえてきます。そして真由子先生の笑顔が眼前と胸の中に広がってくるのです。私は人でなしの人非人でしょうか。でもきつと私が先生ともしかして結婚したなら、もう尻にひかれ、なにも言えないでしょう。それが夫婦円満の秘訣でしょう。それには道理の解る先生だからこそ、こう言い切るのです。母を大切にしろと言われればおぶって便所まで連れていきますし、その逆なら叩き殺します。これは言い過ぎ、追放します。悪人かもしれません。

でももし誰も家族が犠牲にならなく真実の愛が存在するのなら、そういう悲劇は起こらないでしょう。私は偽善を嫌うのです。マザコンの裏返しでしょうか。どうも母との関係が中途半端にできない。でも私はうまくやるでしょう、愛する妻を守るため。私ウソをつい

ておりました。聡明な先生とドライブにも出かけたいし、しゃれたお店でお食事もしたい。美しい心のこもった映画も観たい。夢でしょうか。すべては先生のお気持ち次第でしょう。なにか私自身か、またそれ以外に問題があるのでしょうか。ならば神仏のお心のままに。愛がすべてさ、心に誓つよ、愛を込めて強く、強く、本音は忍ぶ恋もつらいなあ。

真由子先生へ

私が今回、再発したとき。一枚の身延山久遠寺の御堂から邪氣がもくもく溢れてくる写真があった。その前年、母は身延参りをし、風呂場で赤い大きな蜘蛛を観たそうだ。その数日後、交差点で信号を無視し衝突事故を起こす。母が今年も安全運転の御札をもらつてきた。退院し、ハンドル横のウインカーのところに掛けておいた。どうも運転席にすわると心地悪い。なにかにぶつかつていけというような衝動がわきあがる。なぜだろう。もしかしたら、このまじないのかかった御札が原因しているのではないか。取り外し、ケースにしまった。なんとモノノケがおちたようにスーと変な強力な衝動はとれていった。もしかしたら日蓮にとって身延は鬼門だったのではないだろうか。水に合わず体を壊している。日蓮宗の立場では日蓮は空海とおなじ求聞持法という密教の修法を満たしその力を得たと言っている。顕教では法華宗がその本来の修行によって僧侶を生み出し日蓮の教えを伝え

ていると言っている。確かに釈尊はまじないを嫌われた。そしてそのことにたいしては心の問題にもあると言っている。想いが互いに清ければ願はかなうはずだ。一般的に仰々しい舞台装置で人を惑わし目と心を狂わせることを否定されたのである。だが因縁にまつわる不可思議なことは認められた。南無妙法蓮華經の意味を正しく継承していくには、私自身が法華宗を自らのものとして受け止め解説してゆくことが本分だと確信しました。釈尊の本意を真実くむもの、それが我が南無妙法蓮華經である。

悪意のない愚かさには腹を立てないと思っているが。R会、「会長がこういった、教会長がこういった、だからそうなのだ」悪魔は良いことを聞いても忘れさせる。結局自分で考えずに他人任せにしているからだ。集金、信者獲得、ノルマもあるのだろう。愚痴を聞いてもらってマインドコントロールされる。教団はそのレゾナートル（存在意義）のために教えを現在にあらうように転換しようとしている。昔からの信者は当惑し、勝手な解釈をし、厚顔無恥をまきちらす。正念場。はじめに組織ありきの体質を変えなければ教えの意義はどんどん地に墮ちるであらう。信者たちはあまりに無節操である。恥ずかしくはないのか。自分の思っていることを語ってほしい。組織なんか糞食らえ。なにかありや、やめりやいいのである。そして新しい道を開けたい。こんなことは言いたくなかった。私とはレベルが違うのである。彼女らは私を婦中支部古里地区の梶原君にしておきたいのだ。この矮小化は罪でもある。腐った妄念を持ったババアども、ある老女、本当はデメーの家、

いや、自分だけが可愛いくせに。虚栄を満たすために私の友まで君づけよばわりにした。この愚かさにはたいし私は怒りをこらえながら受話器を握っていた。そしてただ衰れたと思ったのである。R会の教え、「蒙昧になり世に逆らうな」。イエスは言った「預言者は自分の故郷、郷里では敬意も歓迎も受けないものだ」と。

真由子先生へ

思いやりについて考えてみる。神の国はもはや到来しているのか。思いやり、人徳があるから出世する。人望があるということだ。それも一理あるだろう。だがきつとそこには絶対、損得勘定があるはずだ。営業マンは優秀になればなるほど、自らの親切、思いやりというものが故意なのか計算なのか本心なのか解らなくなるそうである。恋愛についても壁をつくるものがある。相手に気があるなら自分も答えよう。なんか察しあっているようだが卑怯で姑息で臆病で我高いものがそこからは匂ってくる。でもそんなことに長けたやつが役所みたいな組織では上に立つみたいだ。私はその点では受け身ではなくなっている。人にどう思われようが自分の意志を通すだろう。たとえ横槍が入ろうとも愛は貫きとおす。そして誠実義務は果たす。この恋はいつ終わるのだろう。もう始まっていることはわかるが、夢見ている結末はくるのであろうか。コピーライターの見習い時代、経営者から

「一番大事なものはなんだと思う」と聞かれ「思いやりです」と答えた。黙っていたが金、富という返事を期待していたのかも知れない。今思えば仏の教えに、はまっている私が入の欲望をかきたてるための商品の宣伝文などかけるわけはなかったのである。ただ人の心、優しさについては書けそうな気がした。経営者の奥さんがまだ幼い男の子を抱いて「彼が浮気をしている」と、しくしくランチタイムにみんなの前で泣き出した。その後、仕事中、経営者は大型ヨットが欲しいと語った。私は言ったあと、しまったと思ったが「それより自分の嫁はんのこと、考えれ」と言い放ってしまった。私はクビになる運命にさらされた。「あんたのようにスクラブの車とかそういうものばかり追っかけている奴もいる」半ば馬鹿にしたように3ヵ月間の評価を下した。生と死を追いかけて見つける私の視点が解らなかつたのだろう。「給料が安かつたか」思いもよらぬことを言い出した。酒屋があり、机に座つてあれこれ想いながらくだらないことを書いて10万の金をもらえらな十分だつた。私は皆が帰つたあとクビを宣告され、ひとり階段、笑みを浮かべ降りていき赤いホンダのブレリウドで家路に着いた。私も迷つていたといえは迷つていた。栄達も欲しがつたのだらう。だがそんな矛盾した気持ちも整理をつけないければいけない試練が訪れる。それが老人病院での事務員生活だつた。私はいろいろな複合観念とともに心が崩壊し精神病棟に逃げ込むこととなる。確固たるものをつくるための修行は本番に入ろうとしていた。思いやりと金の相関関係どう見出したらよいものやら、私はただ愛を大切にす

だけである。

真由子先生へ

私は対機説法である。

器量の悪い嫁をもらった人には、側に寄り添い暖かい暮らしに祝福を上げてくれるものたちがいることへの幸福を称賛し、理想の妻をもとめる人にはエールを送る。嫉妬を、恐れ無頓着に自らを演ずる人にはもつとごだわりを捨てて自由に生きよと勧める。美人妻をもらい、やがて渡辺淳一の失樂園のような低俗な趣になるのが耐えられない人には孤独死になっても結婚するなど促すだろう。古代ギリシャプロタゴラスを代表とするソフィストたち、「人間は万物の尺度である」誰弁、によつて真理、愛を主観的、相対的にとらえ、不正、無知がひろがり本当の意味での倫理は地に堕ちた。ソクラテスは知行合一という客観性の重視を説いた。そして法に対しては盲目的服従ではなく自発的服従、すなわち何が法であるかを知り、何故に従うべきか知って従うことによつて初めて正義が確立するといっている。尾崎豊は若さの特権としてMCで同様なことを発している。ソクラテスの主張は、明快で説得力に富む実践哲学であつた点において、画期的な哲学であつた。と同時に、当時のアテネ社会が要講した新社会の指導原理となりうるものであつたのである。私

は思う。現代、政界、宗教の世界、何故この法に自発的に服従しなければならぬかということの説明責任が曖昧になり果たされていないのではないのか。なぜ人を殺してはいけないのか。なぜ姦淫をしてはいけないのか。なぜか、それは神が決められたことで本来人間はそういうことができるようには作られていないからだ。屁理屈をこねてもだめだ。悪事、つまり戒を破るのは悪魔に魂を売った人間たちだ。猥雑な世界に淫靡なものを感じて喜びに浸るやつもいるが清廉な美しい世界を愛する人たちもまた多いだろう。イエスが姦淫の罪を定めなかったのは偽善者を諷め、女の命を救うためだった。決して姦淫を認められた訳ではない。

浄土も天国も男性ばかりであるという。このことは女性がいなくなることより、みんなが中性になり性にまつわる行為が存在しなくなることみたいだ。つまらないと思う人もいるかも知れないが、犬の会話で「人間にはなりたくないなあ、小便がなめられなくなるもの」そしてあの世には我々が想像つかない快樂が待っているかもしれないのだ。

どこか征服欲を満たすような暴力的で後ろめたさのある、いやらしい性交為とは違った、清々しい開放的な美しい風と光のような快樂が。私は信じている。みんな信じてほしい、心に愛をもつて。

真由子先生へ

私は頭がいいとか優しいとか言われても嬉しいがらないような人間になることが目標にあった。それは褒められるのを目的になるのはやはり下品であるからだ。確かに侮辱されることは腹立たしい。それは聖書に関したこと、思いやりをもつ人を虐げるようなやつらの哄笑に対してである。最近では自らに対して、いやそれ以上に他人への弱いものいじめ、侮辱に接する度、心から義憤がわいてくる。ただこれはまずい状態だ。

私はかつて不起訴になったが傷害事件を起こしている。運送屋の仕事をしていたときだった。取引先の亭主が従業員を顎でこき使い、自慢話をくだくだきかせ、私には請負仕事以上のことを求め罵声を浴びせかけた。ある日、つかみ合いになり、往来にでて、仕方なく数発殴った、彼は口の中を切り、足もとがふらついていた。

警察が来た。示談金20万を分割で払うことになった。私はまだ責任にこだわりブラックな会社に今後のことを確認していた。「明日があると思わんでくれ」と言い放たれた。ろくすっぽ休日もくれない会社。なぜかほつとした。亭主も会社と縁が切れると困るのだろう。損害賠償は発生しなかった。精神病棟をみた。刑務所の中もよからうと思ったがそうはいかない。しがらみがあり親族に迷惑がかかる。なにより犯罪人となれば病気とは境遇は全然違うだろう。私はそれから暴力は金輪際、封印することにした。つまり口で訴えればいいのである。「口で言うより手の方が速い馬鹿を相手のときじゃない」唄にもある。

イエスは神殿で商売をする人たちをけちらし、神の家を盗賊のすみかにしたと怒りをぶちまける。かなりのフウテンだったのであろう。イエスの言う右の頬を打たれたなら左の頬もだせ、上着をとられたなら下着もだせというのは、愛、寛容というものを人々に望んでのことだと思われるが、そこには神は倍にして報復してくれるだろうという示唆があるのではないだろうか。イエスは無欲で真面目で神を思つての正義感が強く、弱き、を助け、強きを、くじく、義侠心溢れる、きわめて人間臭いひとだったのではないだろうか。少し変わっているが、人の心が解り優しい真実をご存じのかた、そして人々の為に群集の嘲笑のなか、たぶん素っ裸だろう、十字架につけられた。自分に対しての人々の罪への許しを神に乞いながら。そんな力はやはり普通の人には湧いてこない。イエスも私もジーザスコンプレックスと簡単にはかたづけられまい。私は真実の救世主にはまだ遠い。だが自身に義と役目があるようだ。そして本当にイエスは偉くて立派なやつだった。

真由子先生へ

イエスは神のことを想っていた。ただモーゼの戒を人々がアドヒアランスしてくれることを願っていた。そうすることが、人間が幸せになる絶対的なものとみんなに伝えたかったのだ。頑迷なユダヤの律法学者たちは選民思想に基づき、こまごまとした規則をつくり

それをこなすことが神に対する務めであるとした。祭りも生け贄も犠牲も本当に神は求めている。ただ安樂にお互いが尊重しあつて生きていくことを望んでおられるのだ。イエスは民に対し第一に神のことを思えといった。一方、神に対してはひたすらその御心に治うように祈られた。また民への理解もお願ひされた。板ばさみに立たされたが彼は自分の務めを果たした。なぜイエスを裏切つた弟子たちは後に命をかけ布教に歩いたのである。それが一番の奇跡である。何度もうが神は真実、愛するものが一対になり添ひ遂げてほしいと思つておられるのだ。そうでなければ美しい心でいても姦淫という悪にはまり込んでしまうからだ。女性の人に言いたい。どうか自分自身を大事にしてほしい。かつてわすかの金のために苦界に身をおとした人がたくさんいたのだ。愛する人のために身を清く保つてほしい。好きな人と一緒になれるこんな幸福な時代はみんなの労苦でやつと生み出されたのだ。

金、財産、みな幻である。そしていったん手にすればそれを失うことを心配しやきもきすることになる。神とて人は裁きたくはないだろう。だがこの世は、悪魔がはびこっている。どうしても罪を犯してしまうかもしれない。だから受けた負債は許しますから私の与えた負債をお許しください。人の罪を定めませんから私の罪も定めないでくださいと寛容で愛に満ちた祈りが大切となってくるのである。つまり信仰である。何度もうが戒というのは決して人を奴隷のように縛るためにあるのではなく。人のあるべき姿が円滑にまた

本当に慈しみに満ちたものになるように神が赤ん坊に乳をふくませるように与えてくれたものなのである。そしてまた生活も保証してくれるのだ。「聖書が嫌いだ。いつだれが書いた」という人がいた。この問いに対し良い答えが、ある本に記されていた。夏、冷たい水はうまいだろう。だが、誰が取ってきて成分は何が入っていて水温何度だった。そんなことより、うまいかうまくないかが問題だろう。私は幸せになった。みんなにもと思うばかりである。

真由子先生へ

(宗教学者ひろ さちや先生に届けた書簡です。少しお眼を拝借させて下さい)

拝啓

陽春の候、ご清栄のことと存じ奉ります。

わたくし一介の田舎者なればごあいさつもまともに出来かねる所存にございます。

文法、これで合っているのかなあ。

ひろ 先生ごめんなさい。あまのじゃくな先生にどうアプローチすれば記憶に残していただけかなあという思いまして。私はこれでも先生のご著書は、30冊は購入して拝

し、小さな図書館ではひろ さちや執筆の本全部を片っぱしから読みひたりました。おかげで3度目、精神科に統合失調症の悪化で入院いたすことになりました。心配しないでください。私はいま退院して喜びにあふれ静養中です。おかげでと申しましたが、初めての発症のときは先生のことをまだ存じあげなくて仏教を道徳的にとらえ、周りを批判しながら、社会生活でも優等生になろうとし（つまり出世がしたかったのではないか）こうした複合観念があつて人間関係に悩み病に至つたのです。

そして先生の、がんばるな、いい加減、そのまんま、の教えが私の心を一変しました。職場の仲間を怠惰なやつと決めつけ、自分勝手に作成した規範で裁いていました。特にレパートだったかパレートだったかいい加減でごめんなさい、アリの2割は一生懸命働いて後の2割はサボっているという法則の話がありましたね。それはすべて御縁であると。眼からうることはこのことを言うのかくらの感銘を受けました。

私は初めての職場で、徹底的に自らを犠牲とする、企業倫理をたたき込まれました。その欺瞞のからくりを本物の宗教という観点から先生は粉碎してくださつたのです。本当にありがとうございました。私は自分をとり戻したような気がいたしました。

真面目になれ、優しくなれと教えられた教団ともお別れをいたしました。先生のご著書と出会ふきっかけになり法華経の修学に動しんだ事実もありましたが、何者であつても精神的奴隷にはなりたくないと思つたからです。

私は主体的に仏陀の教えに帰依し奉り、聖書、イエスを信じたのです。

そのあとまた啓示を受けたような再入院です。先生はよくご自分をうどん屋の釜にたとえられユウばかりですとおっしゃっていましたが、私は社会の中で実践してしまったのですね。

サマセットモームの人間の絆の話も一路を得ました。人生に意味がないからこそ厳しい運命にも対峙しても楽になれる。人間は自分らしく好きに生きていい、これは凄い哲学です。ひきこもり、ニート、恋愛関係妄想の寅さんみたいな私、これらある種気兼ねしながら、存在によって世間を痛烈に批判している者たちにとって本当に朗報になりました。

でもね、先生、認知症の話はちよつという実情はちがいますよ。なにも解らなくなるといふよりは、快、不快も感じると思うし、どこか客観する自分が残っています。私も病を得てそうでした。

先生は法然上人の浄土宗を大切にされ南無阿弥陀仏の教えに傾注されておられますが、私の先祖は法華宗を広めるため京の都から日隆という名のお坊様と共にこの地にやってきた侍だったそうです。

ですから因縁からも日蓮上人を信じます。私が思うのは、彼は決して仏の教えで人を金持ちにしてやろうなどと考えたのではなく南無妙法蓮華經によって、その人ひとりひとりが仏の子として三世に渡る起承転結を安楽に幸せにすることができるよう、勧められたのだ

と思います。

親鸞上人は関東からわざわざ訪ねてきた信者たちに南都に行けとおっしゃった。命がけで来た彼らに対しあまりにも非情ではないでしょうか。

日蓮上人は身延において訪ねてきた信者たちにたいし懇切丁寧に解説し、みんなに文をしたためられた。そして供養される米、野菜に本当に感謝されたのであります。先生も書かれていますよね。竜ノ口の法難の際の四条金吾の厚情にたいし、日蓮上人は彼が地獄にいるのなら、日蓮も釈尊も地獄にあるだろうとおっしゃった。日蓮上人は心のあたたかい方なですね。

私は宮澤賢治の気持ちがよく解るのです。確かに彼は周りが見えなくなり献身的に農民に尽くし亡くなりますがそれは菩薩として幸せな最期を迎えたのです。それは先生が一番ご存じだと思います。でも先生自分を大事にするとはどういうことでしょう。信念に生きるということではないでしょうか。みんなが笑って暮らせる世界の現出には仏の教えが不可欠だと思うのです。

出世間する。それならば、狂う。あとは死ねばいいのです。

先生がおっしゃるように仏教の原理は説かなくてはならないのです。仏教の精神的高揚性が心身共にみんなの幸福につながるということ、私は捨て切れないのです。

そして私は一休が大嫌いなのです。後小松天皇のご落胤で生活の心配なく淫欲にひたり老

いてからも若い眼のみえない森女を好き勝手にもてあそぶ、禪がどうだ、公案がどうだ、風狂かなんか知らないがやっていることは工口隠居といっしょです。私は真つ直ぐにみているだけです。私の勉強不足か真面目すぎると言われそうですが坊主は坊主らしくしろといいたい。

先生書きなぐりみたいな書簡になって申しわけありません。尊敬しております。こんなにインスパイアされたのは尾崎豊とひろ さちやだけ。突然の手紙にて甚だ恐縮ではあります。先生の寿命が尽きぬうちに私の感謝とエールの気持ちを伝えたくてワープロを叩きました。自筆のほうが失礼にあたらないうのかなあとも思いましたが、私、乱筆極まりないので最近やつと慣れた文明の利器を使用致しました。先生本当にありがとうございます。真の仏教は自分を大切にすること。救われました。そして大乘の教えとは皆で成仏するもの。南無妙法蓮華経。またお便りするかもしれません。そのときは宜しくお願い申し上げます。ご高齢にて、忙しいのではなく、スケジュールが過密な先生、どうかお体を大切に。本当に幸福になりました。では。

敬具

追伸 だいぶ失礼な手紙だなあ、敬愛する大先生つかまえて

真由子先生への想いに決着がついた。ふられた。
みなさん当然の結果だと思うでしょ。そうでしょうね。でもこの一年程、本当に楽しかった。

自分の中の起承転結が最後、なんだか私を事務的な告白に導いてくれた。
私は後悔していない。

これから私の治療は続くであろう。

今まで幾枚もの書簡を提出してきたが、個人的にはなんの発展もなかった。

少し恨み言が入ったが、早く気づかぬことによって私の思想をまとめることができた。

私は本当に強がりだなあ。

酒を買おうと思ったが、わずか千五百円の金が惜しくなった。

もし彼女とのデートになるのなら持ち金、全部はたいてもかまわないと思っていたのに。
せこい男への逆もどりである。

聖書は「これでよかったのだ、だれも恨むな」と出てくる。

まあ長々書いてもしかたがない。

サタンも嬉しそうだな。

だが、今までのお前のおかげでだいぶ強くなれたぜ。

これであちやんも叩き殺さなくてすみそうだ。よかった。

明日はどこへ行こう。と思ったがガソリン172円どこへ行かれそうもない。

スタンドの専務に、ゴジラやっていると衛星放送の話をした。前にゴジラのことを話題にしていたからだ。

まあいいか、友人のドアイさんは何も言わなかった。いい男になった。

ふたたび尾崎豊のベストCDを聴いた。

もつと感傷的になるかと思ったがあまりならない。

尾崎には裏切りというフレーズが多いけれど始めから情けなく失恋するコミカルなうたはないからだ。

なんとか字数を増やそうと企てるが面倒臭い。

私は袖にされました。

これも神仏の計らい。ありがたく受ける所存でございます。

完

真由子先生へ

先生が大きな病院の御令嬢だと今日始めて聞かされました。

私なぞが気安く求婚など口にするのもおかしいかぎりでした。

実はもうこんなことは止めようと思っていました。

でも診察室の入口、新しく掛けられた名札のお写真があまりにもさびしそうにみえたもので。私のせいかそうでなくても、力づけてあげたいと思いました。

問診中、私の本心を探るという大変ですが、見透かそうとする瞳に悲しくなりました。

今まで差上げた書簡ではいろいろな見方、価値観、それと悪意、そんなこんなが、人間にはあるという一般論を申し上げた次第です。

無論、私は神を愛し、隣人を愛することを是といたしております。

病院をこれから経営されていくとしたら、それは大変なご苦労だと思います。私、ひなびたこの一軒家さえ始末するとなれば大騒動になると思ひ息が苦しくなります。

先生どうかご自分を大切にされ和顔愛語でご活躍されることを願ってやみません。上から目線の文様だと御立腹されてもかまいません。それが先生の元気の源になるのなら。どうやら私はまだ先生を愛しているみたいです。未練たらしい情けない男とお笑ください。

本当に私は真つ正直に生きてきたのです。確かに若い頃はつまらないハメもはずしました。反省しても取り返しはつかないでしょう。

でもすべて先生という海へ流れ込むための必然という河だったのです。もうやめときます。この書簡にはなんの目標も目的もありません。

どうかどうか幸せになってください。祈っております。

コロンブスというカレー屋の店長、林さんという方が私のいろいろな発信の受け手になってくださいました。先生にも今回だけついでは失礼なのですが3部お入れしときます。ぜひ読んでみてください。

自信作とはいきませんが私にすればこんなものでしょう。

先生、私の診察の際はどうかリラックスされて楽にやってください。

私は何も求めませんから心配、御無用。

まずは人を信じることです。信じてみてください。

では

太陽の破片、
一枚のDVDが手に入りました。
不思議です。

いやいつもいつているように偶然は必然。なにかの導きでしょう。

愛が受け入れられない現実への失望、
なぜか悲しく見える君、

そして彼女のもつ外的条件への欲望を意識する自分。

それが自分の良心を見出せなくなる、錯覚を起こさせる。

愛しあえるかもという予感も悲しい歌、現実にも崩されて行く。

でも君は本当にいいのかい。

何処へ向かうの、僕の手も握らずに

真実に目をそむけなにかに怯えるのなら

自由、平和、そして愛をどうやって示すのか。

きつと無理だろう。

この現実では、絶望との戦いは続いた。

僕はただ清らかな愛を信じていた。

君の本心はどこ、

涙は一瞬のこと、

だけど君をもう欲望のはてにただ奪われたくはない。

君を邪悪な繁雑さから守りたい。悲しみがこぼれぬよう。

そしてあわれみが悲しみをこえ希望のうちに生まれるよう。

もし君がこの現実という暗闇に光を求めるなら

僕の頬を太陽の破片という嬉し涙がつたうだろう

昨晚眠れずに

昨晚眠れずに

尾崎豊の曲

自分なりにその詩を解釈したものです。

前略

石田のお母さんへ

この度は病を得られてご苦労されておられるとお察し申し上げます。

堅苦しい挨拶はこのくらいにして、私が今思っていることを率直にお伝えいたします。少し失礼だと感じられても、愛する真子、千華に免じてお許しください。表現、これでいいかなあ。いきなりではありません。

母から断片的に伝わってきたものからですが、お母さんは早くに亡くなったお子さんのことで大変、悲しい想いをされたと聞いております。だれにも解ってもらえないと辛い想いをされてこれたと。そんなことはありません。あの優しいお父さんは確実に苦しんでおられます。辛すぎて言葉にできないのでしょうか。こんなことはご夫婦の間のことです。私とやかく言わなくても互いにご理解されていることなのかもしれません。

釈尊ご在世のころキサ、ゴタミーという貧しい痩せこけた女性がいました。夫にも死に別れ、最後に残った幼子も亡くなります。彼女は気がふれたようになり子供を生き返してくれとさまよい歩きます。そしてお釈迦様と出会います。「だれも死人を出したことのない家

からけしの種をもらってきなさい。そうすればその子は生き返る」それを信じた彼女は端から端まで家を訪ね歩きます。でも死人を出したことのない家は一軒もありませんでした。彼女は、人はみんな死ぬ、諸行無常をさと、わが子を野辺に送り出しました。

でもね、もうひとつ意味があります。死んだら価値がなくなるといのは大きな間違いです。それは機能価値、商品価値に毒されたものの見方です。だからお母さんは堂々と死んだ子の歳を数えればいいのです。いつまでも忘れないそれでもいいのです。そして、亡くなったお父さんはきつと願っているでしょう。お父さんとお母さんが和して楽しく生きていけるのを。

ヤスヒサさんは今、会社でも家でもリーダーシップをとらなければいけないという立場に對しての責任感でいっぱいなのでしょう。痛切に感じておられると思います。「ありがとうたのむちゃ」と一声かけてあげて下さい。真子、千華にも父親にねぎらいのお茶を一服しんずる、そんな思いやりをもった人になってほしいです。

家族がうまくいく方法があります。南無阿弥陀仏の世界、お互い悪人同士だから許し合う世界。死んだあと極楽浄土で幸せになろうというもの。

南無妙法蓮華經、お互い善人だから感謝し合う世界。どちらが正しいとは申しませんが、私は後者を勧めます。諦めてはいけません。この世を寂光土（仏の世界）にしなければなりません。よくないのは正しい人ばかりで自分の言い分ばかり通そうとする、そうすると

地獄がうまれます。

聖書のなかにはイエスは火を投げ込みに来た、家族をバラバラにするため、火がすでに燃えてればよかったとあります。これはどういうことかと。つまり真実の愛の火種を投げ入れにきたと。日蓮が説くのと同じく、お互い慈しみあい、思いやり、本当の愛に目覚め、善人同士として感謝しあう家族をつくらねばなりません。そうすればお金やいろんな問題は解決し消えて行くはずです。私は思います。富、名誉より愛が一番大切だと。誰も犠牲にならない個々が大切にされる家族、そして助け合う。

人はだれでも生まれてから電車に乗っているようなものだと思います。そして死ぬときは「どうもありがとうございました。私はこれにて失礼いたします。ありがとう」と降ります。するとそこには、ほとけ号という超豪華な列車が待っておりお浄土へと連れて行ってくれるのです。実はある浄土系の学者の受け売りですが。(笑)

この世を明るく素直に温かく生きたお母さんならお浄土で先に亡くなったお子さんにも逢え、また成仏なさるでしょう。縁起でもない叱らないで下さいね。だれも生老病死は避けて通れぬものです。生まれたばかりの赤ん坊にもいえることなのです。日々安らかに楽しく暮らされることを願ってやみません。10年、20年、30年、命は続きます。寿命と病は別ものです。人の死期は神仏の御心にあります。

心おきなく良きことを心に描いて下さい。私からのお願いです。無理をしないでまた元気

なときは元気な笑顔をお見せください。お母さんの安らかなることを衷心より祈っております。もしかしたら大変失礼な文様だと思われるかもしれませんがこれも親しみまぎれのこととお許し下されば本当に嬉しく感謝いたします。また寄らせてくださいね。ソチも待っています。いつでも時間があれば遊びに来て下さい。では――

草々

義人

平成26年8月17日ご逝去

享年78

ごころよりご冥福をお祈りいたします

真由子先生へ

哲学の巫女とよばれた池田晶子さんのことを読売新聞解説委員の橋本五郎さんが回想していた。私は「無敵のソクラテス」を入院中に拝読しただけだ。

彼女が腎臓ガンでもうこの世にいないこともそのとき知った。生前から死ぬのは少しも怖くないと言っていたそうである。それよりつまらない生をおくることのほうが嫌だと。つまらない生とはどういうことだろうか。

彼女の著作のなかにはなるほどなあと思うこともいくつかはあつたのだが、皇室を揶揄し、イエス、釈迦を自分のかたにはめ綾小化していることは否めず本質的な利他の精神、愛に欠けていたような気がしてならない。

誰弁、ディベートそんなことは結構だ。単なる自分の好き嫌いで哲学を振り回し宗教の領域まで土足で踏み込まれたようで気分が悪かったぜ。

末期に何度もかわつてくれた仏教者に生とは執着ではなく意志だったのですねと語ったそうだ。

確かに彼女のスタンス「老人の叡知と思いやりの深さ」「流行に流される馬鹿さ加減」「短絡的な性徳への失笑」これらはよくわかるが、つまらない生とはどういうものか。

そうか忘れていた、彼女は自分で考えなきゃだめだと言っていたなあ。つまり真の意味での主体性がないと生きていることは楽しくないといったのかかもしれない。

彼女は立花隆を批判して死後の世界などないと斬って捨てていたが、現実はこの世界があるように無間地獄があるかもしれないのだ。何十億年のあいだたったひとりで孤独に耐えねばならないそこまで考えていたのだろうか。

写真を見た感じ容姿端麗で才媛みたいだがまわりに男をはべらせていたのであろうか。それですこしわがままになったのでは。

死ぬのが怖くないなんて広言するものではない。怖い人たちはどうすればいいのだ。でも私も言う、死ぬことは怖くない。なぜなら神仏が我が心を見通し幸福な世界へいざなってくれるからだ。確かに幸福とは永遠の無かもしれないが。

死者を鞭打つつもりは毛頭ないが単純な頭の善し悪しと本物の宗教がめざす境地とは全く関係のないことなのである。ごさかしいぞ。でも彼女も分かっていたはずだ。本当に大切なのは真摯に生きた人々の涙と汗であると。ご冥福をお祈り致します。

真由子先生へ

少し思ったことを羅列してみます。情に篤く、情に流されない。難しいところだなあ。

宗教が洗脳ならマスコミ、とくにCMなんか洗脳以外のなにものでもない。洗脳から離れるには情報を遮断するしかない、インターネットなんか知らなくても生きているじゃない

か。もつとも必要にかられて仕方なく思うようになり、便利なら考えてもいい、という時期がくるかも知れない。ツイッターかブログを勧めてくれたひともいたが。中傷誹謗に対し言い返したくなるのではないかとアドバイスをくれた人がいた。私の原稿を査定し上梓に価するかどうかの判断を、ある出版社の代表に依頼したのだが、二カ月も預かっておいたあげく、感想と結果は「読むのに苦労しました。小説スタイルを従来の約束を踏まえ、新しいかたちへの試みを模索しているのはわかるが実を結んでいない、精進してくれ」というものだった。実はある時期から私はこの人物への期待がなくなり疑念がうまれた。2度目のどうなのかとTELをしたときのことであつた。半分、馬鹿にして笑いながら「まだ積んである」と言つた。これはよくない兆候だと感じた。私は一言いつてやりたかつた「これは靈感を受けて自動書紀されたもので神聖なものである。神の言葉であつた小説とおなじ次元のものではない。あなたには基礎知識、行間からくみとる読解力、想像力、人間として大事ななにかが欠けている。あなたの人生経験は知らないが、もしかしたら本当に欠陥入問かもしれない」かなりきついことを返答として書いて送ってしまったが、小説に法則などがあるのを初めて知つた次第だ。ひとつの実験的なものと誤解したのだろう。小さい会社だから本を生み出し商業ベースにのせるといふことは博打の部分もあるのだろうか。私の方も自費で刊行するとなるとお気楽ではない。徒然に書き溜めたもの、プライバシーに関する部分などは原文の意味、趣旨、イメージが尊重される範囲で推

敲するのはもちろん必要になってくるとは思う。ただこの拙文たちのコンセプトとして宗教面を強調するのか、それよりも障害者や立場の弱い人たちの持つ、さまざまな問題を今の流行のようにコミカルにまたセンチメンタルに描くことを優先させていけばいいのか。また映画、時事にかんする独特なというか私を受け、感じ、訴えたいことを吐いてゆけばいいのだろうか。いかん、いかん。こんなことを考えるのも、やがて生活苦が自分を引き裂くのではと頭の片隅に浮かぶからだ。聖書はいう「おまえを黄泉の国においとくことはしない」私は信じる。すべてをお任せして。二つのことを投げ出してみる。ひとつは、釈尊は乱れた性愛、饗宴にむなしさと醜さを感じられたのである。人々の純愛にはなにもおとしやらなかった。もうひとつは「愛はその愛のために捨てるものの価値によって、計ることができる」、私は愛のために捨てる一番価値があるのは自己愛だと思う。尾崎の「街角の風の中で」という曲のなかで、「君は生活に奪われて行く愛よりも幸せになっただろう」というフレーズがある。少し悲しいけどしあわせなら微笑んであげなくちゃね。

義人

正義に 病む男

R 2 年 7 月
義人

「お前へ」

出世してみたいだな。部長級か、おめでとう。俺には皆目見当もつかない世界だ。大変だと思う。体に気を付け無理せず任を果たされるよう願います。また祈っています。

□□ナが流行っている時期だ、衛生関係なども大変だろう。偉くなつたお前は嫌なことも言わなければならないのでは。お前の一番苦手なことだな。あまり根を詰めずにやってくれとしか言えないが。またあいつと三人で飲みに行こう。俺はお前に仇なすことはしない。それよりあいつのヘイトスピーチが要注意だ。脇は締めておかないと。こう言うとお前は疑心暗鬼になって弱気になる。大丈夫、堂々と、受け身は卒業だ。何事も反面教師、社会勉強で済ます屈託のない若い責任者もいるのだ。そして、上り詰めながらも和を尊ぶ、お前を善良と信じる。でも神経は悲鳴を上げているだろう。この先、贅沢せず食っていけるだけの小金を貯めたのなら、「いつ何時でも離職届を突き出す」と腹を括ることだな。逆に開き直りいい仕事ができるはずだ。お前の信用にこの割り切りは貢献するだろう。正直、お前の体調を思うと、ここらが潮時だと俺は思う。これ以上過重な責任はストレスを貯め、真面目に体に良くない。役所に残るなら、一旦、役職を離れ、少し間をおいてから比較的ゆるいところへ天下りした方がよい。責任があまりないところが好い。人目より自分自身を大切にすることだ。しかしお前は公僕に徹し、よく頑張った、緊張と憔悴

に満ちた現場の雰囲気がよく判る。お前の行きつけのスナックの女たち、日銭を稼ぐためイヤな客相手に愛想を振っている。お前の寛容性に甘え、皮肉をぶつける。それは彼女らの本音だ。やつかみ、半分馬鹿にしている。お前と二人さして飲みたい。あいつを交えると、落ちていて、現在の心境が語れない。お前と、アカデミック（学術的）でポリテカル（政策的）な話したい気持ちもある。ついていけるか分からぬが。専門家であるお前が詳しいのが当たり前だな。俺の足りないところを指南してほしい。そんな義理はないか。お前は昔から知識をひけらかすことなどなかったからな。真面目な話だ。メール何通も送ってすまなかった。俺は、保身に走るお前をけん制していたのだよ。私怨はない。守秘義務に反しない程度で、行政サイドから見ると世間を知りたい。興味本位から、広い視野で社会を見てみたいのだ。俺には最早、愚痴も自慢もない。生き方は様々だ。役人が高級だと思っているのは公務員だけだ。なぜか人情を知らぬ奴等が多い。会席でお前に語りたかったことの要約をメールで送った。問題意識、大事だ。夜遅く悪かった。ただここで言っておきたいことがある。俺は昔の俺とは違う。お前も成長しただろう。しかし価値観が、狭い世間の標準だけに固定され、人を慮れぬとき、善い人間からは外れ、魂の死が待つのだよ。かつてお前を侮辱し、ある意味、服従を強いた俺、恨みがあるかもしれない。俺は友情が正常に活きるには、二人の間に20年程の冷却期間が必要だと考えた。お前を夢に見、何度もテレしようと思った。そして真実、思いやる関係へと、

お前からの連絡を待っていた。お前の遠慮はいつも薄情に映る。結局、お前に対する俺の罪は許されたのか。親しき友情と悪辣な罪、どちらが主流だ。俺は本当にお前にとつて極悪人だったのか。温かい眼差しだけは忘れないでくれ。酒の入った会席だと思ってくれ。お前、実は意外とブレッシャーに強い。案外、責任が重くとも出世を喜んでいるかもしれない。それもありだ。悩んだら一人で抱き込まず、周りを巻き込め。森友学園の役人みたいになるなよ。今日、最後のメールだ。苦痛に耐えられなくなったら、みじめでもみつともなくてもいい。主体的に進退を決断されよ。責任など糞くらえ。他に誰か替わりはいら。そして成功はいつもどこか下品な臭いがする。すべてに素直に愛を持って応えてくれ。悪意、悪感情には親密感で臨め。だめなら、ためらわず強権を揮え。基本、「仕事に埋没」はないのだよ。バイト先のケーキ屋さんは楽しかったな。奔放な俺を殺したいと思ひ詰めた森田女史、間違っているよ。百貨店の下着売り場にいたお前のお母さんなら解ってくれる。イエスは規則を重んじる人たちを責める。愛を蔑ろにするからだ。役人、お前の職務がまさにそれだ。少しいい、学生時代の俺を思い出してくれ。自由奔放つてやつを。正しいかではなく、自分勝手に善良な感情に従うのは自然でストレスにならない。なぜ仕事を特別に規定し、職務、職場の苦痛を肯定するのか。そこには怠惰、過酷と区分けし、人々を引きずりまわすサタンがいる。俺は闘っている。これで結構しんどいぞ。期待する人間もいてリングから降りられない。優しさとユーモアだけでは生きていけ

ない現実がある。桜木町の年寄ママの心底を知れよ。俺はお前を苦しめているか、癒しているか。エールを送っているつもりが、思わぬ負の感情を起こさせているか。つまり怒り。少し心配になった。また随意にメールください。お前は利潤の盗み合いという、残酷な地獄は経験していない。談合に参加しないと生きていけない人たちもたくさんいる。自分の運の良さとコネをつけてくれた母親に感謝だな。ママはお前に感謝していると思う。カネはため込まず部下にばらまけ。株が上がる。カネは1日3食分あればいい。ママの店の若い女は良い奴だぞ、男気がある。政務活動費、不正受給に職務は関係してくるのか。清廉さを見込まれたのか、おとなしいお前を矛先も鈍くて甘く操作しやすいと、誰かの意図が働いたのか。男を見せたいところだが馬鹿らしい狂言には付き合っとな。足元に「怠慢だ」と火がつかない程度に楽な気持ちで粛々と役目を果たせ。お前を批判し、そして非難したメールをあいつに送った。お前はすでに知っているかもしれない。俺には保身、責任に拘る、お前の姿はあまりにも情けなく醜く映った。だから、けん制した。人情はどこへ行った。自己判断しろ、愛を失うな。とはいえ、お前は公僕の長だからな。不祥事があれば役人全体の信用にかかわる。とすれば、考えれば考えるほど俺よりあいつの方が危険人物だ。煩惱深く達観していない。特にアルコールが入ると無防備な俗物に変わる。俺は神の目でお前たちを裁く。お前らは長く、俺にそっぽを向き、善きにつけ悪いにつけ甘い汁を吸ってきた。しかし俺はお前らに神の国で永遠の命を得てほし

い。要件を満たしてほしい。欲に膨れた俗物と、規範ばかりを重視、敬意が欲しい情けないバリサイ人、お前たちだ。神は目をくらませ心を頑なにした。そこで葛藤し愛を見出したものに神の義はダイレクトに伝わる。役人の世界。それは一口に言えば妬みの世界だ。お前には染まつてはしくなかつた。この時期、何らかの思惑があるなら乗せられるなよ。逃げ出せよ。若く実務経験のあるやつが仕事の大勢をこなす。お前は数字を見てハンを押すだけかもしれない。敵を作らず、妬みに耐え、脇を締め保身に走る。実力、お前は今の経験、経緯から会計に精通しているのかも知れない。高校時代、宮田君のコメント。ラクビー部。「苦しいですけど楽しいです」笑つたな。お前は同窓生の誇りだ。後輩たちもまぶしい。人の痛みの解るお前だからこそ周りの人望がある。ここまでよく頑張つたな。人に言えぬ辛いこともあつたらう。媚ではない。お前の変わらぬ善良さを信じてい俺がいる。ただ体を労わってください。祈ります。正義とは潔癖になるとき己に固執し、事案より目をそらし、他に責任を被せ、自らの罪を否定する。贖罪の為、十字架につけられたイエス。復活し強く愛を訴えます。心の眼大切に。俺が言いたいのは、あまりにもお前は自己防衛が強くないか。そのうちお前は、縁内障で失つた片目の視力だけではなくもう片方も失うかもしれない。旧友に対しあまりにも非情であるからだ。神を敵に回す。俺は君に金のむしんするつもりもなく、物理的にあいつと違い離れてもない。なぜ会おうとしない。俺は近所では優等生の障害者だ。ことは君の差別に他ならぬ

い。本当に周到だな。都合のいい奴とは付き合うが、貧乏人には容赦ない侮蔑か。仇為すつもりもなく君の回心も迫れない俺だが、俺と付き合い、問題が起これば、引責で人に迷惑をかけるからか。俺は馬鹿だから、どんな事件に巻き込まれるやら心配か。愚痴だと思ってくれ。お前の体のことを本当に心配している。視力の方も。俺は非道だった。だがかつての俺の奔放さの一片でも思い出し過剰な保身を自省してほしい。俺はなんだかんだと言っても善良なお前が好きだ。お前に会いたい。そしてお前に裸の王様になってほしくないのだ。いつもお前は誠実な雰囲気を出す。だが桜木町の年配のママは見抜く。本当に寂しいぜ。義理も人情も邪魔になる世界か。カネと名誉とヘルシー志向。愛だけは失わないでほしい。これを受け犬の遠吠えと思うならお前は樂園には入れない。多分、あいつは可哀そうだがコロナでダメージを受けている。俺はルンペンだが平和に暮らしている。彼岸から墓参りを欠かさず、地藏尊に花を手向けている。何か感じてくれ、目に見えない世界を。以上だ。深夜、悪かった。あいつは地獄だ。お前も偉くなると責任に縛られる。世は利か義か。俺には愛しかない。ここらで心底、利他の精神で生きていく、俺以外は気配りの達者なお前ぐらいだろう。公僕の面目躍如。その点は認める。今、俺はなんの軋轢もなく暮らしている。お前もいつも素直で正直に過ごすことだ。慎重すぎるのは、不愉快を生み、他を傷つける。大丈夫。また会おう。俺の熱き思いを感じてくれ。俺は何もかも捨ててきた。愛猫だけが気にかかる。そして安楽な境地で遊戯してい

る、独りで。元気でいて下さい。サイトの更新をいたしました。よろしく願い申し上げます。俺の知り合いで大腸がんを患っている男がいる。神岡に住んでいてカネを送った。お前の貯金に比べれば屁みたいなものだ。俺は嬉しい。頼られたことが。お前ならどう対処するか。カネの返済は信義に委ねた。そんなことはどうでもよい。困窮する友に焦土への一滴の水、少しでも手助けできて俺は嬉しい。俺はこれからもそんな生き方をしたい。理解できるか。お前、大丈夫か。市民病院のコロナ感染に関し厚生部長が見解を。お前の重責を思う。俺は好い奴だぞ。妬みが全くない。ただ心配という菩薩行を祈りと共にする。守秘義務、大変だな。かみさんにも言えないか。俺はお前からの返信はあきらめた。これからも俺のメールだけは送っていくつもりだ。会議、仲良く意見をまとめる。白熱して正義を見出す。お前はどちらを指す。また軽い返事でいいからコメントください。あてにせず待っています。市民病院の件は県の厚生部長か。今日の読売新聞の欄に県の対策、厚生部長を中心に実施するとあったからだ。お前もかなり厳しい状況だな。市長もからいだろう。自愛を祈る。お前は5月で60歳になるな、役職定年制は無いのか。当地の新型コロナ担当者には悪いが、今回、行政長でなくてよかったな。晴れて二人で語れるのを心待ちにしている。仕事大変だ。ご自愛を。負け犬の遠吠えではない。国民栄誉賞などはいらない。どんな有名人より縁ある目の前の人物との懇親が最高の幸せだ。どうして生きているのか。目の前の人に訊ねる、それがすべてさ。

市の財政に関しての長、かなりの重責だろう。俺はひたすらお前の体調を案じる。事務屋の辛さ、俺はよく理解している。とにかく無理だけはするなよ。常に謙虚で、上司の顔色をうかがい、部下を気遣い、家族も大切に。組織のはざままで苦悶する。公務員の鑑。いずれにせよ俺には真似できぬ。責任につぶされないことを祈る。お前、いろいろ大変かもしれないが、なるようにしかならない。病原菌にも仏性がある。目に見えない世界を信じて。俺の禍に耐えた君だもの、屁でもないはずだ。お前に忍耐力はある。当事者すべてをフラットにするほど。しかしひびくみはくる。世間的に君はうまく時と場所にマッチした。つまり天の時、地の利、人の和に適った。だが道のりは終えたわけではない。最後まで誠実な趣で君を生きよ。それしか君にはない。俺はこの世では生きていけない命運にあった。自分で言うのもなんだが世間に対し純粹で正直すぎる。あいつも商売、上がり下がり予想できたはずだ。カネ、名譽に走る限り人は苦しむ。そして今、俺は誰より幸せである。お前、仕事が楽しいだけでは人生が見えてない。査定し査定される。のんびり屋には辛い。歌と酒があればいい、寝そべり。神は真の平和を与えるため、愛を鼓舞する。新型コロナは静かさの前の大きな嵐である。俺の心には比較も差別もない。例えばアスリート、己を誇示するもの達。俺には関係ない。生きる勇氣なら、足場を組み、働く、専職や板金工の若者たち、命を懸け荒海に乗り出す漁師さんたちから確実に頂ける。わざわざカネを払って非生産的なスポーツ観戦などに興じなくてもいい。目的と

して、競技者に対するヘイトスピーチ。つまり憂さ晴らし。悪趣味で下品、ストレス解消、それならありなのか。安価なサーカス、動物園見学よりも、罵倒がある競技観戦はやはりかなり悪質なものと言える。お前の重責を思うと、気が遠くなる。苦言も吐いたが、きつとお前は性格からいつて平和を望んでいるだけなのだろう。誰より俺は分かっている。返信は、またいつかでいい。新型コロナは6日の緊急事態宣言が明けるころから次第に収束へと向かう。だが来年、悪の象徴オリンピックが中止にならねば、もっと恐い天罰は下る。新型コロナは前兆にすぎない。俺にとつて力ネは発信の為の軍資金にすぎない。愛や夢のために、体制に抗い、打ちひしがれたものたちの諦観した呼び声。俺は力ネを最大限に生かすつもりだ。俺の闘いは酒を飲み、歌い寝そべることだ。愛をもつてドストエフスキー作「罪と罰」ソーニヤの如く清き遊女を求む。新型コロナでしわ寄せが弱者に來ている。まだ時は來ていない。イエスを信じ艱難に耐えたものは、必ず、永遠の命を得る。神の試しであり、悪魔の禍でもある。うろたえてはいけない。お前、素直に思う。心無い言葉でなじつて悪かった。わしは言う。生老病死がある限り、生存競争が続く。夢という欲望を捨てるのが大事。正論である。日々の生活に感謝。お前と同様の人間がすべてなら世界は劇的に変わる。自身でそう言いきつていたな。そうかも。自由、平和、愛、自らを殺してきたかのように見えるお前は、最後までそのままのお前であつてほしい。多分、すべてに対し平安なお前の姿が、心より皆から望まれ、また人々の生きる

べき姿、真実なのであろう。新型コロナ対策大変だろう。頑張れとは言わない。淡々と職責をこなすことだ。余計な神経は使うな。中小企業への融資、バラマケ、バラマケ。お前の手当ては縮小されるのか。エラッさんもかなわんな。でも元々がかいから大丈夫か。俺はお前の重荷にはなりたくない。きつとお前は昔と変わらぬお前なのだろうな。俺の疑念からくる憶測は見当違いなのだろう。俺は孤独に逃げこめる自由で静か幸せな身分だ。社会の信用からは遠く離れるが。感謝しなくて。思いやり、配慮という正義に病むことの無きよう。お前の善良さは俺が一番、知り、分っている。自律から自由がある。いまではゴマすりでは負けないぞ。白旗は先にあげることにしている。ご自愛ください。とにかくお前は人の表情から思いを察する能力はずば抜けている。また慎重に身を守る。一般的には役人根性は時代が過ぎても変わっていないのかも。お前は代償に自由を捨てたのか。新型コロナへの対応。役所を未曾有の危機が襲っている。縦割り、もめている暇はない。お前はどんな重い責務を背負わされているか。還暦迄とりあえずしよ。お前よ、忙しいとは思うがメールを読んでいるかは、知らせてほしい。ガンバレよ。しんどかったら逃げよ。かつての俺のような犠牲にだけはなるな。軽い返信待っています。では。役所は定年で退職したのか、返事も送れないか。付き合う人間を良く踏まえるのだな。黒川検事長みたいにならないように。お前は過去の俺をどうしても許せないみたいだな。そして役人は役人か。さらばだ。互いに違う世界で頑張ろう。元気で。」

つと親友だと信じていた男」より。

「エホバの証人、山口くんへ」

日蓮とイエスの結びつき。日蓮とエホバと義人は当体（イコール）。イエスはエホバである義人と一体になる。日蓮でもある義人を介在してイエスは日蓮と結びつくのだ。イエスと日蓮は悪魔相手に命懸けで辻説法を、まずは独りで行った。歴史上二人の勇氣は突出している。彼らほど真の正義を掲げたものは他にいない。サタン、デビル、マール、悪魔は古今東西存在する。向き合った聖人たち。わが父が一番に来る。体制に挑み羞恥心と欲望に打ち勝ち、勇氣と愛を示し死んでいった。羞恥心を克服するには人の目、言葉に無頓着になることだ。サタンの体制に打ちのめされて酔いつぶれる。イエスはその真意を解っている。愛があるから辛いのだ。聖書は、私が日蓮であることを保証する。またエホバと聖合するイエスがある。彼は勇躍し、日蓮として南無妙法蓮華經を大音声。「パンデミックにより4月死亡者が多発する。オリンピックどころの騒ぎではない。終末である。神に罪はない。乱れた人心に裁きが下りる。体制の幕引き」。明日のご訪問は可能ですか。神に懸けてご返事お待ち申し上げます。お疲れ様、過密なスケジュールかと想いますが。悪意というものが存在しない善良な私の為。便宜の程を。何を恐れる。あたらず触らず、それは無視となり、霊の死へと向かう。答えは私に訊け。君が答えなくてもいい。君はエホバの申請を一番としなければならぬ。神を愛しなさい。神と隣人、間に立

つ苦しき君の胸中。ただ神を愛せよ。私と友情を分かち合う者。強く賢い、君しかいない。私の善を理解し行動できる。それは君だけです。待っています。君のメール。私の病状を鑑みてという表現。統合失調症のことかな。山口くん、あなたの組織での立場を心配していました。良かったです。安堵しました。連絡ありがとう。私は冷静ですよ。またね。冷静と銘打ったけど君にぜひ会いたかったです。ウィルスはこの地に及ばない。その信仰の薄さ。コロナにかこつけてはダメ。堂々と自然に生きる。イエスのように。君と論争は最早するつもりはない。私は工木バである。何が起きても揺るがない。全知全能である。会衆は自らの行き先を心配せよ。心に神は存在しますか。君らは国連を非難する。確かに我欲に固まった人間のセクションは不完全だ。イエスへの信仰に基づいた会話だけに意義がある。私を受け入れるかだけなのだ。俺には聖書が南無妙法蓮華経と共にすべてだ。日蓮正宗の本尊観。私の出現までは、一面では正當なドグマであった。どこに問題が。彼らは他の南無妙法蓮華経の本尊には悪鬼が棲むと言う。しかし南無妙法蓮華経という善に悪鬼は棲めない。当然である。信者には理解して欲しい。新しい時代が始まる。山口くんの言葉はすべて善意に取りたい。何度も言うが、雑談の中から来たる世の姿を導き出したい。神（愛）は逃げない。裁きの責任を問われることもない。想いを語り合おう。コロナ、ウィルスなど恐れるな。イエスは信仰が薄いと憤るよ。期日、指定願います。君も元気な、お顔を見せて私を安心させてください。では、待っています。

日蓮正宗が私の中で命運尽きるのは、イエスを認めず、理に耳を貸さないからだ。その血脈も受けセクトを超え、大乘の精神、「皆で本尊を心の奥で意識し宇宙の大本へと向かう」、これが即身成仏、南無妙法蓮華経である。聖句「神は彼らの目をくらまし心をかたくなになさった。それは、彼等が目で見ず心で悟らず悔い改めて癒されることがないからである」。ヨハネによる福音書、12章39節からです。きみはどうですか。「私という多くの徴を見て。信じる者も多かったがパリサイ派を恐れた」。当時と一緒だな。私は去年末において今年3月末から4月にかけて終末へ向かうと予言していた。聖書の導きです。危機を煽りたくない。良識と共に変革は起こる。いずれにせよ精神を込め、愛を強調したい。本日、宅へ来られないのもコロナのせいですが。勇気を出してくれ。イエスは荒れた波を叱る。病原菌にも仏性はある。信じて訪問下さい。16時にお願ひします。ご返事ください。君の不誠実は何度とあり、神を敵に回すのを望んでいるとは思えない。私には、理解するのは不可能だ。その根にある不信は組織からか。自らの命は自身で守れ。私は連絡さえ頂ければ嬉しい。世は混々としてきている。聖書に自らの生活について問うも、確かな返事をくれなくなった。最早そのような場合ではない。信仰を人々に強く打ち出すときだ。大きな愛をもって。君に神と認められた時点で市民権を得た気がする。だが、それはそれとして聖霊の宮として自らの判断、すなわち「神の意志にて行動せよ」と、聖書は言う。神はその支持を待っていた。強い意志で神と義人は一体となり悪しきも

のに向かわねばならない。前に言っていたね。親子で試練の道を行く「巨人の星」が好きたって。それはありだ。私も年少の曰心躍らせた。一度だけ見逃した。サリドマイド児の放送。親類の家にて見聞する。運命的な衝撃を受けた。初めて世の理不尽と悲しみを知った。婦中、八尾の会衆で「工木バの想い」という団体を立ち上げませんか。時間之余裕がありません。流れに任せます。君に為す力は十分ある。私が主導する。君に期待する。私はどんな困難も恐れない。当然工木バだからである。私と来るものは聖霊の宮として神の国で永遠の命を得るでしょう。私は逃げないよ。山口、もしかしたら君は保守派に対し自ら犠牲になって、若い連中を私に謁見させようと、宅に連れませんでしたのではないか。彼らはイエスの使徒、神の財産となるだろう。時宜が訪れ秘密は明かされていく。多分、君が愛語、真実を見つけたとき、人々の心へ、誰の弁舌よりも確実に迫るだろう。私は全知全能。紆余曲折も真理、優しさに至る工程なのだ。すべては必要だった。「工木バの想い」立ち上げ真剣です。幹部に対し説明責任があるならセッションなさってください。出番があるならいつでもオーケーです。皆で燃えましょう。仕事ができる。効率的、確実性。スピード性。それらから外れるとき愛が分かる。君達には愛の流布の為、根気と記憶力がもたらされる。神と隣人を愛することに活かし、神の国で永遠に生きる為、精魂込めて行動し勇気を發揮してほしい。「工木バの想い」立ち上げ進捗具合、如何でしょうか。頓挫しましたか。私に対し丁寧な説明責任を果たしてください。また連絡ください。好い

結果、楽しみにしています。イエスには二面性が。「私には枕するところがない」。周りは悪感情を持つ偽善者だらけだった。もうひとつ、「右を打たれたら左も出せ」。信仰を重視すれば窮乏はない。厳格と寛容の使い分け。生存競争を意識せず無頓着に。意識した時点で体制維持のため、サタンは悪さを仕掛ける。そこに気付き自由を求める勇者たち、真実の信仰がないとアルコール依存、精神疾患を引き起こし、サタンの体制に向き合うつもりが、悲劇へと繋がって行かざるを得ないのである。山口、この時機が来た。神イエスが私を突き上げる。壇上に私を立たせなさい。私に焦り、虚栄心はありません。私は聖霊の宮としてテキストもいらない。私は少し気負い気味ではある。仕方ない。勇気を持ち羞恥心の奴隷ではない。皆さんが聖句の意味を質問するなら、私はすべてフリーハンドでお答えします。私はエホバです。コ口ナを恐れるな。明日答えを持って来い。エホバの命令と覚えよと聖霊が促す。心して受けなさい。私ほど善良なものはいない。連絡待っている。神の計画が達成されるため。実は私は君たちにへりくだりたい。楽だからだ。でも今、弱気を聖霊が認めない。聖霊は師範。私は愛と平和の成就へと少しでも早く至りたい。熱望と期待に応えたい。楽園に入りたい。日蓮正宗の教理、日蓮はすべての始まりの仏。釈尊に成仏の種を植えた。これはつまり当体、神エホバではないか。釈尊に四門出遊を施し、成道した暁には布教を勧め願っている。神による大量虐殺、私は苦悩していた。天は愛の法にて裁くのである。エホバはその具現者。法華経、釈尊（仏陀）は法

である本仏の応身。法華経譬喻品第三、できるだけ世の悪所から離れよ。改革はしなくてよい。自律、煩惱の滅却がすべて。だが、こだわらない。南無妙法蓮華経。修羅の巷よりただ逃げよ、そして愚痴にするな。つまり達観し解脱せよと勧める。それは聖霊の宮、すべては神の意思から。私は罰、自ら手を下さなくて良いみたいだ。神を傷つけない聖霊の配慮、愛がある。私は私なりに布教に命を懸ける。永遠の命のため。コナは恐ろしくない。神をその前に畏れよ。自身に執着するものは愛を奪われ死に至り、他を愛する者は愛を神よりそれ以上に与えられ生きる。君たちを信じている。見返りのない奉仕に価値がある。そこに美、善があるから。私の態度が暇つぶしに見えたか。私はひたすら待っていたのだ。君たちの霊が真理に向くのを。私は利他である。なにかを得る行動を起こす、己を先にと天は開放す。どんな苦境の中でも利他の芽があれば試練の後、幸福を見つけられる。物心両方の平和、すなわち神の国へ入る。湯水のごとく言葉がわいてくる。大乘仏教は皆で生老病死を克服するところにある。南無妙法蓮華経、最終目的は不老不死。工木バの永遠に生きると同様の意味を持つ。自由、平和。忙しいとこ申し訳ないが、連絡ください。それが良識です。信仰心薄い信者の手前、集会も止めにしているのでは。報告がないことに不信感を持っています。誠意を込め対処してほしい。私的には何の欲望もない。ただ皆の幸せの為、愛を想うだけ。私のメールの意向を無視する意味が解らない。残念だ。謙遜に付け込む習性は変えられよ。私には狡猾なあなた方を使いこなす

悪性はない。善良な人々と歩んでゆく。神を敵に回した君たち。本当に新型コロナウイルスの肺炎に気を付けて。聖書にあるように幼子のような無防備が、神に祝福される。神は不誠実を裁く、イエスは憐れみから罪を7の10倍許す。神を試すのはご法度。不敬は罰につながる。信義大事。兄弟になるなら、もうこんな駆け引きをして傷つけ合うのをやめませんか。「お上がうるさくて」と素直に返していただきたい。今日は大変だったね。サタンに負けるな。勝て。俺が何もしていないように皮肉もあつたのだろう、木で鼻をくくったような物言いは。だが俺は365日何者かに注視され、サタンと神経戦を展開している。この消耗戦で君らは奴に加担しないでくれ。組織の裨を着用しているからか。勧誘、集金、目的の為なら手段を択ばず。非情なマキャベリストが正体か。君は仕事ができ尊敬されたいだけのパリサイ人だ。愛はどこに。俺は寸暇を惜しむが、睡眠は削らず、神仏を信じ、自らを信じ、サタンに対峙する。いざ闘う。聖書は軍師、参謀である。俺は負けな。君も欲望、疑惑、誘惑という悪に勝ち続けよ。愛の為に。密接、密着、密集コロナ対策か。集会に対し責任上施さねばならない処置なのですね。アブラハムは神の命により息子イサクを殺そうとする。それほど神の義は重いのだ。まず神への忠誠、忠節を果たしてください。君たちはあまりにも私を軽んじている。神の国を語る私を。どちらが無礼か。その意識、地獄の釜が待っただけです。哀れな君たちに呼びかける、我が心中、察せよ。神の加護を期待するより、神が守りたいと思う、そんな人間になるのが大切

です。それには神に対し愛をもって忠誠を誓うことが一番だと信じなさい。規制があるのは世間では必定。神を信じる者が右往左往してはいけない。対処することが犠牲に感じ、神への恨みになるとき自らの寛容精神を忘れずに。信徒として神が与える資格を持つなら。工木バを信じる限り新型コロナには負けない。本末転倒、信心なく怒りを工木バに向けてはいけない。臆するな。荒波を叱るイエスがいる。信仰薄きものよ。現時点、君は私を工木バとは思っていない。随所にパリサイ派の悪意が。私に悪意は存在しない。ただ君たちの素直で明るい幼子のような忠誠心が欲しいだけ。けして特別な感情ではない。私は協働のための前提条件を満たして欲しかっただけである。1匹の羊つまり友人になる。神への愛、絆を今一度確認してきたかった。疑問があれば、それを君は私に問えばよかったのです。私にストレスを感じる。君たちは温泉旅行にでも行くつもりか。キリストの弟子には毛頭なれない。もっと愛の本質を追究せよ。私と思考回路が一致するまで。サイト更新しました。「幸せは逃げない」よろしくお願い申し上げます。私は君たちに対し君臨も統治もしない。「工木バの想い」緩やかな組織体で善人に愛をもって最後のわずかな期間、福音と祝福を施す目的がある。主としての。何か短くてもコメントくれると嬉しいなあ。融和に向けて、ぜひ献呈したい新しい自筆ものがあります。状況からわずかな時をもって直にお渡ししたく。聖書の促しです。宅へと、お足、お運びになるなら有難いです。尚、ご訪問下さる日時、お知らせくださると大変うれしく存じ上げます。

御仕事先も大変でしょう。私も20日より働きに出ます。聖俗二元の生活です。コロナは終末が始まったばかりにすぎません。またご活躍を祈念し本日、おやすみなさい。元気で。タブレット端末、慣れていらつしやる。サイトにて私の新作、ご覧くださいましたか。実は手持ちにあと一冊しかなく、お渡しいたすことが困難かも。電子書籍で満足頂ければ助かり、ありがたく存じ上げます。献呈したい、と先述した書き物です。 急ぎ促した表現でしたが。なるべく早く作品に御目を通して頂きたく願った次第です。増刷には手間がかかります。ご理解いただき、ホームページ閲覧に運ぶよう望みます。短いコメントで結構です。いただけたら本当に嬉しいです。期待します。私の周りで君が一番の聖書に対しての見識者です。だが真の理解力は神からきます。神に愛されているエビデンス（徴）です。コメントありがとうございます。山口さんも神を信じ、心、強固なこと私も疑ってはいません。ただ想像力に若干の欠如が。 コロナ、すべて神の御心のままに。決して神を試すわけではなく。愛を信じる。 社交辞令ではなく、ご健勝を祈る。ニユアンスが悪い。元気でいて下さい。心美しく。これでいい。後は神（愛）次第。天の裁きです。目に見えない世界、良心大切に。おやすみなさい。 ありがとう、君の尽力の賜物で、友人、兄弟と呼び合える道筋、可能性が再び開いた、そんな感じがする。ただ私という真理を認識してほしい。ごめん、夜遅く最後。君は非常に実務的に優れた人物だ。そしてゆるい礼儀は忘れないで。俺も気を付ける。愛を基盤に利他の精神だね。くれぐれもパ

リサイ人にはならないで、人々の善意を信じる。そして回心を図る。自己中心的な人間は責任を人に被せる。振り返るのは、負けを意味すると錯覚している。頑迷で最も神の国に遠い。 新型コロナ対策大丈夫かい。エホバに愛される人になるのが最大の防御です。 「罹患すれば頭を抱え、死ぬときは死ぬだけです。災難から逃れる最良の方法です」(良寛の言葉から)。 またコメントください。 尊顔を拝せませんでした。耳に痛いことも受け止めて下さり嬉しいです。 心が騒ぐ。母に自己中心なサタンが入った。心配ない、母の善意も信じている。 つまり聖人はどんな劣悪な環境からも生まれてくる。むしろ可能性を秘めている。イエスの誕生は馬小屋だった。 これだけはハッキリさせておきたい。 エホバの証人は金目当てですか。詐欺集団ですか。 君たちの布教の方法に懸念がある。「違う」と一言、宣言してください。 信じますから。 人を尊重し敬意を手にする。一理ある。一方、人の出方を見て態度を決める。そこから生まれる方法論は、救いに導く方便ではない。巧言でしかないのだ。 たった一言でいいから、エホバの証人は本物のクリスチャンであると答えて下さい。私は君を疑いなく信じますから。メールください。無礼とごまかさずに。 新型コロナ、長丁場、すべては疲弊し最悪のシナリオ、国家破綻を迎える。 イエスを信じ、罪を消す。か、南無妙法蓮華經の唱題。神の国が俄然近くなる。私には正直言って、終末から神の国へ至る具体的な工程が見えてない。神に責任を負わせない、聖霊による配慮である。君たちの見解を今一度吟味したい。来宅待ちます。真剣に樂園設立

の為、力を傾けましょう。　いつも神の味方みたいな顔をして、いざとなったらこの始末。情けないぜ。臆病者。コロナは間違いなく神の意思を受けた天による終末に向けての重き裁きだ。お前ら生活を心配する前に、エホバである俺を大切にすることだな。俺の寛容が甘やかしになったみたいだ。君たちに対し少し憤りがある。これは大事につながる。天は狡猾なお前を極度に嫌っている。お前には厳しい罰が必要みたいだ。神はお人よし。お前を信じていた。天は騙せない。心を入れ替え神の方を向くのだ。　神の誉より人の誉を選んではいけない。幼き頃の父親との想い出、忘れるな。お前は人界の名誉からどうも離れられないなあ。神の国では邪魔になるだけ。私はお前の人界の栄誉への傾向を自覚し、そこを利用しようと思った。厳しく当たったりもした。問題意識が生まれただろう。か。真理への誠実さ、今一度確認されよ。望んだのは私の愛が世界中、隅々まで広がりいきわたること。それだけ。お前らはサタンと対峙する私を軽んじ、務めを果たしていない。怠惰で不敬だ。悲しいなあ。　オリンピックが中止になった時点で新型コロナは収束していくだろう。来年の開催に拘れば、もっと激しい禍を招く。神のせいではなく人心の乱れに原因が。殺し合いの思想は撲滅しないとね。　話は変わるがリハビリテーションを神はある面、嫌う。身体障害者は基本、人の痛みを知る愛を持った存在であった。機能の向上を目的とした療法、苦痛で結果が出なければただのサタンの企みに乗せられているだけだ。　社会活動が若干認められるようになり、小さなイベントである集会はいっ

再開される予定ですか。ぜひお知らせください。メールお願いします。新型コロナウイルスからの解放にはもう少し時間が掛かるからね。高慢な山口さん。傷ついていたらごめんなさい。神の関与を受けるのは修行です。苦い薬はよく効きます。自然体で何か返信ください。私怨、悪意はないから。私がわがままで君たちを困らせている。違うのだ。神を愛せ、隣人を愛せ。つまり神は私。私こそを愛の具現として、まず一番に愛さねばならない。私は今まで遠慮していた。この意味合い、そこを絶対、外してはいけない。真理を離さない。その時、私は君たちの自律した自由、自立を了解するであろう。まずは神というものの認識である。神というものは私のようなものなのだ。それ以上答えようがない。そこを心底、領解すること。過去世がわかるか。尋ねる奴がいる。私には過去がない。久遠元初の存在だからだ。私から歴史は始まる。そして意識が遡及し宇宙を創造する。神は愛である。縦横無尽に駆け巡る。仏像を壊すもの、本尊、寺を焼くもの、君臨し指示命令を下すもの、神仏は黙する。やがて悪運は尽きる。罰を招くことに繋がる。私は、本当は、罰など与えたくない。しかし人々は我欲にまみれ自己本位である。民主制のもとなんでもあり。回心を促し正規に乗せるには強権が必要となるさ。哀しいが。法律、規則、杓子定規に捉えてはいけない。律法の順守より信仰。いずれにも愛による解釈、安全圏が存在するからだ。神は人の心に忍び込むサタン一味だけを処罰、一掃したいのだが、悪魔に魂を売り渡した残虐な人たちも地獄に落ちなければならぬ。悪魔の子は意外と多い。私

の正当性を上訴する。小野君、岡田君には難がある。しかるに腹黒の君に頼らざるを得ない。君の心に愛を重視する核があるか。己の立場、妬みだけではないのか。マスクをせず神を試すか。マスクをつけて神に疑念をしめすか。コロナ対策、苦渋の決断が今回か。神は言っている。すべてに問題はない。君に、愛に反した目的がある限り私とは平行線である。尊重し合い理性的にセッションするなら真実の工木バが現れ出るだろう。愛とはなんぞや、深く考察してみよう。「私はイエスか、否。聖書の神か、否。義人か、そうだ。人間か、そうだ。全面的否定だな、違う。お前は義人を生きなければ。聖書に守られて、聖霊は語る。俺はただの人間、義人を生きる。その名は称号です」。まさに聖霊の宮です。世は殺風景です。サタンが良心を狙っている。皆、負けてはだめ。来る世、泣いたものは笑う。明日、会館に参上してよろしいでしょうか。夜分恐れ入りますが、起きていられたら、連絡いただければと。よろしくお願い申し上げます。集会は自粛中ですか。山口さんありがとう。感染症の捉え方は神の試し、悪魔の禍か。工木バの証人が「終末だ」と、うかれバ力騒ぎするわけにもいかず。静観ですな。新世界を望む不埒者と呼ばれるか。辛いところだ。ただ善人が皆、幸せになっただけなのに。ありがとう。山口さん。おやすみなさい。私への無礼、気にしないで下さい。そして上から目線はないつもりです。義人は義人で救世主となります。お力添えを。神を信じない者。私とは関係なくなる。自己本位で愚かな自慢を繰り広げる。愛する人は見つからない。自己から離れる為

には神を愛さなくては。清らかな愛を保持する者は聖者と同様、清らかである。君は生活に潜む悪魔を現実的に把握したことがあるか。この世は善と悪とのせめぎ合いだ。宗教者なら当然気付かなければならない。俺の良心に聖書が映る。最早、俺が聖書である。聖霊の宮、婦中、八尾の会衆によろしく。義人は立ちます。愛の為に。判るやつには解るので、私がヨハネの手紙の義人であることが。刹那、一瞬の間に救世主であることを私の言動から分からぬなら冷血漢か世間知らずだ。勿論、君には解るね。姿を見て悟らず言動から救世主と知る。そしてみたこともない私を信じる。そんな人は私に会うとき確信を得る。君はどうだい。義人を信じているかい。癌で亡くなった、死を哀れなほどに恐れていた男がいた。私に彼の疾病は聞かされてはいなかった。交流を断った二か月後、彼は逝った。見事な大往生だったという。自筆本の一番の愛読者、親友だったよ。どこもかしこも殺伐としています。路上には怖いルールが人生の数だけ引かれています。エホバの証人だけは、ほのぼのしてほしい。サタンが最も嫌う心の温かさだな。新型コロナウイルスの禍はあくまで悪魔の所業である。人心の乱れが善神を去らせたのです。エホバである義人を恨むのは筋違いだ。悪の欲望、闘争より皆、離れよ。私の意思が反応して甲子園大会が中止になった。高校野球は社会の縮図であると言う。愛なき冷たい世間、肯定する競技は悪と呼べるのだ。世界は持たない。今年中でけりがつく。すべてが急速にストップだ。エホバの証人の出番が来たと聖書は言う。顕正会は無知な独裁者がいる限り提携は無理だろ

う。工木バであつた義人が檄を飛ばす。負けるな、同志よ、艱難に耐えよ。必ず神の国で永遠の命を得ます。サタンの罠に陥落されてはいけません。うろたえないで。君が歩んできた日々。よく頑張つた。だが意志の構築、聖書の詐欺的レクチャー。洗脳に利用されるイエスの統一見解。方便でなければ罪である。神イエスの真意、義と愛、親近感大切。いじめはどこにもある。受ける側にも問題はあつた。傷つきやすく、自己本位で思いやりを自覚できない。人に依存して侮辱される。素直で独立した人間をめざせと私は言う。わが宅は私塾となる。幕末、小さな長州の松下村塾から後に国を動かすたくさんの人物が輩出された。君らは私のレクチャーを受けなければならない。愛の樂園創出の為。救い主の意味合いが理解されてないみたいだ。理屈をこねて頂点に立つ怖い存在。それは見当違い。あなた方のくびきを外しに来たのがキリストの姿である。充実感、達成感、仕事、人生にあると言う。隠されたボールがはがされれば、そこには歴然と生存競争が口を開けて待ち受けている。静かな情緒、深い愛が必要になる。労働市場の流動化、流れ流れていくときどこかで誰かが風の中で待っている。「そんなものさ」と思つたとき神仏は微笑み、平安をもたらすのである。サタンを戴いてその体制、カネ、栄誉という価値観にひたる限りは地獄だ。逃げることだ。自らの良心を大切にし、仲間を作ることだ。神はそんな人を愛する。義侠、友情、温かく。そこには幸せが待つ。排他的になるとき人間性、寛容の意味を考察しなければならない。何が敵で、どこに敵がいるのか。自らのう

ちにいないか。頼むから私を悲嘆させるな。聖俗三元の生活。破綻はいつも現実的。管理社会、服従を迫る側は訓練と呼ぶ洗脳を。イエスには枕がない。でも真の愛が確かならわずかな力ネでも生活には困らない。宣教師として壇上に立つ。そのことを自慢だと私は否定したね。私は妬みではなく、話される内容を忌避したのです。申し訳ないが、利発な君が真理を語るのを待っている。晴れの舞台は、来る世にある。君はそのタフさと弁舌をもつて神の子たちを先導しなければならない。神であつた、今は、義人の私がついている。心配無用。辛い時は祈るだけだ。ある有力者を見つけました。たとえば悪いが、君がいれば鬼に金棒です。神として宗教法人「義人の想い」立ち上げを決めました。君たちの合意はどうですか。千里の会館の利用は難しいですか。婦中、八尾の会衆に私は名乗り、愛による世界征服を目指すことを宣言します。期間はずかなものに。生老病死の消滅の福音です。球は投げました。期待します。神を愛する。具体的な工程を示すための決断を望み、連絡お待ち申し上げます。すべての為に。男と男の約束だと理解しております。頼む、一度でいいから壇上に立たせてください。工木バの溢れる心情伝えます。よろしく。私が君たちの慕う工木バであることを忘れぬよう、確かに伝えます。サトリを得るとは。悟りなどいらないかとも思ったとき訪れる、暖かい感情。智慧、慈悲。菩薩行がすべて。己を捨ててこそ真実を知る。煩惱はいつしか消えている。山口くん何か一言でもいただけませんか。優しさの証明をせずにはクリスチャンとしてのレゾ

ンデートル（存在意義）が見えてこない。一言でも、他愛ない話で結構です。 イエス。
パリサイ人はその知識に驚愕する。「どこで学修したのだ」イエスは神です。わき起こる核
心を語っていた。イエスの思想は彼らのキヤパをはるかに超えていた。

「R会、新川主任さんへ」

自ら仏道を領解できぬ者には祈る対象、本尊は必要だ。R会。混乱する法座より、本尊へ
唱題が大事である。しかしここに問題がある。R会の本尊は、救いに踏み出す釈尊の立像
だと言う。開祖が作り上げたものだ。だが真の法華経の本尊は釈尊の慈悲の象徴ではな
く、真つ直ぐ日蓮の愛と当体でなければならない。即ち曼荼羅、南無妙法蓮華経。私は心
の奥、宇宙の大本、真如へと掲げる、崩れない恒久の本尊を。南無妙法蓮華経。 仮
にはあるが、各国が人の交流を断ち、輸出規制、をすれば生産活動、消費は落ち込み、
GDP（国内総生産）を押し下げ、貿易、金融は衰退し、市場は底を打ち、日銀の量的緩
和は負の結果に。円を市場に増やすため国債を買い戻す量的緩和、長期国債の金利は銀
行、政府機関の低利の貸し出しに連結している。日銀も政府も何らかの手は施すだろうが
兼ねてからのマネーの供給量は方向性として増加せざるをえない。防疫を徹底するも輸入
の停滞から、需要不足で過剰だったものも、品薄感が広がる予想。未来予測、もの不足、
相対的に物価は膨張する。経済に悪影響を引き起こす。 もし通貨量を減らせば、失業、
自粛から消費者の、購買マインドの冷え込みから、個人消費が落ちるとき、カネ詰まりと

なり、にっちもさっちもいなくなる。極度のデフレである。先行きが見えない、経済を勘案すれば、期間を限定せざるを得ない、緊急事態宣言からの休業要請、社会活動の自粛。第2波への警戒、新型コロナとの対峙、戦いはまさに長丁場である。度重なる場当たりの予算の可決、財政出動と赤字国債の発行、後にくる経済活動縮小からくる税収の激減。財政赤字の無視。乱発する赤字国債引き受けの為、80兆円の限度を超え、お札を刷りまくる日銀。信用はいつまで続く。需要不足から石油価格の低迷、オイルマネーは去り、社債、コマーシャルペーパーの値打ちが下がり金融システムに悪影響を。観光客が命の小売り、宿泊施設、運輸や、娯楽、夜の歓楽街、業績不振から、持ちこたえる体力が続かず、倒産にまで。いったん下がったように見える物価は、供給網の分断から今度は逆に急激に上がり始める。国債を引き受ける為にお札を刷りまくる日銀。遂にハイパーインフレの到来である。輸入品は来ない。輸出、生産活動の悪化、消費、設備投資、経済活動は落ち込み、不況にもかかわらず物価が上昇するスタグフレーションが深刻になる。日本の食料自給率はかなり低い。食料は一番の問題である。非正規に始まる完全失業者の増加、病床不足、医療従事者の疲弊。難病者の切り捨てに始まる医療崩壊。社会保障の破綻。社会的弱者には餓死者も含め大勢の自殺、孤立死が殺伐とした中に増加する。生活、社会への不安は治安情勢の悪化を招き日本の安全神話も怪しくなる。経済はまだまだ不明瞭で負の様相を呈している。新型コロナウィルス。クラスター（感染集

団)から急激な蔓延、大量感染。決して事態を過大に捉え、また危機を煽っているわけはありません。私は今回、大変な禍があるのを、諸天善神が去り、大きな被害に見舞われた去年の台風19号の後、12月から予言していました。安倍総理の自殺者まで出た森友学園問題のけりのつけ方。カネと栄誉、欲望と競争を煽る、修羅の世界。監督、コーチなどのパワハラ、そしてドーピングなどの詐欺、闘い争う思想。平和から遠く離れる悪魔の祭典、暗黒オリンピック。天は許さない。世界はもたないでしょう。コロナのパンデミック(世界的大流行)世界大恐慌。国家破綻。命の綱、年金はもはや確実性は無い。当局の生活に関しての説明、信用できませんか。最も怖いのは前政権の防疫体制に問題があったと語るトランプが、全責任を中国に被せ、あらゆる遮断までも公言したことです。年寄の世迷言では済まされない。軍事的衝突。時期尚早のような気もするが、あり得るかも。そして中国寄りであると、米国が抜けると言っている、WHO(世界保健機関)はどうなる。台湾がオブザーバーとして参加できなかった経緯もあります。香港の中国による国家安全法制、周圉への影響は。逃げ口上ですが、私はエコノミストでもアナリストでもありません。断片的で、いろいろご批判もあるだろうが、群集心理から動く経済の一面。どうなるかはわかりません。現在、単なる浅はかな目口開かずの、素人の仮説であればいいのかもしれませんが。ただの戯言で終わればいいか。私が言いたいのは、人類、いやもっと大きな生態系にとって新型コロナは悪なのか。警告と訓戒。すべては人心の乱

れから善神が去ったところに悪鬼が跋扈するのです。そして私の自覚に対し、天が応え、悪に対し厳しい処断を下します。これはハルマゲドン（世界最終戦争）です。本当に憐れで悲しきかな、すべてのものの命運がかかります。皆、心を正し、神を信ぜよ。神を愛し、隣人を愛せ。私は戦争ではなく緩やかな展開を期待します。ノルマに追われ、コストパフォーマンス（経費の削減）に悩まされる、物質至上主義。カネ、カネ、カネと欲望を膨らませ、体制の支配者に踊らされた世間の人に、私は強く警鐘を鳴らす。悪に見えるこの状況、仮に経済が縮小しても、コンビニに始まる、食料、資源の大量廃棄などを止め、皆で分かち合う世にすれば、共に美しく簡素な生活が送れるはずです。また高い倫理観を持つ人々の集合ならば、所有欲から離れ、すべてを分かち合う配給制にしても良いかもしれません。拝金主義の敵に回された神の立場から、「新たな世への胎動を感じてほしい」。変革、過渡期、心悪しき者には痛みが。神を信じる正しき者の曰。平和的終末を迎える。美しく善く生きた人々は、義を見出し聖霊の宮として永遠の命を得るのです。そこには法律も掟もない。因習から離れ、見栄、体裁を捨て、善良で真理をつかんだ人達へ。「私は神として愛による世界征服を必ずや成し遂げます。善を求める皆さま、心清らかにお待ちください。ただいつも時代が変わるとき、正しき弱者にも、そのひずみが押し寄せます。恐ろしくはありません。艱難に耐えイエスを信じて祈って下さい。必ずや永遠の命がもたらされます。悪魔の禍にうらたえてはいけません。神はあなたと共にいま

す」。(悪人が地獄に落ちるのを待ち望んで、今日まで正しき生活を保ち真面目に生きてきた。」「正義に病む男」の言葉。本音だと言う人はたくさんいるだろう。悪を本当に憎んだのだろう。愛と慰めのイエスによっても翻意がない場合は、天は悪人を躊躇せず処断するだろう。しかし正義は自らの為にあります。目線を他に向け、心を煩わせてはいけません。天に滅ぼされるのは薄汚い権力を行使する強者たちです。神は病んでいる偽善の世を根治し、来る世、愛に包まれた正義(思いやりある契り)という真実へと繋げていく。それが神の義である。律法より信仰、法律より愛である。大切なのは、やみくもな法の順守より恋人たちの真の愛による抱擁です。そして契約に始まる法律は、善なる人の集合の中、必要はなくなる。だから今、「人々は愛を選択せよ」と、神イエスは語るのである。R

会の女性で欲情したのは新川さんだけです。私は自制していました。あなたは聖女だからです。圭一さんへの献身、その慈愛。その寛容な心は教会主任の中、右に出る者はいないでしょう。私はこれからR会を検証していきます。あなたと圭一さんの新型コロナからの安全は私が保障します。あなたと圭一さんの息災を祈り、南無妙法蓮華経。夜遅くすいませんでした。明日も教会ですね。元気に過ごされるよう祈っています。おやすみなさい。

新型コロナ、私は去年の暮より、何かあると予言していました。オリンピック。商業主義にまみれた殺し合いや、ドーピングという詐欺と、汚い金の流れ、そして生存競争への扇動。(地獄、修羅、餓鬼、畜生)の様相、愛である神が許すわけがない。以

下、教会長の加藤さんにお伝えください。」「私の人間性を観察してほしい。困難かもしれないませんが、宗教者として、友人になれるかとも思うからです。あくまで加藤さんが望むならの話です。私に俗的な野心めいたものではありません。私と会談する度量はありますかな。来る世へのカウントダウンは始まっています。神の道を止めぬよう。規則より信仰、つまり愛。この大事な時期、宗教者は率先して真理に向かわねば。R会の弁解、本論あるでしょう。お呼びになれば、神である私が勿体なくも参上致しますから」。(笑) 真理とは神を愛すること、隣人を愛することにつきます。加藤さんに私のサイトの更新、お伝えください。山頂は殺風景。下るほどに草木あり、やがて可憐な花に出会います。私に好意的になるとき真実の目は開くでしょう。 旦那様のご逝去、今頃イミズさんよりテレにて知らされました。先に不謹慎な発言もあり本当にごめんなさい。ご子息の圭一さんの未来は仏さまに委ね、心安らかにと願う次第です。イミズさんに申し上げます。 「教会長、長がっている間は名誉と責任に縛られます。人の優位に立ちたい間は、真実つまり神(愛)から支持されません。肝に銘じて生きて行かれるように」と。 長とつくもの、それは組織においての機関にすぎません。まず目の前の人を大切にします。その人が今、縁のある、最上位の人だからです。かつてあなたに教わりました。ありがとう。病院勤務、27のとき人間関係のトラブルから発症、3度の入院を経験しました。私の成長(成仏)には必要なことでした。 圭一さんは情の深い人。後を慕い追われること、将

来に悲観なさらずに。むしろ喜ばしいことでは。色欲と怒りから離れた今、過去は笑われるために存在します。明日から仕事です。かつて未熟な介護職、愚痴を聞いて下さり懐かしく、本当にありがとうございました。神は恩を感じており、あなたへの禍は避けていきます。行きついた先、釈尊の言説、善き仲間を持つことが仏道のすべて。R会の教えに近いです。でもどれだけの人が理解しているでしょうか。教えてくれた、善知識である、あなたを愛したい僕がいる。圭一さんは思いの深い人です。故、庭野さんへの心酔もそう。お二人で楽しい想い出たくさんお作り下さいね。彼の生涯最高の、暖かい、時と、場と、人があれば。お休みなさい。合掌　おはよう。R会の持つ寛容性に失敗がなければ会員の心に花は咲くでしょう。しかし俗的隆盛、世間的名譽に組織が向かうとき、それに追従するのは善くない。あなたはすべてに大丈夫だ。つくづく地獄の巷を感じます。嫌です。少し弱音を吐きました。この世界、平和はどこに。圭一さんは感受性の強い人、辛い戦いを強いられるはずで。受け止め抱きしめてあげて下さい。すべての平安を祈念して。「独りが好き」と言う人は引き冷たくなる。けど本当は傷つき不信を持っているからかも。他人、優しくしてあげるのは面倒くさいが大勢だろう。やはり俺は独りでもいいなあ。でも人は絶望的でも愛し合わなければ。俺はイエスキリストだった。仏の教えを矮小化したとあなたに言ったが、愛、思いやりなどの人情の方が、覚りという自己本位なものより大切だったのだ。それを教えてくれたのはあなたです。善知

識、万歳、友情が死を乗り越える。志村けんさんの話を聞いた。「お笑い芸人は皆、仲間である」。生存競争を煽るのはマスメディアであると。そうなのだ、仕事に励む我らには罪はなく、競争に駆り立てる汚い奴らが枠組みを作り存在しているのだ。心安らかですか。上から目線と思わないで下さい。神の温かい言葉と認識してください。圭一さんは大丈夫。神仏に暖かく愛されている。そしてあなたの寂しさは仏さまが解決する。

「貫井へ」

安否だけ知らせてくれぬか。反目、喧嘩を自省する。日蓮の愛が顕された、日蓮正宗の本尊は、エホバと日蓮は当体であることを踏まえると、偶像ではない結論となる。この意味付けが大事だ。「南無妙法蓮華経の曼陀羅、仏陀の覚りと仏種の繋がり」、絶対善、絶対愛だな。自筆本を送りたい、君が生存しているエビデンス、わずかも欲しい。了解したら南無妙法蓮華経と送信してくれないか。友情が破綻しなかった証明に。新しい本は「幸せは逃がない」というものです。よろしく。サイトには販売している文庫本をニューモデルとしてしました。今回の「幸せは逃がない」という作品の内容は君との問答が中心です。（南無妙法蓮華経）。俺の心解ってくれたか。当面の、カネが必要なのか。「武士は食わねど高楊枝」が無理みたいだな。送金するよ。カネは3度目の入院前、深夜勤を含めたダブルワーク、わずかな時間給から貯めたものだ。貫井、俺はお前を信じている。

俺を、ケチでせこい、男から、利他に生きる一人前の男に脱皮、成長させてくれたからだ。ここは力になる。これは義でもあり友としての愛でもある。カネの問題より君が持つ温かさを失わずにいてくれ。早ければ、明日の午後には着くだろう。食い繋いでくれ、南無妙法蓮華經。この友情は、すべてお前からの、愛より派生している。つまり南無妙法蓮華經。ただ神を試してはならぬことだけは伝えておく。罰を受けることなきよう、君の為に。おやすみ。貫井、これが俺にできるだけの、精一杯の思いやりだと思う。これ以上は破滅に向かう見栄になる。返済は君の信義からの意志に任せる。目に見えない世界、大切に。体、労われよ。南無妙法蓮華經。明日、面接だ。仕事も決まりそうです。カネは天下の回り物。俺の口座に有るなら、どれだけでも送ってやりたい。ルンペン生活が長かった。マインドも内向きだ。今回の自筆本、「幸せは逃げない」、メールの厳しい応酬、やはり公平感、表現するには無理があったかも。いや、嘘もなしで、君のアドバンテージ（優先権）を念頭に置き、著したつもりだ。まあ読んでみてくれ。送金、「丁寧なお礼の言葉、ありがとうございます。武士は相身互い、わずかなことですぐ喜んでいただきます嬉しいです。また会える日を楽しみにしております。南無妙法蓮華經」。貫井、ありがとう。君のおかげで本当に一人前の大人の男になれた気がする。金銭欲、所有欲から離れた。つまり拘らない境界。カネは仕方なく持っているという感覚だ。なぜか、人が寄ってくる。俺の敵はすべてに執着する母親だ。介入されると、殺したい程だよ。君は存じ

ていると思うけど行政への申請は大切だよ。寝る前に朝夕、お題目を好きなだけ唱え、ご仏前、故人と魂で対話するといい。善き方向へと良心が向かうよう。貫井、お前の再度の力ネのむしん、実はお袋の介護に20万円ほどの工事がかかる。返金はあるが用意しないといけない。もう2か月ほど待てば、就職支援金が入る。それまで持ちこたえろ。生活保護申請はしたのか。聖書が言うのだが。野放図に貸し借りすることは、お互いの友情、生活の為にならぬと。君の生活が安定するのが最大の目標だ。しかるべき場所に相談することを勧める。大丈夫だよ。君は骨のある男だ。南無妙法蓮華経。ここまできて俺の言うことが分からないか。俺にはお前がよくわからん。「理解には二ーチエが、勇気が必要、云々」とのたまうが、お前を理解するには勇氣より力ネが必要みたいだな。俺はプライドの高いお前が生活保護を受給するにあたり、引け目を感じる恐れがあるとみた。羞恥心を取り越え、やがては復活することを期待し、お前に「骨がある男」と激励の文を打った。生活を正せ、仏の道だ。南無妙法蓮華経。俺は黙っていたが、お前は真の意味で、謙虚でなく、すべてのものに対して頭を下げられない。傲慢だ。相手を尊重するのが愛であり思いやりである。君は相手の出方を窺う。臆病なしるしだ。まあ俺も相手の顔色を見る。が、俺の場合、如何なる時も悪意はない。君も真の意味で自分を大切にするためには、相手を大切にすることだ。日蓮は自らのプライドの高さを自覚しつつ、さらに傲慢を演じなければならなかった。日本の柱、眼目、大船ならん。自尊心は方向性さえ

誤らなければ大事なものである。相手を尊重せよ。君の立つ位置は、それで丁度だ。思いやりをもって、自然に生きることさ。君にはいつも親近感を覚える。大事なことだ。そこには南無妙法蓮華經がある。君は大腸がんを抱えながらも生活と闘う、勇敢な男だ。軍資金をわずかばかり送ったが、継続的な兵站が必要だ。それは自治体に頼られたし、それを願います。君は馬鹿にされないために虚勢を張ると言う、南無妙法蓮華經は劣等感からくる虚勢を何とかするものじゃない。すべての差別から離れ、皆で成仏する安樂行だ。「日蓮を悪しく、敬わない」。これも大事なこと。支援金2か月後、カネが入り次第送る。貫井、正直、自然体は楽だぞ。人を愛することだ。そして俺が言うのもなんだが、あらゆるものの恩を忘れちゃいけない。死ぬなよ、貫井。また君の心を傷つけたか。悲しいなあ、君の方向性、自利から離れ利他へと向かわねば、孤独に陥るだけだ。周りの優しさに感謝せよ。利他の精神が生まれる。そこからだ。屁理屈はいい。改心と進歩を妨けているのはお前の偏屈だ。真理も聞く耳、機根がなければ暖簾に竿、糠に釘だ。攻撃的になる前に思いやりを察せよ。皆、馬鹿じゃないぞ。貫井、俺は大きな失策をした。悪かった。南無妙法蓮華經はたとえ徳がなくても成仏へ導くものだ。なぜなら南無妙法蓮華經は善そのものだからだ。南無妙法蓮華經を行ずるのみ。それが唯一の善と言える。お前が今、幸せならいいのだ。それでいい。ただ南無妙法蓮華經は、皆で叩くうちわ太鼓からわかるように人に勝ち、一番になることを目的にしたものではない。皆で楽しく成仏する為のものだ。

私はそう信じている。幸せな寂光土建設のため。お前はスポーツをやれば己の小ささが分かると言うか。お前は三島由紀夫か。頑迷な奴だな。スポーツは結局自慢のためにやるものだ。人の自慢を観に行く馬鹿は多い。向こうは、「俺は凄い、お前らとは違うぞ」と思っているぞ。肉体、何の生産性もない特殊技能を誇示する。憧れと言つ劣等感。貶めるものに金を払い、サインまでもらう始末。おかしくないかい。まあ古代ローマ、奴隷同士で剣闘をさせる。観客はヘイトスピーチを投げ、憂さ晴らしをする。悪趣味だがそれならありかもしれない。体力、頭脳の誇示は下品である。支持する君には、南無妙法蓮華經を受け止める素地がない。君の品格を思うとき、今後の君の行状を、神の意向を受けた天が、聖靈を使つて裁くだろう。君への送金、私の厚意と人の好さに付け込んで、まんまと騙し、お宝をせしめたと、してやったり、したり顔、薄ら笑いを浮かべているなら、本当に寂しい。言語道断。即、罰を食らうぞ。いや私は君の誠実を信じている。俺が君と富士大石寺に行こうと思つたのは縁を感じたのもあるが、見た目、虚弱だったから、遠出、途中、喧嘩になつても勝てると思つたからだ。「敵を知り己を知らば、百戦して危うきを、得ず」。(孫子) でも俺には衝突因縁は、もうない。だからお前は俺の前から去つたのだ。仕方がない。美しい心に幸せは宿る。喧嘩の前に自制を勧める。ヘンな作為はやめろ。温かく生きなよ。俺は己の良心を含め、どう安樂に暮らすかのみを考えて生きた。つまりそれが南無妙法蓮華經の答えだ。常樂我淨、いつも楽しく美しく、君は反発し

ないか。あくまで、日蓮正宗「三大秘宝」の南無妙法蓮華經の本尊の受持が安樂へと繋がるか。それで元氣だったかい。君はこれからの因縁をよく噛みしめることだな。貫井、平和か。争いの渦中でも、三大秘宝の南無妙法蓮華經の本尊の受持にしか幸福がないとしたら、南無妙法蓮華經に善はない。アガペー（絶対愛）、善が南無妙法蓮華經だ。実はアガペー（博愛、絶対愛）は確実な善ではない。博愛は悪をも包摂することがあるからだ。唯一、南無妙法蓮華經が善となる。仏陀の覚りを仏性に埋め込まれた仏種に結び付ける。南無妙法蓮華經が何度も言うが唯一無二の仏法、絶対善である。博愛がいけないと言っているのではない。愛が殺人など善とはいえぬものに至ることもあるからだ。だが愛は最も善として輝く場合がある。道ならぬ、を含め、優しく美しい恋である。正義に病み、人を恨むことはない。明るく素直に温かく。自然な心を大切にしたい。

「R会大谷君へ」

今、君の年少からの生き様、凄さが分かる。飲み会、費用は同じ立場の保持のため割り勘にしましょう。圭一さんも呼ばせていただいて、3人で座談会を。真剣な仕事の話をメインにして、各位の世間と交わされた合意、また感じる問題意識を話題にしたいです。器の大きい大谷君、ぜひよろしくお願いします。かつて君のアパートで飲んだ角瓶の口ツク、最高だったね。そして圭一さんを大切にしてあげて下さい。彼はいつも生活より愛を優

先するからです。聖書の成就。神の晩餐に招かれた客人、障害のある彼がまず救われます。真実です。「どうして生きているの」目の前にいる人に訊いてみよう。それがすべてです。釈尊は言われた。善知識、つまり信仰の仲間を得るのが、仏の道のすべてである。芸能人、スポーツ選手、政治家、ではなく、いつも目の前にいる人が最高の人物なのです。

「山村さんへ」

お元気ですか。サイトの更新をしました。またよろしくお願い申し上げます。正直で律儀な山村さん、深夜ごめんなさい。私の宗教談話をご理解下さるのは貴方しかおられません。貴方とR会との距離感を考慮しますが、問題はないと踏めます。ご訪問下さるなら嬉しいです。連絡お待ちしております。ありがとうございます。山村さん。あなたの良識は素晴らしい。我々の疾患は選ばれしもの。膝の具合が悪いのなら座椅子もあります。また機会を作りましょう。懇親、図りたく強く願います。貴方の一番の理解者より。私はフットワーク軽いので、またいつでも、お声、おかけください。待っています。そして、ご自愛ください。山村さんは私と同じく独立独歩の人間。私は真理を語り、愛についての認識を二人で共有したいだけなのです。それは我々のような繊細な神経を持つものに許され、それ以外の人には理解不能かもしれません。私はここに世間の価値の、逆転を果たします。

職務至上主義。愛、思いやりを蔑ろにする世間。聖書、神の晩餐に応じたのは生活重視の健常者ではなく、心優しき、生きていく術を見出せずにいた障害ある者たちでした。世間は変です。R会の存在、我ら二人を出会わせた。そこに尽き、価値があります。釈尊は善知識つまり善き友を得ることが仏道のすべてであると語ります。真摯に善に向けて歩んでいる代表者は我らです。ごめんなさい。熱くなって。山村さんの返信、嬉しくて。またご随意に賜れば。元気でいて下さい。では、いい夢を。おやすみなさい。他宗教信者との交流は、貴方が言われたような、私の教養が深まるのが目的ではなく、最終的には愛による世界征服が目的です。美しく楽しい境界を目指します。神の国の実現です。平安に包まれた。何処かの日に、宅へご足労願えませんか。今までの書き物を何本かまとめた本を作ってみました。ぜひ進呈いたしたく思います。貴宅への道順、記憶が怪しげであり申し訳なく願うものです。執筆に対する暖かい応援、痛み入ります。ご貴殿、日々活躍されること、絶え間なく西の空より念じています。私は記述をこの先も続けます。勇気をありがとう。大和フェリオ、紀伊国屋書店で8月から第2巻目を並べることになりました。まずはご報告申し上げます。山村さんは素直にエールを下さる貴重な方です。今後よろしく。あなたの質問に答えます。自費つまり個人出版です。ネットで調べると、やはりベストセラーなどは夢のまた夢、書店に並べるのは名刺代わりになるだけと示します。コロナ禍のなかですが宅に訪問できませんか。新しい本を贈呈します。返礼などと

気を遣わずに。山村さん一目されてどんなものですかね。若干修正を利かしてあります。時期尚早ではありますが、卒直なところお聞かせ願えれば。ホームページ信実、見て下さっているんですね。ありがとうございます。山村さん父子様、これからもご健勝を深く祈らせていただきます。

コロサイ人への手紙

第1章 15節

御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生まれたかたである。

おわりに

「最早、お前の周囲に愛は広がった」、私のこれからの執筆は趣味として存在するだけであると聖書は示す。「それは善かった。神の国、永遠の命、幻の中、事実としてはつきり見える。」皆、素直に生きようよ。目の前の人を尊重しよう。愛の言葉をもつて。放蕩息子が帰宅し、父親は喜ぶ。真面目な兄は面白くない。父はずっと兄と共に居たではないか。兄は正義に病む必要はない。回心した弟の為、父親と一緒に盛大にお祝いをしてあげよう。それが愛だよ。真の正義、神の義である。

ご精読ありがとうございます。

長井さんはじめ、印刷、製本に携われたスタッフ、皆さんに感謝をささげます。

「本当にありがとうございます」。

またお会いするまで

さようなら

義人（ヨシト）

愛をあたえたから
愛をあたえなかったから
愛を奪ったから
愛を奪わなかったから
この世は不条理か
因果応報か
誰かが自分を
支えてくれた
自利に生きるか
利他に生きるか
どちらも大切と
想えた時
大人となり
愛の存在を
この街で
実感するのである。